

# SGRA REPORT

SGRAレポート No. 110

## NO. 110

ISSN 1346-0382

第20回 SGRAカフェ／第73回 SGRAフォーラム／第22回 SGRAカフェ  
連続3回シリーズ

# パレスチナを知ろう



## パレスチナを知ろう

### ■ 各シリーズ開催の趣旨

#### シリーズ1：第20回SGRAカフェ

「パレスチナについて知ろう：歴史、メディア、現在の問題を理解するために」

パレスチナは中東の重要な地域であり、イスラエルとの紛争や国際社会との関係が注目されています。しかし、多くの人はパレスチナの実情や人々の声を知らないまま、偏った情報や先入観に基づいて判断してしまうことがあります。シリーズ1では、パレスチナの歴史的背景やメディアの表現方法を分析し、現在の問題に対する多様な視点や意見を紹介しました。パレスチナについて知ることで、平和的な解決に向けた理解と共感を深めることを目的としています。大切なのは、同じ地球市民の一員として、この問題がこのままでいいのか、どうあるべきなのかを考えること、そしてそれに基づいて、何ができるか考え、実際に行動することではないでしょうか。シリーズ1はその出発点となるように、パレスチナ問題の歴史や現状、メディアとの向き合い方などについて、皆さんと一緒に考えました。

#### シリーズ2：第73回SGRAフォーラム

「パレスチナの壁：「わたし」との関係は？」

シリーズ2では専門家、パレスチナ出身者、パレスチナ支持の活動を行っている学生の声を取り上げ、なぜこの問題が全ての人にとって重要なのか、そしてその問題を取り上げようとするときに直面する壁について話し合いました。

「壁」という言葉には複数の意味が込められています。一つは、パレスチナ問題について公然と話すことを阻む見えない壁であり、タブーと言論の自由への抑圧を象徴しています。もう一つは、パレスチナ領土での継続的なアパルトヘイト（人種隔離）と植民地化の結果として存在する物理的な分離の壁です。世界中での学生の抗議活動は、これらの見えない壁を取り壊す試みであり、パレスチナ問題に対する公開討論を促進する力となっています。これはパレスチナ問題に対する新たな視点を提供すると同時に、世代間の意識の違いとその変化を示唆しています。

このフォーラムを通じて、参加者がパレスチナ問題に対する多面的な理解を深め、グローバルおよびローカル、マクロとミクロな視点からアプローチする機会になることを期待しています。

#### シリーズ3：第22回SGRAカフェ

「逆境を超えて：パレスチナの文化的アイデンティティ」

これまでは国際政治やパレスチナ問題の現状に焦点を当ててきたことを踏まえ、シリーズ3では文化、文学、芸術にスポットライトを当てました。

パレスチナに関するニュースは戦争や紛争に偏りがちですが、パレスチナ人には逆境の中で形成された独自で多様な文化的アイデンティティがあります。パレスチナの文学や芸術は民族が国家を奪われ、自決権を認められず、土地や文化の喪失を経験してきた中で、「故郷」をどのように捉えているかを映し出しています。

パレスチナの芸術や文学がいかにして平和的な抵抗の手段となり、抑圧や占領に対抗する一つの形となっているのかについても探求しました。メディアでは語られることのないパレスチナの別の側面をご紹介します、このシリーズがポジティブな視点で終わることを目指しました。

## SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

## SGRAかわらばん

SGRA フォーラムなどのお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。

[https://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration\\_form/](https://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/)

# パレスチナを知らう



はじめに 5

## シリーズ1

### 第20回 SGRA カフェ

## 「パレスチナについて知ろう： 歴史、メディア、現在の問題を理解するために」

日 時 2024年2月3日（土）14：00～15：30

会 場 渥美国際交流財団ホールおよびオンライン

言 語 日本語

主 催 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

#### 【講 演】

パレスチナ問題の基礎知識：歴史と政治的構図の要点を抑える 8

ハディ ハーニ（明治大学）

※シリーズ1・2共通

#### 【質疑応答・ディスカッション】

パレスチナについて知ろう：歴史、メディア、現在の問題を理解するために 25

司会：シェッダーディ アキル（慶應義塾大学）

オンラインQ&A担当：徳永 佳晃（東京大学）

発言者：ハディ ハーニ（明治大学）

シリーズ1 あとがきにかえて シェッダーディ アキル（慶應義塾大学） 39

## シリーズ2

### 第73回 SGRA フォーラム

## 「パレスチナの壁：『わたし』との関係は？」

日 時 2024年6月25日（火）17：30～19：00

会 場 昭和女子大学学園本部館3F 大会議室およびオンライン

言 語 日本語・英語（同時通訳）

主 催 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

総司会：シェッダーディ アキル（慶應義塾大学）

開会挨拶：今西 淳子（渥美国際交流財団／SGRA）



#### 【発表①】

パレスチナ問題の基礎知識：歴史と政治的構図の要点を抑える 8

ハディ ハーニ（明治大学）

※シリーズ1・2共通

|                 |                                                                                                               |    |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 【発表②】           | 建築の支配：植民地主義の武器としての建造環境                                                                                        | 42 |
|                 | ウィアム・ヌマン（東京工業大学）                                                                                              |    |
| 【発表③】           | 立ち上がる学生、クィア、環境活動家たち：<br>2023年10月以降の東京のパレスチナ解放運動                                                               | 50 |
|                 | 溝川 貴己（早稲田大学）                                                                                                  |    |
| 【質疑応答・ディスカッション】 | パレスチナの壁：「わたし」との関係は？                                                                                           | 57 |
|                 | モデレーター：徳永 佳晃（日本学術振興会）<br>オンラインQ&A担当：郭 立夫（筑波大学）<br>発言者（発言順）： ハデイ ハーニ（明治大学）<br>ウィアム・ヌマン（東京工業大学）<br>溝川 貴己（早稲田大学） |    |
|                 | シリーズ2 あとがきにかえて 郭 立夫（筑波大学）                                                                                     | 65 |

## シリーズ3

## 第22回 SGRA カフェ 「逆境を超えて： パレスチナの文化的アイデンティティ」

日 時 2024年10月5日（土）11：00～12：30  
会 場 渥美国際交流財団ホールおよびオンライン  
言 語 日本語  
主 催 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）



|                 |                                                                     |    |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------|----|
| 【講 演】           | 逆境を超えて：パレスチナの文化的アイデンティティ                                            | 68 |
|                 | 山本 薫（慶應義塾大学）                                                        |    |
| 【質疑応答・ディスカッション】 | 逆境を超えて：パレスチナの文化的アイデンティティ                                            | 84 |
|                 | 司会：シェッダーデイ アキル（慶應義塾大学）<br>オンラインQ&A担当：銭 海英（明治大学）<br>発言者：山本 薫（慶應義塾大学） |    |
|                 | シリーズ3 あとがきにかえて 銭 海英（明治大学）                                           | 94 |

登壇者略歴 97

おわりに 98

※第73回 SGRA フォーラム同時通訳  
金 美穂（同志社大学）、奥川 舞（フリーランス）

※所属・肩書は本フォーラム開催時のもの。

## はじめに

[原文は英語、翻訳：金 美穂（同志社大学）]

パレスチナの人々の闘いは、時折勃発する軍事衝突や外交的な行き詰まり、あるいは地政学的な駆け引きなどに関する報道に見る様に、ごく断片的に語られることが多い気がします。しかし、こうした見出しの背後には、レジリエンスや歴史的記憶から正義に対する不朽の探求までもをテーマとする人間の実に深遠な物語が隠されているのです。このことを念頭に置いて、私たちはパレスチナの現実のさまざまな側面（歴史的、政治的、心理的、文化的）を探究する三つの連続シリーズを企画しました。本レポートは、これらのイベントから得られた洞察と議論をまとめたものであり、主流の言説を超えてパレスチナについての全体的な理解を提供するものです。

このイベントの発想は、ニュアンスを汲み取りながらより深く掘り下げてパレスチナを議論する場の提供を促進する、という緊急な必要性から生まれました。日本を含む世界の多くの地域で、パレスチナ問題はしばしば誤解されたり、占領と抵抗の歴史的かつ継続的な構造を否定した偏った議論に終始したりしています。さらに、パレスチナをめぐる議論は、政治的な躊躇や思想的な分裂、あるいはテーマそのものから感じざるを得ない心の負担、といった様々な障害に直面することも少なくありません。従って私たちは、こうした障壁を取り払い、学問、直接体験、そして文化的表現に根ざした知識をもとに率直で自由な対話の場を作ることを目的として掲げたのです。

このシリーズでは、差し迫った危機のみに焦点を絞ったり、紛争を抽象的な地政学的問題として扱うのではなく、パレスチナを歴史、アイデンティティ、人権の主題として捉え直すことを考慮したものです。そうすることで、参加者の方々が有意義な形で批判的かつ倫理的にこの問題に取り組むことが可能となり、その姿勢が初めて自己内省と連帯の機会を提供しうると考えたからです。

この三回にわたるイベントの構成としては、まず歴史的・政治的な基礎分析から始まり、パレスチナに対する世界的な認識を形成している心理的又は思想的な障壁の検証、そして最後にパレスチナのアイデンティティと抵抗の文化的表現へという流れになっていますが、互いに補完し合うように企画の段階で考慮されています。



## 1. 「パレスチナについて知ろう：歴史、メディア、現在の問題を理解するために」

第1回目は、パレスチナの闘争の歴史的背景の根幹、認識の形成におけるメディアの役割、そして現代的人道的・政治的危機について掘り下げることで基礎固めを行いました。ハディ ハーニ先生は、パレスチナの軌跡、国際法の複雑さ、占領のメカニズムについて、歴史的・法的事実に焦点を当てながら、詳細かつ分かりやすい洞察を提供し、参加者を導かれました。このセッションは、事実関係を明確にし、主流派の論説に浸透している一般的な誤解を解く上で極めて重要なものでした。

## 2. 「パレスチナの壁：『わたし』との関係は？」

歴史的・政治的背景を踏まえた上で、第2回目のイベントでは、パレスチナに関する世界的な議論を長年形作ってきた心理的・イデオロギー的な分裂について考察しました。私たちのテーマにある「壁」は、文字通り物理的に隔離された壁に加え、パレスチナ問題への有意義な関わりを妨げている恐怖、誤った情報、政治的タブーといった、目に見えない障害から成る壁の両方を象徴しています。ハディ ハーニ先生による基調となる講義に続き、パネリストが植民地主義、アクティビズム、都市計画に関するさまざまな視点を発表しました。ウィアム・ヌマンさんは、占領の空間的側面を探求する中、建設と都市計画がいかに抑圧の道具として機能しているかを説明し、溝川貴己さんは、日本における学生運動によるパレスチナへのアドボカシーが、国際連帯、人権、政治的言説の形成における若者運動の役割など、より広範な議論をどのように喚起してきたかを論じました。本セッションでは、これらの複数のテーマの交差点を考察することによって、参加者が自らの立場のみならず、これらの障壁を継続させることもあれば障壁に対して抗うこともある国際的アクターの役割をも批判的に評価できるよう促しました。

## 3. 「逆境を超えて：パレスチナの文化的アイデンティティ」

最後のイベントは、文化、文学、芸術に焦点を移し、パレスチナのアイデンティティは抑圧によってのみ定義されるのではなく、独自の創造性や伝統、そして人々のレジリエンスによっても定義されることを強調しました。パレスチナはしばしば、紛争というレンズを通してのみ表現されますが、そうすると、占領や移住にもかかわらず繁栄してきた豊かな芸術的・知的伝統がないがしろになってしまいます。山本薫先生は、文学、音楽、視覚芸術がいかに強力な抵抗の形体として機能し、植民地的な抹殺に直面しながらも集合的記憶を保存し、パレスチナ人のアイデンティティを肯定しているかについて探求しました。このセッションでは、芸術表現が、主流メディアの描写を超えてパレスチナをより深く、より人間的に理解することにいかに貢献しているかを紹介しました。

このシリーズは、決して単純な答えを提供することを意図したものではなく、批判的な関与、倫理的な考察、そして有意義な行動を促すことを目的としたものでした。各イベントは、講演会場や報告書の枠を超えて、進化し続ける対話に貢献しました。教育、活動、文化交流のいずれを通してであれ、このシリー

ズが参加者にとって、パレスチナを遠い問題ではなく、正義、人権、そして世界的連帯の根本的な課題としてとらえるきっかけとなったのであれば、嬉しいかぎりです。

この報告書をまとめるにあたり、私たちの議論は始まりに過ぎないと認識しています。パレスチナの正義への道のりは長く、複雑であることは間違いありません。にもかかわらず、知識、対話、連帯を通して、私たちは障壁を支える物理的そして思想的な壁にも対抗する役割を果たすことができるのです。この報告書が、私たちの対話の記録であると同時に、パレスチナとその人々と関わり続けるための行動への呼びかけとなりますように、願ってやみません。

企画担当

シェッターデイ アキル



【シリーズ1】  
講演【シリーズ2】  
発表1

# パレスチナ問題の 基礎知識： 歴史と政治的構図の要点を抑える

ハディ ハーニ

明治大学

※編注：第20回 SGRA カフェの講演『パレスチナについて知ろう：歴史、メディア、現在の問題を理解するために』をもとに、第73回 SGRA フォーラムの発表①「パレスチナ問題の基礎知識：改めて歴史と政治的構図の要点を抑える」の要素を加えて再構成しました。

## はじめに

まずは全体像をつかむために基本的な歴史的経緯の話から始めたいと思います。最新の情勢ですとか今後の見通しですとか、そういう話もちろん重要なのですが、全体をどう理解するかを踏まえた上で報道なり最新の情報に接していただく形で進めないと、受け止める情報にも偏りが出てしまうと考えているからです。その後、政治的な構図を考える上で要点となる部分について考えていきたいと思います。

最初に、今回パレスチナ問題に改めて注目が集まっている背景を整理します。パレスチナ自治区と呼ばれる地域の中には大きく二つの地域があります。去年（2023年）10月7日にそのうちの一つであるガザ地区を実効支配している組織のハマスがイスラエル領内への越境攻撃を実施しました。これに対してイスラエル軍も報復と称して空爆及び地上作戦を開始し、双方に多数の死者が発生しています。これがおそらく一番一般的な理解だと思います。現在の時点で判明しているところでは、イスラエル側の死者は1200人を超えるくらいでこの中には軍人も含まれています。ガザの方は戦闘員を含む3万5000人以上が亡くなっていますが、実際の数字はそれ以上ではないかと考えられていますし、現在も増加している状況です（編注：数字は2024年6月現在）。

世界中が注目していることはご承知の通りですが、我々が関心があるのは主にパレスチナ側への連帯運動です。これが日本でも活発化している状況ですが、正しい連帯運動がその効果を高めながら拡大していくためには、その基礎となる正しい知識を知ることが決定的に重要だろうと考えています。根底にある認識が歪んでしまうといくら最新情報を吸収しても正確な理解にはつながらないと思いますし、善意が背後にあったとしても、究極的な紛争解決の障害になりうる危険があるからです。もちろん私が何もかも知っていて私の言うことが全て正しい理解だなどと言うつもりはないのですが、一応専門家として責任ある立場から、それを語らせていただけたらと考えています。

私個人の立場を申し上げますと、私は日本生まれ日本育ちの研究者ですが、日本人とパレスチナ人のハーフで、かつムスリムでもあります。だからといって、私がパレスチナ人のムスリムだからハマースを徹底擁護するとかそういうことではありません。党派性や民族性などとは関係なく、あくまで国際的に共有された規範的な観点に立ってこの問題を見ていますし、学者の端くれとして歴史的な部分に関しては当然実証的な歴史学的研究の成果に基づいてお話しします。その上で「平和と共存を望んでいる全ての人を支持します」という立場であることを明らかにした上で、お話ししていきたいと思います。

## 1. 「イスラエル問題」史

よく「パレスチナ問題」と言われますが、イスラエルが問題だということをはっきりさせておきたいので、あえて言うなら私は「イスラエル問題」だと思っています。イスラエルとパレスチナのたどってきた経緯は、本来なら90分の授業を15回やっても足りないくらいの話なのですが、頑張って15分ほどで解説いたします。

スライド1を御覧ください。最初の部分はまだ神話の時代といえますが、史実であったかどうかには諸説ある範囲なのですが、少なくともユダヤ教徒の大部分がこれを信じているという意味では重要な情報になってきます。

まず紀元前13世紀頃に、今パレスチナと呼ばれている辺りの地域でユダヤ教が成立して王朝を持つに至りました。その後、ヘロデ朝と呼ばれる王朝まで複数の王朝が興亡しつつ、ローマの支配下に落ちます。その時代が長く続くのですが、一神教の世界観と多神教の世界観との軋轢がなかなか埋まらず、宗主国の

### 15分解説：「イスラエル問題」史①

| タイムライン   | 西洋での出来事                                                     | パレスチナでの出来事                                      |
|----------|-------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 1300BC～  |                                                             | パレスチナ地方にて、ユダヤ教が成立。以降、ヘロデ朝まで複数の王朝が興亡しつつ、ローマ支配下に。 |
| 60AD     |                                                             | ヘロデ朝の後、宗主国ローマに反乱するも鎮圧される。ユダヤ教徒は世界中に散逸（ディアスポラ）   |
| 7CE      |                                                             | イスラーム帝国（正統カリフ時代）が支配下に置く                         |
| 中世～近代    | 西洋のユダヤ人たちはキリスト教社会に同化せず／できず、長らく迫害を受ける（ <b>ヨーロッパのユダヤ人問題</b> ） | 特にオスマン朝時代、パレスチナではキリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラーム教徒が概して平和裏に共存 |
| 19CE     | ユダヤ・ナショナリズム＝ <b>シオニズム</b> が盛んに。パレスチナで国家建設を目指す（移住開始）         |                                                 |
| 1910～20s | <b>シオニスト</b> ら、英三枚舌外交を受けパレスチナへの移住・入植を本格化                    | <b>英三枚舌外交</b> により、パレスチナは独立せず英植民地（委任統治）に         |
| 1930s    |                                                             | 増加するユダヤ人移民と、もともと住んでいたアラブ人＝パレスチナ人社会の間で摩擦拡大       |
| 1940s    | 第二次世界大戦後、ホロコーストを受け、ユダヤ人移民がさらに増加。背景に西側諸国の同情も                 | ユダヤ人民兵組織等も登場。武器密輸なども。パレスチナ人との衝突、および英政府に対する攻撃が激化 |

スライド1

ローマに対して幾度となく反乱を起こすものの最終的に鎮圧されてしまっ、聖地であったエルサレムへの立ち入りを禁止されてしまいました。紀元60年頃のことです。ユダヤ教徒はそれを機に世界中に散逸するという事件が起こります。これは一般的にディアスポラと呼ばれています。この紀元60年頃までの経緯は、史実性に乏しく諸説あるわけですが、重要なのは現代イスラエル国家の国民であるイスラエル人、あるいはシオニストと呼ばれている人たちが、素朴にこれは実際にあったことだと信じていて、それがイスラエル建国の理念のコアに位置づけられていることが重要かと思います。

その後7世紀頃にイスラーム帝国が起こり、最初の4人の正統カリフの時代にパレスチナ地方をイスラーム帝国が支配下に置くようになりました。その後イスラーム王朝は、ウマイヤ朝、アッバース朝、マムルーク朝、オスマン朝と変遷していきます。近代に入るころのオスマン朝の時代までは、イスラーム教徒の支配下でということではあるのですが、パレスチナの地域ではイスラーム教徒とキリスト教徒、ユダヤ教徒が概して平和裏に共存する時代が数百年続いていました。

一方、ディアスポラとなったユダヤ人がたどった歴史として、ヨーロッパに移り住んだユダヤ人がたくさんいました。ヨーロッパはキリスト教社会です。西洋のユダヤ人たちのほとんどがキリスト教社会に同化できず、あるいは同化せずに長らく迫害を受けてきたという歴史があります。ヨーロッパではこれをユダヤ人問題と表現して、いろいろな観点から議論されるなどしたわけです。

19世紀頃になると、フランスなどを中心にナショナリズムという考え方がヨーロッパで起こり、その文脈の中でユダヤ人の間でもナショナリズムが盛んになります。これが一般的にシオニズムと呼ばれているものです。ユダヤ人という民族としての共同体を構想して、父祖の地として見ているパレスチナ地方での国家の建設を目指して、それを機に19世紀頃から盛んに移住を開始していく時代が始まります。1910年代から20年代頃、第一次世界大戦の時代です。主なきっかけがイギリスの三枚舌外交だというのは結構有名な話ですが、パレスチナ地方はオスマン朝が崩壊した後も独立することはできずに、イギリスの植民地という形になっていました。名前としては委任統治ですが、事実上の植民地です。シオニストのロビー活動の成果もあって、「国民国家（ナショナル・ホーム）の建設を応援します」ともとれる宣言をイギリス政府がしたため、このイギリスの三枚舌外交に乗じてパレスチナへの移住・入植を本格化していったのが1920年頃です。

1930年代から40年代にかけては、パレスチナで増加するユダヤ人の移民と、そこに住んでいたアラブ系の人たち、後にパレスチナ人としてナショナリティを発展させていく人たちの社会の間で摩擦が発生して、それが大きくなっていきます。特に1940年代の第2次世界大戦の時代に、主にポーランド、ドイツあたりでホロコーストが起こり、ユダヤ系の移民がさらに活発化しました。西側諸国はある意味その反省からこれを後押ししていくという状況が生まれました。パレスチナの方では拡大した移民の中でユダヤ人の民兵組織なども登場し、パレスチナ人との衝突が拡大していきます。また、イギリス政府に対しても攻撃が激化していく、そういう時代に入っていきます。

スライド2を御覧ください。この辺りからかなりややこしいことになっていき



## 15分解説：「イスラエル問題」史②

| タイムライン       | パレスチナ/イスラエルでの出来事                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1947/11～48/5 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第二次大戦後、英植民地は相次いで独立。パレスチナは国連に移管され、<b>国連分割決議採択</b>。</li> <li>・そもその不公平に加え、人口・領土比の不公平を理由にアラブ側反発。シオニスト側は容認。</li> <li>・4～5月、強硬派シオニストらが先駆けてパレスチナ人に対する<b>民族浄化</b>作戦を展開（ダレット計画）。大量の難民が発生（＝ナクバ）。</li> <li>・5月、イスラエルが一方的に独立を宣言。</li> </ul>                         |
| 1948         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・パレスチナ周辺各国が連合軍を形成しイスラエルに攻撃（<b>第一次中東戦争</b>）。更なる難民発生。</li> <li>・アラブ連合軍敗退&amp;パレスチナ難民発生。分割決議の提案する境界線より広い地域をイスラエルが併合</li> <li>・<b>国連総会決議194号で認められた難民の帰還権をイスラエルは現在まで拒絶</b>。</li> <li>・この時、ヨルダンが併合した地域＝「<b>ヨルダン川西岸地区</b>」、エジプトが併合した地域＝「<b>ガザ地区</b>」</li> </ul> |
| 1967         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第三次中東戦争にて再びアラブ軍が敗退。西岸・ガザもイスラエル軍事占領下に。＝<b>占領地撤退を命じ難民の帰還を認める国連安保理決議242号を現在まで無視</b>。</li> <li>・以降シオニストによる<b>占領政策・入植活動</b>激化。＝<b>イスラエルの国際人道法（ジュネーブ条約等）違反</b>。</li> </ul>                                                                                    |
| ～1980s       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・アラブ諸国、次第に政治的に「引き揚げ」。</li> <li>・パレスチナ系政治・武装組織が主導権を握る。</li> <li>・民衆主体の非武装蜂起（インティファダ）が占領地で拡大。<b>ガザでイスラーム主義組織ハマース発足</b></li> </ul>                                                                                                                          |
| 1990s        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・湾岸戦争発生。結果的にパレスチナ問題が国際社会の目を引く。</li> <li>・双方の和平派による暫定自治合意（＝<b>オスロ合意</b>）。占領地で暫定自治が開始。</li> <li>・しかしその内容の欺瞞性から、双方の反妥協/和平が活発化。ラビン首相暗殺やヘブロンでのパレスチナ人虐殺事件など発生。</li> <li>・パレスチナ系非妥協派グループ（ハマース含む）、対イスラエル攻撃を開始・激化。</li> </ul>                                     |

### スライド 2

ます。1947年、第2次世界大戦を終えてイギリスは各植民地から撤退していきませんが、ユダヤ人とパレスチナ人の紛争状態を抑えることができなくなってしまい、最終的に国連に統治を移管することになりました。任せられた国連は分割決議を採択して、二つの国に分けましょうということを言ったわけです。ですが、元々そこに住んでいたパレスチナ人側からすると、そもそもなぜ我々の民族自決が認められずに分けないといけなのかという話になります。それに加えて分割決議の内容も、人口と領土比の観点から言うと不公平じゃないかというわけです。アラブ側は我々の方が人口でもマジョリティなのに領土は半分を切っている、不公平だということで反発しましたが、シオニスト側はこれを容認する結果になりました。それを受けて最終的にイスラエルが独立を宣言するわけですが、その直前1948年の4月から5月にかけて、強硬派のシオニスト、過激な人たちがパレスチナ人に対する民族浄化作戦を開始しました。この事件はのちに判明して、公文書からも明らかになっていることなのですが、ダレット計画と呼ばれた作戦です。これにより大量の難民が発生しました。パレスチナ人はこれをカタストロフ／大破局を意味するアラビア語で「ナクバ」と呼び、口伝えなどでその記憶を語り継いできました。それがようやく実証的な歴史研究によっても裏付けられてきています。ただ、歴史認識の問題というのはなかなか複雑で、完全にそれを転換するところには至っていません。

ともかくそういった事件があったので大量のパレスチナ人の難民が発生し、その上で1948年5月にイスラエルが一方的に独立を宣言しました。それに対してパレスチナの周辺各国は連合軍を形成してイスラエルに攻撃を仕掛け、第一次中東戦争が勃発します。イスラエルの独立宣言を宣戦布告と見なして攻撃を開始したわけです。これでさらにパレスチナ人の難民が発生してしまいます。しかもア

ラブ連合軍は事実上敗北してしまい、結果的に国連が提示していた分割決議よりも広い地域をイスラエルが併合することになりました。これに関してこの当時、国連総会決議194号で難民が帰還する権利を認めているのですが、イスラエルは現在までそれを拒絶しています。今でもよく聞くヨルダン川西岸地区と呼ばれる地域はこの時にヨルダンがかりうじて併合しました。ガザ地区の方はエジプトが併合して、その間で停戦ラインが引かれることになります。残りの地域はイスラエルが得るということになったわけです。

その後、1967年ぐらいまでの20年ほどの間に第二次中東戦争、スエズ戦争などが起こったり、あるいはパレスチナ系の政治組織／ゲリラ組織がたくさん登場したりします。代表的なものとしては、イデオロギー的には世俗民族主義的なファタハ、アラファト議長が後にリーダーシップを取るPLO（パレスチナ解放機構）、それから共産主義系のイデオロギーを持ったPFLPといった組織が登場してきます。こうして、イスラエルとの緊張関係はずっと続いていくわけです。

1967年になると第三次中東戦争が起こり、再びアラブ軍が負けてしまいます。今度はエジプトとヨルダンが抑えていた西岸地区もガザ地区も両方ともイスラエルの軍事占領下に置かれてしまいました。国連安保理決議242号では、イスラエルに占領地からの撤退を命じ、かつ難民の帰還を認める内容になっていますが、現在まで無視されている状態です。撤退しないどころか、シオニストによる占領が続いている中で、さらに入植活動が激しくなっています。2000年代に入ってから度も重なる国際法違反が指摘されて、安保理決議なども出ている状況です。

1980年代頃になると度重なる敗北を喫したアラブ諸国はだんだんイスラエルとの直接対峙ができなくなっていく。国内でも問題を抱えたり、経済的な問題が生まれたり、アラブ諸国同士の政治的な問題を抱えたりして、イスラエルの問題から引き上げていく時代に入ってしまいます。その代わりにパレスチナ系の武装組織とか政治組織がだんだん主導権を握り、その流れの中で組織だけではなく民衆が主体となって主に非武装の蜂起、これをアラビア語でインティファダと呼びますが、これが占領地内で拡大していきます。こうした動きの中で、ガザ地区ではいわゆるイスラーム主義を掲げる、もともとは社会互助組織であったハマスがガザ地区で発足します。これがだいたい1987～88年頃のことです。

1990年代になるとイラクとクウェートの湾岸戦争が発生します。この時、アラブ諸国がクウェート側の立場を取るのか、あるいはイラクのフセイン側の立場につくのかといったことで結構割れてしまい、当時パレスチナ人のリーダーだったアラファトがそこで煮え切らない対応をしたばかりに、お前らはフセイン側につくのだなということになってしまいました。それで結果的にクウェートに出稼ぎに来ていたパレスチナ人の資金の送金が（これは結構パレスチナ人の命綱だったのですが）、凍結されるといった事態になり、パレスチナ人にとってかなり大きな転機にもなってしまったのです。イラクのフセインは、俺たちがクウェートから撤退しないとイケないのであれば、イスラエルもパレスチナから撤退するべきだろうというようなリンケージ論を展開したことがきっかけで、イスラエルに対して攻撃をしたりしました。結果的にフセインは多国籍軍に撤退させられることにはなったのですが、パレスチナ問題を



放っておくと同じようなことになりかねないといった機運が高まり、国際社会の目を引くようになりました。非武装の住民が戦車に向かって石を投げて抵抗するといったインティファダのイメージも衛星放送などを通じて世界中に共有されましたので、パレスチナ問題をどうにかしなければということになっていったのです。

結果的に、パレスチナとイスラエル側の双方の和平派による暫定自治に関する合意、オスロ合意と呼ばれているものですが、これが1993年頃に締結されて、1995年ぐらいから占領地内で暫定自治が開始します。ただ、この内容がかなり中途半端でした。最終的な解決を目指して何年もかけて少しずつやっていこうという内容だったので、この合意によって安保理決議242号で撤退するように言われている地域の占領の事実をいったん受け止めることになり、ある意味制度化してしまう内容でもありました。例えば有名なエドワード・サイードなどは、「これは基本的に降伏文書だ」と言って批判しました。エドワード・サイードは強硬派というわけではないのですが、彼以外にも両社会における反妥協勢力あるいは反和平勢力が活発化する結果になったのです。和平をとりつけたシオニスト左派のラビン首相がシオニスト右派の青年のテロによって暗殺されてしまったり、ヘブロンというパレスチナ自治区の町でパレスチナ人に対する大量虐殺事件が起こったりしました。それに対してパレスチナ側の非妥協派のハマースなどが対イスラエル攻撃を開始して激化していく時代へと、いわゆる暴力の連鎖みたいなことが強まってしまいました。

スライド3を御覧ください。2000年代前半には、イスラエルとパレスチナ双方で過激な非妥協派が台頭してしまって和平が進展しない。双方に不平と不満が募った結果、シオニストの方では右派で強硬派の政治家、アリエル・シャロン

## 15分解説：「イスラエル問題」史③

| タイムライン         | 出来事                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2000s 前半       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・イスラエル/パレスチナ双方で非妥協派が台頭。和平進展せず、双方に不満と不安が募る。</li> <li>・シオニスト右派政治家シャロン、緊張高まるエルサレム「神殿の丘」訪問を強行。</li> <li>・一気にパレスチナ人の抵抗運動が激化（<b>第二次インティファダ</b>）。</li> <li>・イスラエル、治安維持の名目で占領地を包囲する「分離壁」建設。⇒国際法違反（ICJ勧告意見、国連総会非難決議を無視）。</li> </ul>                                                                                                                                                       |
| 2000s 後半～2010s | <ul style="list-style-type: none"> <li>・パレスチナ自治政府評議会選挙実施。しかし予想外のハマース勝利。</li> <li>・パレスチナ和平派、およびイスラエルや国際社会もこの結果に反発しハマースを追い込む。</li> <li>・パレスチナで内戦状態に。以降、<b>ガザ地区のハマース⇒西岸の自治政府（最大勢力ファタハ）が決裂</b>。</li> <li>・以降、選挙は実施されず（自治政府ではアッバース議長による長期独裁が継続）。</li> <li>・イスラエルではシオニスト右派が台頭（ネタニヤフ首相による断続的な長期政権）。</li> <li>・2005年、ガザから入植地が撤退。2007年から封鎖。⇒人道危機発生。⇒イスラエル国際法違反の指摘</li> <li>・ガザ地区からのロケット攻撃、イスラエルの報復攻撃が激化。⇒双方の国際法違反の指摘。</li> </ul> |
| 最近             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ガザを中心とする戦争状態が頻発（特に2008～09、2014、2018、2021）。</li> <li>・西岸地区でも占領政策が継続・激化。複数の暴力行為・弾圧が発生。</li> <li>&lt;現在&gt;</li> <li>・2023年10月、ハマースが大規模なロケット攻撃、および越境攻撃、人質の拉致等を実施。</li> <li>・イスラエルの大規模報復により一般市民・非戦闘員にも多数の死者が発生。⇒双方の国際法違反の指摘。</li> <li>・国際司法裁判所（ICJ）がジェノサイド防止のための暫定措置をイスラエルに命令。</li> </ul>                                                                                           |

さらに学ぶために：

- ・臼杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』2013年、講談社（新書）
- ・鈴木啓之・児玉恵美編著『パレスチナ/イスラエルの〈いま〉を知るための24章』2024年、明石書店（ソフトカバー）
- ・R・ハーリディー『パレスチナ戦争：入植者植民地主義と抵抗の百年史』2023年、法政大学出版局（ハードカバー）

スライド3



が、緊張が高まっていたエルサレムのいわゆる聖地、神殿の丘と呼ばれているところへの訪問を強行し（イスラエルの法律ではユダヤ人には立ち入りが禁じられている）、これが一つのきっかけとなって一気にパレスチナ人の抵抗運動が激化します。これは第二次インティファダと呼ばれています。イスラエルはこの時のインティファダに対抗する形で、占領地をぐるっと囲むコンクリート製の高い壁を治安維持という名目で建設します。分離壁とかアパルトヘイトウォールとか呼ばれている壁です。2003年頃にこれも国際司法裁判所などから違反しているといった勧告が出たりしているのですが、それも無視されている状態です。

2000年代後半に入ると、アメリカなどの圧力もあって、まずはパレスチナの政治改革だということで、自治政府の評議会選挙を行いました。和平派はここまで失敗続きだったということであまり予想されていなかったのですが、ハマースが勝利してしまいました。パレスチナの和平派及びイスラエルもハマースの勝利を歓迎していませんし、アメリカも歓迎していませんでした。ただ、残念ではあるのですが、和平なんかに期待していたらどうにもならないという機運がパレスチナ人の中にもあったのです。わりと強硬な立場を維持していたハマースが勝つという状況が発生したわけです。この結果にパレスチナの和平派およびイスラエルも当然反発します。国際社会もこの結果に反発してハマースを政治的に追い込む形になり、パレスチナの内部で内戦状態に陥ってしまったわけです。この時期以降、ガザ地区はハマースで、西岸地区では自治政府の最大勢力のファタハ、これが決裂する状況になってしまいました。それ以降、選挙は実施されていません。自治政府では、アラファトを引き継いだマフムード・アッバースという方が事実上の長期独裁を継続しています。イスラエルの方でもハマースが勝利したことでシオニスト右派が台頭してきました。和平がどん詰まりですから、ハマースなどに対抗できる政治家が選ばれる状況になってしまって、ネタニヤフ首相を中心として主に右派ブロックの政治家が政権を握る状況がずっと続いています。

2005年ころにまた一つの転機がありました。ガザ地区へのイスラエル人の入植を完全に撤退させることになり、それを経て2007年からは完全にガザ地区を封鎖することになりました。その時期から、人や物資の出入りがかなり制限されるようになって、いわゆる人道危機がガザ地区を中心に発生するようになってしまいました。これに関しても国際法的な問題が指摘され、それを受けてガザ地区からハマースなどを中心に、ロケットなどでイスラエル側へ攻撃するようになりました。イスラエルはこれに対して正当防衛だとして報復攻撃を行い、攻防が激化しています。これに関しては双方が国際法に違反していると言われています。

2010年代頃から現在に至るまでこういったことがあって、つまり、ガザは封鎖され、そのフラストレーションでガザから攻撃が来る、それに対して軍事的に報復するというような形で起こる戦争状態は、2008年から2009年にかけてのものとか、2014年、2018年、2021年頃など散発して起こってきました。西岸地区でも占領政策が継続かつ激化していて、入植活動もどんどん拡大しています。2021年や今年の上半期なども、パレスチナ人によるテロ攻撃及びそれに対する報復テロが発生するという事態が頻発しています。

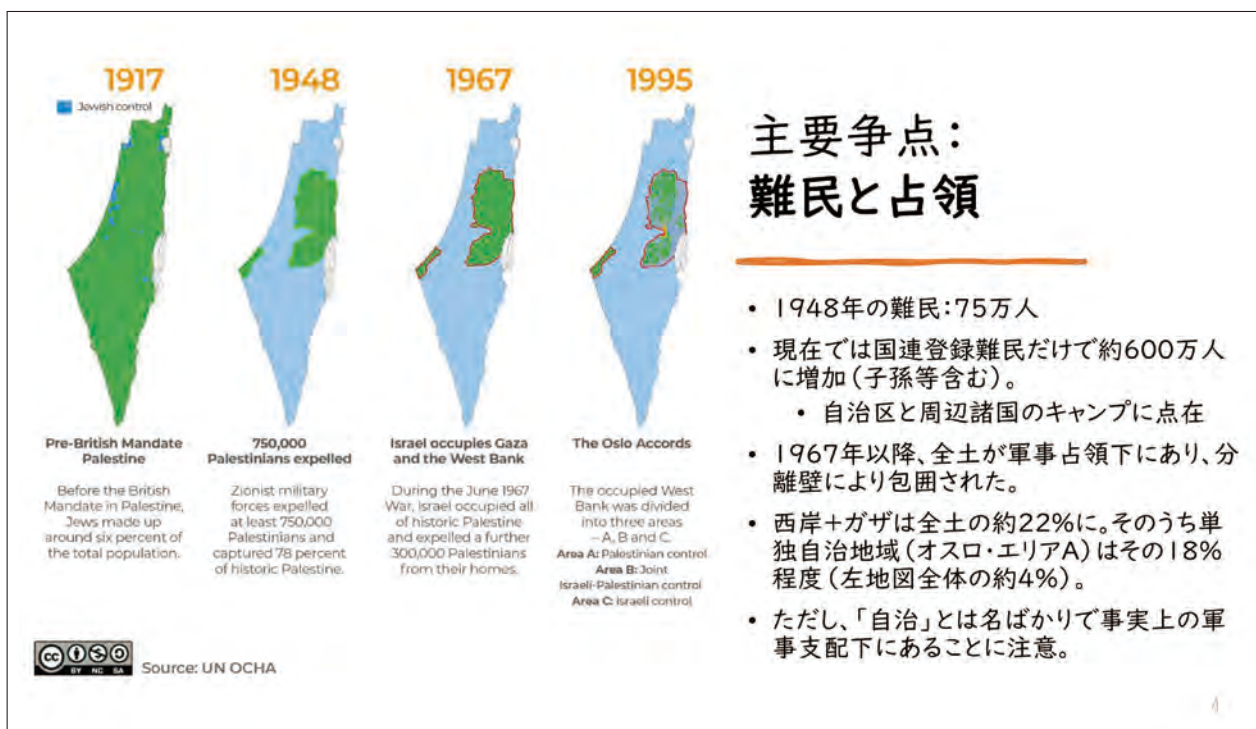
この流れの中で、2023年10月にハマースが同じパターンで大きなロケット攻

撃を仕掛けました。これまでと違ったのは、完全に囲まれている壁を乗り越えて、イスラエル領内への越境攻撃を仕掛けたこと、そして人質を拉致したことで、完全にイスラエル側の怒りに火をつけた形になりました。イスラエル側も当然大規模な攻撃を仕掛けて、非戦闘員である一般市民にも多数の死者が発生しています。これに関しても双方とも国際法違反が指摘されています。

2024年1月に入って国際司法裁判所は、そうは言ってもイスラエル側の攻撃は過剰だと、まだ起きているとは言い切れないけれどもジェノサイドに当るのではないかということで、それを防止するための暫定措置を命じる裁定を出しました。ジェノサイド認定ということにはならなかったのが煮え切らない結果ではあったのですが、法的には一歩前進したというところで、現在に至ります。スライド3の下部に少し参考文献も紹介しておきましたので、ご参照ください。

## 2. 「イスラエル問題」の前提として

主要な争点を改めて確認しておく、やはり一番重要なのは「難民」と「占領」この二つです（スライド4）。とりわけ1948年に発生した難民が大体75万人ほどもいます。その子孫などを合わせて現在国連に登録されている難民だけで600万人を超える数があります。パレスチナ自治区の中にも、周辺諸国の中にもいわゆる難民キャンプというのがあって点在している状態です。1967年以降はパレスチナ自治区と呼ばれている地域も全土が軍事占領下にあります。2000年代以降は壁でぐるりと囲われている状態もプラスされました。西岸とガザ地区、この緑色のエリア（編注：色の濃い部分）というのはパレスチナ全体の約22%で



スライド4

す。そのうち、オスロ合意でパレスチナ人の単独自治が認められている地域、エリアA、B、Cというのがあるのですが、エリアAに当たる部分はその22%の中の18%程度です。全土から考えると4%ぐらいしかパレスチナ人が実際に自治できている範囲はないのです。しかも、自治というのも結局名ばかりであって、事実上の軍事支配下にあるということが指摘されています。それを図で表すとこのような感じで、小さくて見にくいかもしれませんが、緑の細切れになった地域の中に押し込められる形で生活している状態が続いているというところが争点です。

ここで少し脱線して日本人の身に置き換えて考えてみたいと思います。日本も第二次世界大戦後、アメリカの占領下である意味植民地的な支配を受けていた時代がありました。もしもこのとき、例えば日本は聖地だから今こそ帰還したいという民族がいたとして、それを宗主国のアメリカが承認し、移民が増加したとします。日本人はそれに何らかの方法で抵抗するのですが、やがて武力衝突に発展し、それに手を焼いた宗主国のアメリカが撤退。国連が分割を提案してきます。それに乗じて、移民してきた民族が一方的に独立を宣言するという事態になったとします。これに対して日本人はどのように対応するかということです。ハマースみたいな勢力が宗教に基づいて抵抗するにせよ、あるいは自衛隊をもって抵抗するにせよ、あまりそこに本質的な違いはないと思いますが、なかなかそのことがパラレルに認識できないという問題があります。図示するとこのような状況です（スライド5）。北海道の端っこ九州ぐらいの地域しか残されていないと。パレスチナは今このような状況になっているわけです。このように自分たちの身に引きつけて考えてみると、思うところは違ってくるのではないのでしょうか。

さて、話を元に戻します。私はパレスチナの歴史的な経緯と基本的な争点をあまり単純に考えてしまうとまずいと考えています。要はイスラエル人とパレスチナ人、2アクターの紛争と見てしまうと見誤るのではないかと考えていて、最低4アクター・2レベルの紛争としてみるべきだと思っています（スライド6）。先ほどの経緯でも少し紹介しましたが、パレスチナ陣営にも非妥協派で強硬派のハマースと基本的に多少妥協してでも和平したいと考えているファタハ、イスラエル陣営にも主流派の非常に力を持っているシオニストの右派と、和平を考えなくもない左派で分かれているわけです。そして、紛争に関しては二つのレイヤーがあります。例えば10月7日以降続いている、俗っぽい言葉で簡単に言うとドンパチです。ドンパチのレベルです。表層-戦術レベルと表現していますが、実態的な軍事的な衝突のプロセスやその結果のレベルと、それ以前の構造-戦略レベルです。これは例えば軍事的にどちらが勝ったとかとは関係なく、最終的な目標とか方針などを指しています。民族的に何を目標としているとか、そういったことです。これから詳しく解説していきますが、大きくこの二つのレベルで考えた方が良く考えています。

ここで前提としてテロリズムという言葉について先に抑えておきたいと思います。これも気を付けないといけない言葉の一つです。

私はテロリズムという言葉は正確な理解を曇らせる要注意ワードだと思っています。まず前提としてこの言葉に関する学術的な合意はありません。当たり前の



## アナロジーの検討



- 日本が宗主国アメリカの植民地だった時代…
- 「日本列島は実はわれら〇〇民族の聖地だった。今こそ帰還し、失われた神殿を再建しよう!」「土地なき民に、民なき土地を!」
  - 米政府承認のもと移民増加。やがて武力による侵略に発展。
  - 手を焼いた米は撤退、日本人は孤立無援…国連が分割を提案する中、〇〇民族は一方向的に独立を宣言。
- その時、日本人はどう対応するか?
  - 侵略者に正当性はあるのか?
  - 国連による分割提案は正当か?
  - 自衛隊や抵抗運動はテロリストか?

スライド 5

## 前提：構図の捉え方

- 単純化の危険性を踏まえ、最低4アクター・2レベルの紛争としてみる。



スライド 6



ように使われていますが、実は学術的な使用に耐え得る概念ではないのです。非常に危険な言葉です。

一般的には「ある集団に恐怖をもたらし、それによって特定の政治的目的を実現するために暴力を意図的に使用すること」という理解です。簡単に言ってしまうと政治的意図を持った暴力です。そして「テロ＝悪い」と考えるのは、論理的には非常に短絡的な思考です。例えば、日本には「勝てば官軍、負ければ賊軍」という言葉があるように、立場が変われば意味も変わります。パレスチナ人にとっては解放の英雄かもしれないし、イスラエル人にとっては大量虐殺犯かもしれません。テロは悪くないと言いたいわけではありません。「いたずらに和平を妨げ、罪のない人々の命が失われる」という意味において、はじめて「悪」とみなすべきだと考えています。パレスチナの文脈で言えば和平を妨げる、それから罪のない人々の命も失われる、こういう意味において初めて悪と考えるといけないと思います。

テロの主体に関しても国際政治学などの分野での合意はありません。非国家主体に限るのか、あるいは国家も含み得るのかという点についてはいろいろな議論があります。ただ、国家テロというのを認める立場も一般的にあるのです。私もこの立場を取らないとこの定義の意図するところが一貫性を持ってないと考えています。一般的な報道などを見ると、非国家主体の暴力＝テロみたいな感じになっている気がします。では、イスラエル側がやっている暴力はテロではないのかということです。非国家主体に対する一方的なレッテル張りには政治的に用いられる傾向が強いので、報道の面ではそもそもこの語は使わないという立場をとるところも増えていて、BBCとか日本のメディアもそれに追随しています。ただ私は、注意した上であえて使うのであれば、今回の衝突で言えばハマースは確かにテロリストですし、イスラエルもテロ国家です。そうでなければダブルスタンダードになってしまうと言っているのです。それを踏まえて次なる争点は、どちらのテロがより大きな問題かという対称性の問題です。

### 3. 表層-戦術レベルの実態

まず表層戦術的なレベルで何が起きているかなのですが、今回の衝突に限って考えます。つまり、10月7日以降に何が起きているかです。まず、ハマースがやったことは、非戦闘員に対する無差別の殺戮です。遺体を見せしめにしたりと、人質を拉致したりとかですね。国際法的な観点に立てば、これは違反だという裁定が出ているわけではありませんが、一般的に違反しているだろうと見られています。一方、イスラエルがやっていることは何かというと、正当防衛だと正当化はしていますが、結果的には報復という名の無差別殺戮ですし、二次被害も完全に容認されてしまっているし、意図的にインフラを遮断するみたいなことをしています。これも戦時国際法に違反すると言われています。この状況をイスラエルやアメリカは「対テロ戦争」だと表現したりしていますが、先ほどの理解も含めて言えば「テロ対テロ」と言わなくてはいけないし、「テロ＝悪」である

とするなら「悪対悪」です。さらに言えば、これは後で国際法の話を少し紹介しますが、開戦の理由ですね。戦う理由とそれから戦い方、これは国際法的には分けて考えられるのですが、被害の規模の大小というところも含めて言えば、はっきり言って小悪と巨悪なのです。この非対称性をひっくるめて報道されてしまいがちなのです。しかも、これは10月7日以降に限った話ではなくて、半世紀以上続いている非対称性が鍵になっています。私はいつも言っているのですが、はっきり言えば国際社会はハマースもイスラエルもテロリストと見なさなければならぬし、双方の行動を容認してはならないと考えています。ただ、その上でもイスラエル側にはより大きな責任があることになるでしょう。ただ、少なくとも一方的にテロというレッテルを張るのは非常に恣意的であるし、独断的でもあります。紛争の非対称性を隠蔽してしまうことに繋がります。少なくともどっちもどっちという問題で片付けるべきではないということは大きなメッセージになると思います。

## 4. 構造-戦略レベルの実態

### ①パレスチナ

もっと裏のレイヤーで、「構造-戦略」レベルで起こっていることを考えてみます。これはパレスチナ側とイスラエル側で分けて考えていきますが、まずパレスチナ。全パレスチナ人のおそらく誰に聞いても納得するだろうという戦略的な目標は、これは私の博士研究の焦点でもあったのですが、まず「占領からの解放」です。それから「基本的な人権を含む基本的な諸々の権利の回復」。これがパレスチナ人の基本的な目標であり戦略的ゴールです。ここに集約して良いと思います。自決権というのは基本的な人権を構成する重要な要素と見なされていたりしますから、逆に言うと「現在はそれら（自決権）が制限されている」、つまり基本的人権が侵害されている状態です。おそらく国際的な規範に照らせば、そういうパレスチナ人の戦略的目標に疑義を挟む余地はないということだと思います。ただ、これを目指す過程や制度形態に関しては複数の立場があるわけです。いわゆる穏健・和平派のファタハなどは、二国家解決を基本的な立場としていて、イスラエルとは和平交渉してどこかに落としどころを見出したい。ただ、強硬・非妥協派とも呼べるハマースなどは、最終的には宗教的規範に基づく国家を樹立したい。だから和平交渉には否定的です。そもそも全土がパレスチナでなければならないということを最終的には目指していきたいのです。現状は一応段階的に二国家案も容認するという形にはなっていますが、最終的に見ているところは少し違っています。

両者ともたぶんこのレベルの目標ということで言えば共通している。ただ、目標は一致していても、その過程とか手法の面では対立している。これがパレスチナ政治の基本的な機能不全を説明する要素です。シオニストの右派もこうしたパレスチナ政治の分裂を結構戦略的に利用してきた面があります。別に陰謀論的なことを言っているわけではなくて、実際複数の資料とか政治家の発言とかを

見ていると、公然の事実になっている部分です。いわゆるディバイド&ルールなどと表現されたりしますが、相手方を分断させ、それによってうまいこと押さえておくというような戦略ですね。

それから近年では、特に2020年以降、周りのアラブ諸国（主に湾岸諸国）とイスラエルとの国交正常化が相次いで起こっています。湾岸諸国の側から見れば経済的な動機や安全保障、イランを見据えてなどいろいろな理由があるわけですが、イスラエルとの接近が進んでいて、結果的にパレスチナ問題が「不公正な形で紛争解決が清算されるのではないか」といった懸念が広がっています。

## ②イスラエル

一方、イスラエル側の戦略的目的の本質はなにかというと、シオニズムというイデオロギーです。要はユダヤ人のナショナリズムですが、その戦略的な目標は「ユダヤ人によるユダヤ人のための排他的な民族自決と安全保障の維持・促進」におそらく集約できると思います。ただ、この過程や制度形態に関してはやはり複数の主張があります。

現在政権を握っている極右ブロックも含む右派政権は、1967年以降一貫してヨルダン川西岸地区とガザ地区を軍事的占領下において、パレスチナ人の分離独立及び難民の帰還に反対、阻止しつつ、さらに入植を拡大してきました。

占領という言葉は日本語的にもマイルドですし、英語で言ってもオキュペーション、それほど攻撃的な言葉には聞こえにくいのですが、これも実態を見ていくと非常に多様な物理的及び制度的な暴力の構造体とでも呼べるものです。例えば自治区への入植活動もそうですし、恣意的にパレスチナ人を逮捕・拘禁できる、集団的な懲罰を行える。トライアルなしで無期限にパレスチナ人を拘禁しておける制度、行政拘禁／administrative detentionという言葉がありますが、非常に悪名高い制度があります。それから、分離壁によって移動が制限されていたり、あるいは社会インフラの破壊とか遮断を行ったり、こういったことを含む人権の徹底的蹂躪が占領という言葉で表現されているわけです。当然これは軍事力によって強制的に維持されているわけですから、巨大なテロ構造だと私は表現しています。国際法においても、この状態は国際法に違反しているだろうといった指摘はされ続けていますし、国連決議などでも非難は続いているのですが、基本的に無視されています。ガザ地区は西岸地区よりもさらにひどい状態です。「天井のない監獄」とよく表現されているように、完全に封鎖された状態で人道危機に瀕しています。

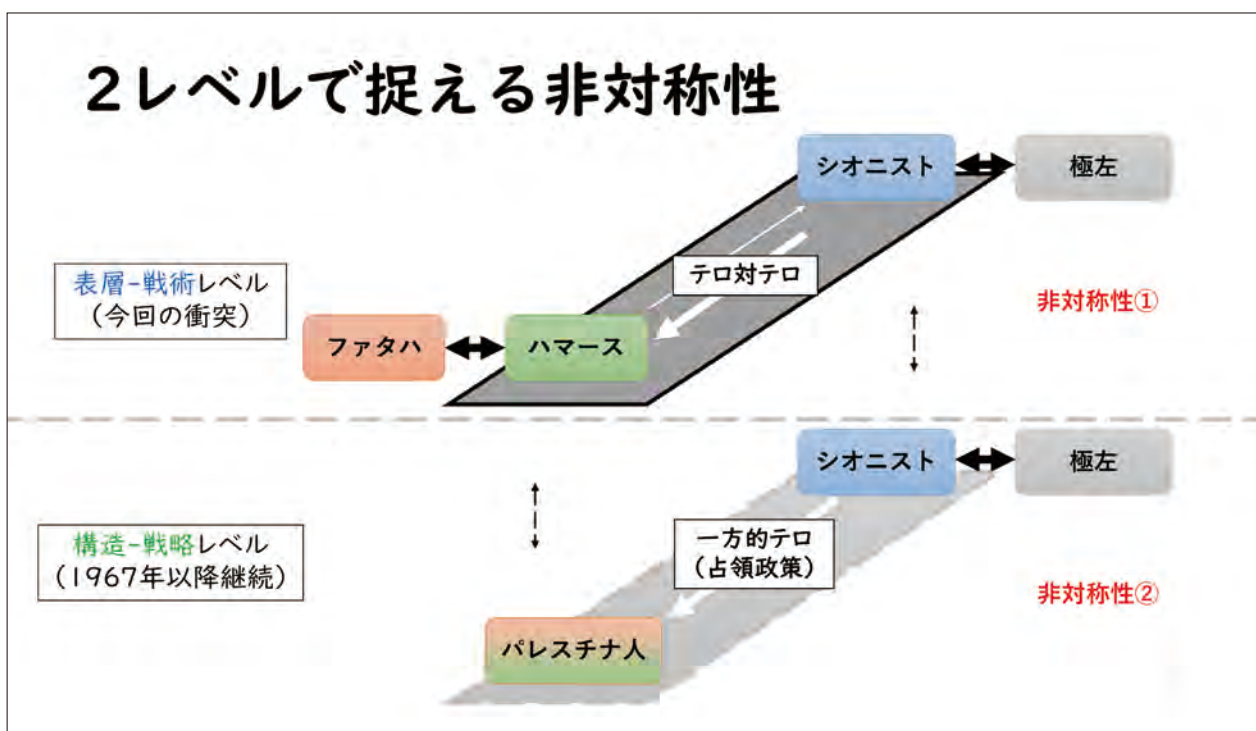
イスラエル側の右派の表現としては、パレスチナ人側には過激派がいるとか、あるいは政治的に分断されているのだからパートナーがいない、誰と和平の話し合いをしたらいいのか、話し合える代表がいない、そういったことを言うわけです。これは「ノー・パートナー」戦略と呼ばれているものです。ガザ地区がそのような状況だとハマース的なものがいくらでも湧いて出てくる。現在もハマース以外のジハードと呼ばれる組織などもありますが、イスラエルにとってはこのような状況はある意味軍事的には厄介なのですが、政治的にはプラスに働いているわけです。

では、左派は何をしているのか。シオニストの左派は、例えば入植活動を少し凍結したり、あるいは和平交渉を再開したりするとか、そういったことを言う場合があります。オスロ合意などは、一応左派と呼ばれているラビン首相が達成したものではありません。ただ、シオニストである以上、排他的なシオニスト的戦略目標においては一定程度通底していて、パレスチナ側のレッドラインとの妥協点が見出せない状態です。その結果和平を推進しきれず、逆に右派の台頭を許す結果になっています。

極左勢力と呼ばれる集団もいて、シオニズムの戦略的目標の修正、あるいは平和裏共存を最終的に視野に入れていています。国内外のユダヤ人の一部や、イスラエル内のパレスチナ人を中心にこのようなことを考える人たちがいるのですが、残念なことに政治的勢力として非常に小さい。特に右派が2000年代以降非常に台頭してきているため、それによって非国民扱いを受けるパターンが多いのです。イスラエルの人たちは元々移民がほとんどなので、二重国籍、三重国籍を持っている方も少なくありませんから、国外に移住してしまうケースが多いのです。そうするとどんどんイスラエルが右寄りの状態になってしまう状況があります。

## 5. まとめ

以上をまとめます（スライド7）。表層-戦術レベルから言うと、今回の衝突で起こったことはあえて言うなら「テロ対テロ」です。ただ、テロの大きさには圧倒的な非対称性があるということは言うておかねばならないし、和平派であるイスラエルの極左もパレスチナのファタハも、このことに何も対処できてない



スライド7



状況があります。

構造-戦略レベルで言うと、これは主に1967年以降ずっと継続していることですが、こちらはもう一方的なテロが、要は占領ということを通じてパレスチナ人側に右も左も関係なく加えられてきています。これに関しても非対称性があるといえます。結果的に全部シオニストの都合のいいように、はっきり言えば半世紀以上続いている状況があるわけです。これについては、1948年以降の経緯からいろいろ考えていかないと、まずそのハマースとシオニストというのが、同じレベルの同じ力を持った組織というか主体同士の戦争かのように思ってしまうわけです。そうすると、どちらも悪いよねという話になってしまうのですが、そういう簡単なものではありません。

以上のことをわかりやすく見るための補足として、国際法の観点から少しお話しさせていただきます（スライド8）。武力紛争法や戦時国際法などの分野に二つの重要な概念があります。「戦争をする理由」と、「戦争の手法」の良し悪しに関する概念です。

開戦の理由に関して言えば、先ほどもお話しした通り、パレスチナ人は基本的人権の構成要素であるいわゆる自決権が半世紀以上にわたって不当に侵害されています。これは司法裁判所の2004年あたりの裁定などでも認められています。そういう状況ですから、占領軍は侵略者だと見なすことができ、これに対する抵抗権が生じると一般的には見なされています。はっきり言えばパレスチナ人に戦争する正当な理由はあるのです。イスラエルの方は正当防衛を主張しているわけですが、イスラエルが犯している人権侵害の是正、要はパレスチナ人の抵抗権が生じている状態をまず治さないといけない。これはいわゆる強行規範と見なされているのです。強行規範は他の国も一緒になってやらなければいけない対世的

## 国際法の観点から

### ・戦争の理由 (*jus ad bellum*):

- ・パレスチナ人は、基本的人権の構成要素である自決権が半世紀以上に渡り不当に侵害されている。よって、占領軍（侵略者）に対する「抵抗権」が生じるとみなされる。
- ・今回、イスラエルは正当防衛を主張。しかし、イスラエルが犯す人権侵害の是正は強行規範 (*jus cogens*: いかなる逸脱も許容されない規範) とみなされ、対世的義務 (*erga omnes*: 国際社会全体に対して負う義務) でもある。この説に従うなら、正当防衛の合法性に先立って占領撤退が求められる。
  - ・ただし、強行規範の事例は規定されておらず各国間の合意に基づくため、議論の余地がある。
  - ・この場合、占領が終結し、パレスチナ人の自決が達成された後でもイスラエルが越境攻撃される場合、正当防衛が主張できる。
  - ・ロシアがウクライナ侵略⇒ウクライナ人が武力抵抗⇒ロシアが正当防衛を主張??

### ・戦争の手法 (*jus in bello*):

- ・ハマースの無差別ゲリラ攻撃、およびイスラエルの無差別爆撃や病院攻撃はいずれも国際法規範に反する。
- ・ただし両者の規模でいえば、イスラエルが圧倒的に大きな罪を犯している、また犯し続けていることは明らか。
- ・なおジェノサイド（特定の集団の破壊・抹消を意図した暴力）認定にはその「意図」の有無がカギとなる。このため立証・認定のハードルが高い。ICJ裁定では「認定」には至らず、「防止」のための暫定措置に留まった。
- ・なお国際法に対する違法性は裁定まで確定できず、適用については複数の見解がある。複数の専門家の見解に基づく「違法の可能性が高い」という指摘であることに注意されたい。

スライド8

義務でもあります。ただ、はっきりとした事例は規定されていませんし、各国間の合意に基づくとされているので議論の余地はありますが、国際法の専門家も一部はこの説を展開しています。この説に従うならまず正当防衛の合法性に先立って、占領から撤退することが求められています。要は占領が終結し、自決が達成されて自由になったパレスチナ人がそれでもイスラエルを攻撃してくるのであればイスラエルは正当防衛を主張できますが、そうはなっていないというわけです。だから、確かチョムスキー（Noam Chomsky）などが言っていたと思うのですが、パレスチナ人というのは侵略者に対する安全を保障することを求められている、そういう珍しい民族なのだということを言っています。例えば、現在ロシアがウクライナを侵略しています。ウクライナ人はそれに武力抵抗しているわけですが、ロシアがそれに対して正当防衛を主張するというのが通るかどうか、こういう問題ではないかという話です。

「戦争の手法」に関しても、ハマースの無差別ゲリラ攻撃やイスラエルの無差別攻撃・病院攻撃は、いずれも国際法規範に反すると考えられています。ただ、両者の規模で言えばイスラエル側が圧倒的に大きな罪を犯していることになります。しかも現在も進行中です。国際社会の衆人監視の中でそれが続いています。ジェノサイドという言葉に関しては、それを認定するには、その意図があるかどうかということが鍵になっていますので、それを立証するとか認定することは非常にハードルが高いのです。ですから、最近の国際司法裁判所の裁定ではその認定には至らなくて、そうならないように防止しようという暫定措置という形にとどまりました。ただ、それに準ずるものが今起こっているということは、国際司法裁判所の立場としても提示されているわけです。以上が国際法の観点からみた補足になります。

今の経緯を全部踏まえた上で、それでもどちらもどちらだと考える向きもあるかもしれませんが、それをやっていると結局抑圧者の側に口実を与えることになります。南アフリカの経験からもそういうことがよく言われたりしています。人権活動家のデズモンド・ツツ（Desmond Mpilo Tutu）も同じようなことを言っています。結果的に見えざるテロの方ですね。つまり、植民地主義的な占領構造だけが維持されることになってしまうのです。国際的な規範あるいは普遍的な正義があるとすれば、その側に立つことは、パレスチナ人の行動をすべて擁護することでもないし、イスラエル人の行動を全否定することでもありません。ただ、どちらにより大きな責任があるのかということ言えば、イスラエル側にそれがある、そう私は考えています。

つまり、この紛争を「どちらもどっち」とみなすことは、「非対称的なものを対称とみなす」ことを意味してしまうわけです。したがって、「中立・公正」とは言い難いし、結果的に抑圧者側に立ってしまうのです。

公正とか正義とか言うのであれば、まずイスラエル側の占領政策と、それを可能にしている非常に排他的かつ暴力的なイデオロギー、それらを可能にしている政治的な構造（特にアメリカの外交政策ですが）全体を問題にしなければいけないと考えています。

最終的に端的な結論としては、ハマースのテロは確かに問題です。そしてイス

ラエルの報復テロも問題です。即時停戦を求めないといけないのは間違いありません。ただ同時に、イスラエルの半世紀以上にわたって行われている一方的な構造的テロは、もっと大きなしかも最たる問題です。つまり、この紛争においては、結果的にはイスラエル、特にシオニスト右派に最も重大かつ決定的な責任があるというのが私の端的な結論です。

国際社会の中の市民社会の側からもやはり声を上げていきたいし、少なくともこれに共感していただける限りにおいて、政治的な行動にも反映して外交的な圧力の形成を目指したいところです。

最後に、「何かできることは」ということを必ず聞いていただくことがあるので先駆けて申し上げておくと、非常に網羅的にできることをまとめてくださっている有志の方がいらっしゃるの、ぜひこれを参考にさせていただいて（スライド9）、デモに行くといったわかりやすいことばかりではなく、本を読んで学ぶなどできることはたくさんありますので、ぜひやっていただければと思っております。

私からは一旦ここで終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。

## 参考文献

- ・ イラン・パペ『パレスチナ人の民族浄化：イスラエル建国の暴力』法政大学出版局、2017年。
- ・ イラン・パペ『イスラエルに関する十の神話』法政大学出版局、2018年。
- ・ ヤコヴ・ラブキン『トーラーの名において：シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』平凡社、2010年。
- ・ ラシード・ハーリディー『パレスチナ戦争：入植者植民地主義と抵抗の百年史』法政大学出版局、2023年。
- ・ 白杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』講談社、2013年。
- ・ 白杵陽・鈴木啓之『パレスチナを知るための60章』明石書店、2016年。
- ・ 鈴木啓之・児玉恵美『パレスチナ／イスラエルの〈いま〉を知るための24章』明石書店、2024年。（📖まずはここから!）

## 日本から私たちができる

### 🇵🇸 パレスチナ連帯行動 🍉

パレスチナ・ガザ地区における「即時停戦」、そしてイスラエルによるパレスチナの占領・封鎖を終わらせ恒久的な平和を実現させるための行動として、日本から私たちができるアクションをまとめました。



＼ 必ずできることがある ／

🏠 家からできること

🌍 外に出てできること

📖 学ぶこと

実践&拡散お願いします

スライド9



## シリーズ 1

## 【質疑応答・ディスカッション】

## パレスチナについて知ろう：

歴史、メディア、現在の問題を理解するために

司会：シェッダーディ アキル 慶應義塾大学

オンラインQ&amp;A担当：徳永 佳晃 東京大学

発言者：ハディ ハーニ 明治大学



アキル まず最初に、最近の報道について一緒に考えたいと思います。パレスチナの状態は、歴史だけではなく、現在直面している多くの課題を反映しています。ガザでの死者数が2万7000人を超え（編注：2024年2月時点）、その70パーセントが女性と子どもであることは、この危機がいかに深刻であるかを物語っています。このような状態は、紛争が人々に与える影響と私たちの対応が急務であることを表しています。

先ほどのハディ先生のお話にあったように、国連の国際司法裁判所（ICJ）は本年2024年1月26日、イスラエルに対し、ガザ地区でのジェノサイドを防ぐためにあらゆる対策を講じるよう暫定的に命じました。国際司法裁判所の最新の判断は、世界の政治や平和への取り組みに影響を与えます。この判断は国際法や人類の貢献について改めて考えさせるものです。また、アメリカ、日本、EUなどが、国際連合パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA / ウンルワ）などへの支援を停止したことも新たな問題を起こしています。この決定は多くのパレスチナ難民に影響を与え、私たちの人道支援、国際社会としての人道支援へ繋がります。日本がこの問題にどう対応するかを考える時に、外交と人道、報道のバランスをどう取るかが問われています。このような状態では、日本の取り組みが国際社会の連帯と責任ある行動の大切さを表しています。

今からの質疑応答時間は、平和と共存、そして人類への貢献について考えてみましょう。パレスチナの状態や国際司法裁判所の判断、ウンルワへの支援停止が、国際法、外交、そして人道的な取り組みにどう影響するかを議論しましょう。



この議論を通じて、平和や競争のために私たちがどのように貢献できるかを一緒に考えていきましょう。皆さんの積極的な参加を期待しています。それでは質問に移りましょう。オンライン参加の方々は、チャットか質問の機能でお願いします。財団ホールでご参加の方々は、質問がありましたら手を挙げてください。

徳永

よろしいですか。本日チャットからの質問を担当している徳永といいます。オンライン参加の方もチャットに書き込んでいただければ、私が読ませていただくのでどしどしご質問ください。それまでの時間のつながりも兼ねて私から質問させていただきます。

私は歴史を勉強しているのですが、この問題に関してはほとんど詳しい知識がありませんでした。ニュースを読んだり聞いたりするたびに非常に感情が揺さぶられることは多いのですが、本日はどうすれば理性的にこういうことを考えられるかということをたくさん学ばせていただきました。

ハディ先生の「表層と戦術」のレイヤーと「構造と戦略」のレイヤーを分けることに関して、確かにそうだと非常に勉強になりました。このようなスキームといますか考え方は、おそらく国際的なファクターを全部外されて、パレスチナ内に絞って考えておられるのだと思います。国際的な要素が入ってしまうと、イランとイスラエルの問題になったり、いつの間にか中国とアメリカの問題になったりして当事者がいなくなってしまうので、それは非常に正しい考え方だと思うのですが、同時にやはり国際的な要素もどこかで入れ込まなければいけないのではないかと思います。この「二つに分けて考える」という考え方が、国際的なファクターを考える時にも使えるのかどうかに関して、今の段階で何かお考えがあればお聞かせください。

ハディ

ありがとうございます。非常に重要な部分です。おっしゃっていただいたように、イランであるとか中国とかアメリカとかですね、非常に重要な役割を演じてはいるのです。特にもっと近くの湾岸諸国とか地域大国ですね、いわゆるトルコとかサウジアラビアとか。あえて今回はそれらを意図的に外したというか、その辺りのレイヤーはおそらく三つ目のレイヤーとして敷かなければいけないと考えています。表層的なレベルというのがおそらく1番表面化している紛争で、その背後にあるのがパレスチナ全体あるいはイスラエル人全体の戦略的なレベル。さらにその背後にあるのが、おそらく国際社会との連関というか、国際政治学的な繋がりの中でパレスチナ問題がどういう意味を持っているかというレイヤーになるのだと思います。

国際政治学的な説明というか、大国間のさまざまな思惑の中でパレスチナ問題を位置づけるという説明は、長期的にはすごく重要なことです。ただ、私はやはり本質的な部分は、どちらかというと先ほど説明していた2番目のレイヤー、構造・深層のレベルと表現している、そこをまず基準にした上で、表面の部分と、それから国際政治の部分を考えていかなければいけないという気がして、このような構成にしました。

もう少し時間があるパターンでお話しさせていただく時は、アメリカの役割な

どの話もプラスアルファで入れるなどしています。まさに1番鍵になっているのはアメリカの立場なのです。アメリカの立場プラス国際法規範をどう捉えるかといった問題にも繋がってきます。先ほどアキルさんがおっしゃってくれたように、ICJの裁定をどう捉えるかみたいなことも関わってきます。つまり、国際法、国際司法裁判所の裁定は一応拘束力を持つと一般的に理解されていますが、実際の拘束力というか強制力が働くかどうかというのはまた別の話です。つまり、アメリカなり日本なりが実体的なパワーを持ってそこに介入できるかどうか。介入するに十分な理由はあるのですが、誰もそれをやろうとはしないという状況があります。長期的に考えていくと、国際社会のシステムというか国際法規範の仕組みそれ自体が、大きなジレンマを抱えているところに行き着かざるを得ない気がします。つまり、法の統治みたいなことを結局貫徹できないというか、最終的には力の論理で、力がある側が望みを達成できるという仕組みになってしまっている気がします。長期的に考えると、そのレイヤーも三つ目のレイヤーか、もしくはさらに四つ目のレイヤーとして考えていけない部分だろうとは思っています。

徳永     ありがとうございました。オンラインで質問をいただきましたので、読み上げさせていただきます。まず一つ目ですね。

一般のパレスチナの方々はどのようにハマースを全面的にサポートしているのですか。

そもそも全面的にサポートしているかどうかも含めてお答えいただければと思います。

ハデイ     ご質問ありがとうございます。徳永さんから補足していただいたように、実は一般のパレスチナ人はハマースを全面的にはサポートしてないのです。とはいえ、ハマースをサポートする理由も確かにあるのです。このことを理解するためには、多分先ほど私が国際法の面でご説明したとおり、戦争をする理由のレベルと戦争のやり方のレベルで切り分けて考えないといけない話です。ハマースがイスラエルのやり方になぜ反対しているかは、多分全パレスチナ人が共感していると思うのです。パレスチナ人を飛び越えて、多分多くのアラブ人あるいは多くのムスリム、ムスリムでもアラブ人でもない人でも、イスラエルのやり方はおかしいと考えている人は、多分ハマースの考えていることにある程度共感する部分はあると思います。その意味ではハマースを支持するパレスチナ人は当然います。ただ、ハマースに反対する人たちの考え方、これはパレスチナ人の中にもたくさんいます。これは多分やり方がおかしいという観点です。要はイスラエルに武力で抵抗するというやり方です。そうは言ってもガザの方が軍事的に圧倒的に弱者なので、巨大な報復が返ってくることはハマースももうわかりきっていることなのです。あるいは封鎖がもっと厳しくなる、自分たちの生活がもっと苦しくなるということはわかっているので、その意味からハマースのやり方にはちょっと賛同できない。多分このジレンマを抱えているのです。ですから、これを理解するためには、ハマースを支持するかどうかということより、ハマースの戦略的目標を支持する

のか、戦術的なやり方を支持するかしらないのか、ここを切り分けて考えないと非常に理解が難しくなるということかなと思います。

徳永 オンライン参加の方からまた質問をいただきました。要約して読ませていただくと、現在、トルコの世論は大きく二つに分かれている。宗教的に同胞のパレスチナ人という考え方で親しみを持つグループとその反対の人たちと。つまり、パレスチナの人たちは宗教的な同胞なのだから彼らに共感する人たちと、そうでもない人たちということでしょうか。反対グループの人たちには、オスマントルコ時代にパレスチナ人がイスラエルに土地を売却したことがあったから、ある意味で土地に対するイスラエルの合法性は担保されているのだという主張がある。間違えていたら後で修正していただきたいのですが、そういう意見もあると。そもそもそのような歴史的な背景というものはあるのでしょうかというのがまず1点目の質問です。

ハディ これも確かに重要な事実ですね。実際、特に19世紀末から20世紀の初頭、いわゆる第一次世界大戦よりも前の時期に、パレスチナ人というよりその当時はオスマン帝国の臣民でその土地を所有していた大地主とかですね、名望家と言ったりもしますが、こういう人たちが主にヨーロッパから入植してくるユダヤ人に一部の土地を売却していた。これは事実です。実際資料もある。そのことを理由に結局は自分たちの責任ではないかという言説は確かにあります。とりわけシオニストも結構利用するレトリックです。ただ、私は全然矛盾していないと思っています。というのも、オスマン朝があった時代は、ユダヤ人もクリスチャンもムスリムも基本的に共存していた時代だったわけです。ムスリムからすれば、ユダヤ人を別に敵視などしていません。ヨーロッパで辛い思いをした人たちをオスマン朝で受け入れて住んでもらうことに関して、宗教的な敵対視とかそれをやってはいけないみたいな言説はほとんどなかったと思います。ただ、そうやって来たユダヤ人たちが、その後パレスチナ人のコミュニティを凌駕する形で、しかも軍事的にも、パレスチナ人の権利を抑圧する形でそのコミュニティを拡大していったことが問題なのです。元々ユダヤ人とムスリムが共存すること自体は、私は今でもそうであるべきだと思います。素朴にムスリムとして。だから別にイスラエル人ないしユダヤ人を追い出せなんてことは、多分ほとんどのムスリムは思っていないと思うのです。ただ、パレスチナ人ないしムスリムに対する侵略的な状況というのを是正しない限りそれは認められないという、こういうことなんです。ですから、そのことを踏まえるとわかりやすいのかなという気はします。

アキル では、一旦会場に戻ります。いかがですか。質問かコメントはありますでしょうか。

フロア1 お話ありがとうございます。日本の歴史に比べるともうあまりに複雑で圧倒されてしまって、質問も限りなくあるのですが、いくつか質問させていただきます。一つは特にガザ地区で、イスラエルの人も大変でしようけれど、ガザ地区で子ど

もたちが食べ物もない地下室で暮らしているのを見ると、本当にもう人間であることが情けなくなるような気持ちになります。端的にどうしたら今の戦闘をやめさせられるのか。やめなくてはいけないですよね、やめさせる方法はあるのでしょうか。仲介役をするとしてもどういう方法があるのか。日本の政治家も含めて日本は国際情勢が本当によくわからないと思うのですが、日本に何かできる役割はあるのでしょうか。それが一つです。

それから細かい質問ですが、ガザの沖合いに天然ガスが出るとか海底油田なのかわかりませんが、そんな事情が絡んでいるというようなことも聞きます。そういう事情は今回の事件と何か関係があるのでしょうか。

個人的な話で恐縮ですが、私の専門は仏教なのですが、ジョージ・オーウェル (George Orwell) の専門家でもあって彼の作品は全部読んでいます。彼が書いた『1984 年』も読み、彼が療養していたモロッコにも行きました。個人的に言えば、私はイスラーム教徒の方々に本当に一番親切にされた、そんな体験ばかりなのです。私の最初の就職先はマレーシア大使館でイスラーム教徒の世界です。私は仏教徒ですが、本当に快適な人間関係でした。個人的なことを言えばきりがありません。

どうしたら今の悲惨な状況を解決できるのか、今日のお話でもいろいろ出てはいましたが、改めてお聞かせください。

最後の質問は、今は時間もないのでお答えしづらいでしょうけれども、やはりジョージ・オーウェルも言うように、「戦争の目的は戦争だ」と言うほかないのか、妥協しないで勝つほかないというような状況もあります。アメリカ人の政治家は正直で、アイゼンハワーが辞任演説で言ったのを YouTube で見ることができますが、「実はアメリカで現時点で 350 万人の人が兵器産業に関わっている」のだということを率直に言っています。兵器産業ということは戦争が起こってくれないと困るのです。古い在庫がはけなくてはいけない。現にウクライナでは急に武器産業の株価が上がったとかいうことがあります。全部お答えにならないのですが、どちらか選んでお答えいただけたらと思います。

■ アキル      ありがとうございます。ハディ先生いかがでしょうか。

■ ハディ      国際社会の介入がないと、今のイスラエルのある意味ヒステリックな対応を止めるのは非常に難しいのかなという気がしています。

イスラエルの国内的な要因で言えば、あの国は国民皆兵でやっている国なので、50 万人、60 万人ぐらいの兵士が動員されている中の 30 万人ぐらいが予備役とされています。要はそれを何ヶ月も続けていくことは多分できないのです。社会のいろいろな部分がストップしてしまうので。その意味で、これまでのパターンでもそうだったのですが、何年もこの状況が続くということはおそらくないと思います。ある意味楽観的すぎるのかもしれないのですが、停戦はあり得ると思います。ただ、当然それを待っているべきではありません。おそらく直接 1 番実体的な介入ができるのは、アメリカなのです。ただ、アメリカはご承知の通り、イスラエルとは非常に深い関係があって、おそらくそれをやるには至らなそうで



す。すぐにはできない。ですので、今回のガザとイスラエルの衝突に関しては、国連ないし国際刑事裁判所、国際司法裁判所の裁定とか、あるいは国連決議とかを基に、国連の中で多国籍軍の直接介入などを正直期待はしてしまうのです。ただ、おそらくそれすらも難しい。そうすると、イスラエルの国内要因などをベースにしつつ、ハマースが湾岸諸国と協議をして停戦について少し議論をしているという話は報じられているので、例えば人質を全員解放するから休戦しようとかになって、だんだんなし崩し的に休戦から停戦へという、これまでのパターンと同様なのですが、こうして政治的にハマース側も妥協するというところで、手打ちにするしかないのかなと思います。ただ、その過程で、ハマースの幹部はもしかしたら、今1番狙われているヤヒヤ・シンワルという人がいますけれど、この人はおそらく首を取られることになると思います（編注：2024年10月に殺害された）。それをすれば、あるいはその過程で主にガザ地区の住民にもまた流血の惨事が起こるだろうということは容易に想像できます。

日本の役割としては、多分ヨーロッパやアメリカの立場に比べれば、比較的冷静な立場を取っていますし、かつ歴史的なしがらみのようなものもそれほど色濃くはない。そう考えると、直接日本が介入することは非常に難しいと思うのですが、例えば国連などで間に立つような役回りとか、そのくらのことは期待できるのではないかと思います。ただ、それで実際どうなるのかというのは、あまり楽観的には考えられません。

長期的に言うと、やはりアメリカに1番変わってほしいのです。その意味では今、アメリカ国民の世代間でのイスラエル支持が、めっきり変わってきています。年齢が高ければ高いほどイスラエル支持の方が強い。若い世代はそうではなくなってきたというといいます。今回のガザ衝突に関して、数ヶ月ぐらいのスパンでそれがどう影響するかというのは非常に難しい問題なのですが、この先数年、10数年ぐらいのスパンで考えた時に、アメリカ世論が変わっていく可能性はそれほど小さくないと思っています。

それからガザ沖の天然資源ですね。これは今回の開戦にはあまり関係していないと思うのですが、ガザに対する関与をイスラエルがやめられないことの背景にはなっていると思います。つまり、当然安全保障上の理由でガザに対する軍事的な支配を続けておきたいというもくろみは当然あると思います。ガザを国として独立させるとか、あるいはエジプトの領土にするとかそういったアイデアもあるのですが、それをした場合には、おそらくガザ沖の天然資源はエジプトないしガザに渡るということになってしまうので、イスラエルにとって1番理想的な解は、ガザを支配し続けた上でパレスチナ人がいなくなるようにする。それを戦略的にやってきたのがこれまでの経緯だったわけです。その意味では今回の開戦の決定的なファクターではないと思いますが、非常に重要な要素ではあり続けています。イスラエルの戦略的な目標にはなっていると思います。ガザ沖で算出される天然資源を買っているのは隣のヨルダンだったりするので、ヨルダン国内でもイスラエルと天然資源の協定なんて結ぶな、ということで、市民社会の方からも怒りが噴出している状況になってきています。ですから政治的にそんなにサステナブルではないのだと思います。そういう状況を考えると非常に重要な要素ではあるの

だけれども、イスラエルとしては手放したくない、そういったところが答えになるかと思います。

あとは、オーウェルは非常に面白くて、私も全部きちんと読み切ったわけではないのですが、『1984』には「newspeak / ニュースピーク」という概念が登場しますよね。これは現代のプロパガンダにも非常に大きな示唆を与えていて、例えば日本の報道でも、先ほど私の話でも出てきたテロリズムという言葉がどう使われているかみたいな問題とか、あるいは占領という言葉でなんとなくマイルドになってしまっているとか、そういったことにも関係している気がするので、改めてそういうのを紐解いて、啓蒙に利用させていただくことが重要になってくるかなと思ったりしています。ありがとうございます。

■ アキル      ちょっといいですか。ジョージ・オーウェルの newspeak の話で最近読んだ記事を思い出しました。イギリスの報道機関の BBC がガザの紛争が始まってから使っている用語を分析したという研究結果です。イスラエル側で使っている用語は、例えば誰かの娘とか誰かのお父さんとかが死んでしまいましたとか、子どもが虐殺されましたとかそういう用語を使うのですが、ガザの方はそういう言葉は全く使わない。子どもとは言わずに未成年と言うとか。

■ ハディ      あるいはガザ側の死者を数字に還元してしまうんですね。イスラエル人の死者は、何々という名前で何歳でこういう顔でといったことまでアピールするのに、ガザの方は数千人死亡みたいな形で数字に還元されてしまっていて、これはパレスチナ側からかなり問題視されています。当然国際社会でもそういうことが行われてしまったりしています。ですから、ガザを中心とした NGO に、「We Are Not Numbers (WANN)」という名前の NGO が発足したりして、要はまさにそういうことなのです。表象の問題というのが非常に大きく絡んではいます。主観的な問題ではあるのですが、ガザの住民がすごく顔の见えない存在になっていて、純粹に暴力的な存在、あるいは血の通ってない存在かのように表象されているようなことは、newspeak のこととかそういうことから示唆される問題かなとは思っています。

■ フロア2      よろしいですか。今のお話で少しは触れられているのかもしれませんが、表題にメディアとありました。戦場での使い方とかそういうことも含めてなのですが、それでは、メディアの何が問題であるのか。国際メディア、西欧メディア、アラブメディア、パレスチナメディア、イスラエルメディア、そのように分けて話されるか、それとも、もう少し大きくお話しになるかわかりませんが、メディアのご研究をなさっているということで、お考えを聞かせていただければと思います。

■ ハディ      ありがとうございます。時間的な制約もあるので全体的なことでお話しさせていただきます。特に国際社会のメディアの問題、日本のメディアも含むということだと思うのは、中立とか公正という言葉の理解の仕方とか、その表現

の仕方に問題があるような気がしています。

私の研究はディスコース（discourse／言説）がキー概念になっています。例えば「どっちもどっち」というか、この紛争のどちらが悪いのかといったことを我々は決める立場にはないみたいなことをなるべく強調するというか。聞いている側もそういうことを結構刷り込まれています。

平和ボケという言葉がありますが、私が最たる平和ボケだと思うのは、目の前で起こっているこの不均衡で非対象的な問題、別にどちらが悪でどちらが善という問題ではないのですが、何か不公正が行われていることに対して、そこから1歩引こうとする態度がおそらく平和ボケなのではないかと思うのです。要は、正しいとか正しくないということを保留してしまう態度というか、そこに立ち入らないことにある意味美德すら感じているということです。こういう態度が国際社会のメディアや日本のメディアに結構現れている気がします。別にどちらがかわいそうとかいう問題ではもはやないのですが、ではこのように行動すべきだということをメディアが言えなくなっている面は結構大きいと思います。

メディアの使命をどう理解するかにもかかっていると思うので、メディア側が自覚的なのであれば、最終的な方針の決定は当然、私が口を差し挟む部分ではありません。あくまで国際的な規範とか普遍的な人権みたいな概念を我々は共有しているのだという前提に立つのであれば、党派性とか宗派性を超えて、自ずとどう行動すべきかはある程度決まってくると思うのです。そうであるならば、おそらくメディアももう少し本当の意味で間に立つような報じ方とか表象の仕方が、自ずと決まってくるのではないかという気はしています。全体的なこととしてはそういうことです。

■ フロア2      例えばこれまでの報道で、ベトナム戦争でもアパルトヘイトでもなんでもいいのですが、そのような規範になるようなものがあつたか、メディアが役割を果たしたと思うことがありましたか。

■ ハディ      難しいのですが、わかりやすいところは国連決議とかですね。国際法を構成するいくつかの要素、例えば条約であるとか。ただ、それをどのくらい親身になって受け止めるかという問題。例えば日本がパレスチナとか、ベトナム戦争に対してもそうだと思いますけれど、結局それをポーズとして「これはよろしくない」という態度を示すとしても、実態を伴った行動に結びつけるかどうかには大きな飛躍があります。例えば一般的に経済制裁であるといったことが、非難決議の次の段階として、いわゆる国際的な強制力の一つのチャンネルとして用いられるわけですが、そこまではいかない。心理的な自制のようなものが働いてしまっているのかなと。日本の文脈で言えば、おそらく自制心のようなものの結節点になっているのは、アメリカとの関係であるとか中国とか、結局力を持った国の顔色を伺うというかですか。そういう論理が、共有されているはずの普遍的な規範の上位になってしまっているわけですね。

私自身は究極的にそういう規範を追求する精神はずっと忘れてはいけないと思うのですが、それを実現するための新しい規範とかガバナンスの形とか、これを

我々学術の立場から急務として考えないといけないと思っています。私はムスリムですが、イスラームにもそういう規範を示唆する考え方があるし、世界中のさまざまな思想にそういう萌芽があるわけです。これをきちんと拾い集めて繋ぎ合わせる形で、国際社会全体の仕組みを考えていかないと、本質的な解決には向かわないのかなという気はしています。お答えになっているかわからないのですが、以上です。

アキル     ご質問ありがとうございます。それでは、オンラインの質問に移ります。

徳永     オンラインでは3人の方にいろいろ質問をいただいています。あまり時間がないので共通していることをご質問させていただきます。第三者という言い方はそもそもないというのが多分先ほどのお話だと思うのですが、やはりそれでも直接対峙していないアラブ諸国や日本の人たちがどうやってアクションを取って効果的に関わっていくか。最後のプレゼンテーションでもお話があったと思うのですが、それに何か付け加えることがあればということで、よろしくお願いします。

ハディ     結局アラブ諸国の関わり方にしても、一つ言えるのは国民国家、主権国家としての関わり方と、市民社会としての関わり方は決定的に違うと思うし、違ってくると思います。国家の論理に関しては、先ほどの答えの中で触れたように、結局国際社会のしがらみみたいなものが、理想的な規範よりも上位に来てしまっているというジレンマがあると思います。ただ、市民社会として我々が追求できる部分はあると思うのです。それは宗教的理想でもいいし、国際法の支配みたいなことでもいいし、普遍的人権みたいなことでもいい。それは市民社会の側から追求していくことができると思います。そしてそれを行動に結びつけるという意味では、先ほど最後の最後にお話ししましたが、できることは色々あると思います。日本の国内世論に結びつけようということで、まずは自分が勉強することが1番重要だと思います。それを今度は市民的な行動に結びつけるということでは、デモでもいいと思いますし、あるいは、皆さんのお住まいの自治体の政治家にそういうメッセージを伝えるとかですね。SNSでいろいろ発信するのもいいですし、そういったことが結局、社会的な認識を構築するとか、変えるということに繋がっていくと思います。

それが今、国際的な規模で実際巻き起こりつつあります。それがどこまで行くかはわからないのですが、続けていかないと究極的にはいわゆる自然状態、純粋に力の論理で支配される世界になってしまう気がします。理性的人間としては、やはりこれまで人間が積み上げてきた規範みたいなものはそんなに捨てたものではないと思っていますので、1人1人できることからやっていく。それがどんどん大きくなっていけば、主権国家のロジックにも介入することになると思いますから、そこが重要なのかなと。ですから、これはある意味長期的な問題であって、今すぐガザをどうにかするということはなかなか難しいのです。むしろ今回のガザはそう長くないうちに、非常に悲惨な形ではあるけれども何らかの収束を迎えると思います。それでとりあえず良かったと思うのではなくて、もっと最終的で



本質的な解決に至るまで、我々1人1人が意識を高く持って行動を続けるということが重要になるのかなと思います。

30年のクールダウンの時間を、という意見は、せめてということでしょうし、意図としてはもちろん最終的に本質的解決を見たいということではあると思うのですが、クールダウンできれば良いということではないのです。その先、結局どうなるべきかということを、我々国際社会の市民1人1人が具体的にイメージして、それに向かっていかなければいけないと思います。漠然としたお答えになってしまうと思うのですが、以上です。

■ **アキル** では、私からも質問をいいでしょうか。私はモロッコ出身なので、アラブ人としてもずっと子どもの頃からパレスチナへの関心を強く持っています。よく覚えているのは、子どもの頃の第2インティファダです。家族と一緒によくデモに行くなどしていました。ずっとそういう二国家解決が取り上げられて、ちょうどその時期はまだ希望が強かった。オスロの平和協定が1993年で、両国に話しあえるパートナーがいました。その後、少し変な日本語かもしれませんが、イスラエル内部のサボタージュによって、お互い認めて平和に共存しようというのが難しくなっています。特に最近、国際人権機関によって、イスラエル国家はアパルトヘイトの国家という、意味的に強いレポートがあったのですが、自分的には二国家解決は難しいのではないかと思います。だからこそ、二国家解決ではなくて、例えば最近イスラエルとパレスチナの専門家は、二国家解決は今、難しいといえます。では、それができないのであれば、どんな解決があるのかという質問です。例えば、ある方法として、一つの国家だけれど二つの国籍を作ることなど、それはどうお考えになりますか。

■ **ハディ** これも最終的な考え方として非常に重要です。私の博士論文も焦点はここにありました。二国家案は多分無理でしょう。これは私以外の研究者も盛んに主張していることで、要はゼロサムゲーム的に土地をどこからどこまでで分けるかということをやってしまうと、当然資源の多寡という問題もありますし、あるいは聖地をどう分割するかという問題にもなります。パレスチナ人側からすると、そもそもなぜ分割しないといけないのかという、このそもそも論の意識が非常に強く残っていますし、イスラエル人側からも、大イスラエル主義という考え方があります。ナイル川からユーフラテス川までイスラエルじゃないといけないと、本気で考えている人たちがいるわけです。お互いのフラストレーションをとにかく落着けてという考え方もなくはないのですが、本質的ではないという気がします。逆にそういう気持ちが共存するガバナンスを構想できないのかと思います。要はイスラエル人側の主権とかあるいはパレスチナ人の主権というのが、今の国際社会の常識からすると相互にエクスクルーシブでないといけないという前提があります。要は排他的でないといけない。そうするとゼロサムゲームですよ。そうではなくて、主権でもいいしナショナリティーでもいいのですが、それが共存できるような形のガバナンスってできないかなと思うのです。それを歴史的に実現できていたのはおそらくイスラーム帝国です。このガバナンスは一つの重要な事例

じゃないかと思います。別に私は復古主義者でも懐古主義者でもありませんし、もちろん現代的なアップデートは必要になってくるとは思います、民族とか国民という単位それ自体が、究極的に考えていくと、多分人間の本質的な属性ではない。そう考えれば、それに基づいた新しい国家というのを構想できるのではない。それには排他的な主権があって、ここからここまではこの人たちの土地みたいにすること自体、限界が来ている時代だと思うのです。中東はそういう歪みが最も表面に噴出している地域だと思いますし、ロシア、ウクライナでも同じことが言えると思います。

そのように考えて長期的に見ると、パレスチナとイスラエルの問題というのはある意味チャンスだと思うのです。近代化が遅れていてあのようになっているわけではなく、むしろ国際システムの最先端の歪みが爆発している場所なのであって、その先を考えないといけないということではないのかと。そういう発想で究極的に言えば、私は一国家主義者です。どのようなナショナリティーだろうが共存できる一つの国になる。その時に鍵になるのは、ナショナルじゃないところに帰属意識を感じる事が重要と思うのです。究極的には、中東世界、イスラーム世界が一つに統一されるというところが、私の個人的な希望です。その発想がないと、多分究極的にこの問題は解決しないのだろうということに落ちてしまう気がします。日本と中国であるとか、中国と台湾の問題であるとか、日本とロシアの問題であるとか、そういったことにも結局同じような問題が発生しかねないですし、パラダイムシフトが必要とされているということを長期的には思っています。

フロア3 台湾出身の者です。今日は本当にたくさん学ばせていただきました。ありがとうございます。先ほどのお話ですごく印象に残ったのは、小悪と大悪という表現です。でも、私から見るとパレスチナという小悪が、あれだけ全部の力を出し切ったということなのですね。あの時はエネルギーの爆発だったのですね。マグマのような最大限の怒り。そういう爆発だと受け止めなきゃならない一つのメッセージだと受け止めました。それを今もみ消されて、つまり、先生のおっしゃった表面の戦争の戦術、もみ消されたのはもしかするとイスラエルの思惑かもしれないし、そうすると焦点がずれてしまって、根本的な人間の尊厳とか生き方とか、これからどうやって再建するのか、どうやって人間らしく生きられるかということなんですね。で、私も全然、全くわかりませんけれども、ハマスはきっとそれを承知した上で、あれだけ力の差があるのに、あえてそれをしなきゃならないというのは、もしかするともうチャンスがないというか、絶望的な人間の足掻きみたいなものなので、私たちがどうやってそのメッセージを受け取るかということなんですよ。その犠牲を無にはできない。私には絶対言う資格はないのですが、パレスチナ人は絶望しきっていて、数時間でもいいやというくらい諦め気分なので、世の中には誰も私たちに味方しない。見捨てられるような恐怖感とか絶望的なものなので、どうやって希望を持たせるかということなんですね。

あとはすごく気になるのは、パレスチナで自分を表現するメディアとか、自分を表現できるように教育を受けられているのでしょうか。小さい頃から自分の民

族はなぜこうしなきゃならないのかということを洞察する力を養うにはやはり教育が必要です。でないと永遠に弱者のままです。イスラエルは、世界中からいくらでもお金とか富とか、そういうのがあります。そういう教育の差とパレスチナの子どもたちはどうやって自分の認識を培うのか、それは、国際社会にもできることではないかと思います。

あともう一つ。先生は学ぶことが大切だとおっしゃいましたが、今発信されているような情報を私たちはどう選別するのか。どれが届くのかとか、その届け方というのは、先生が学術レベルでご覧になるとどうでしょうか。この分野のご研究で先生が入手されたデータや情報、それはどれほど正しい情報なのか、それをどうやって判断するのかとか、教えていただければと思います。

#### ハディ

教育とかの観点で言うと、私は先ほどまで散々、国連などには大したことができていないみたいなことを言っているのですが、アキルさんのお話にあった UNRWA というパレスチナ難民を支援する専門の国連機関があります。1948 年以降、UNRWA が設立されてずっと結構手厚い教育の支援などはやってくれています。アラブの中でもパレスチナ人は結構教育の水準が高いと言われているのは、非常に早い段階で、国際的な教育システムみたいなものを国連を通じて入れてきたからという説明がされるくらいです。厳しい状況に置かれていることは間違いないのですが、その意味で、世界中から良心を持った専門家などが現地に入って教育に当たるなどしてくれていて、いろいろな難しさを抱えている中ではあるのですが、ガザの人たちも頑張っていて、かつ自分たちのことを表現して、そういう厳しい状況の中で、ストレス・コーピングなどの手法を発展させたりもしています。

もう一つの要素は、多分ナショナリティーということになると思います。私はそれに対して結構批判的な立場ではあるのですが、自分たちの民族としての誇りみたいなもので、それを表現する媒体というかメディアというのは結構たくさんあります。例えばアラブでは昔から詩の文化などが発展していて、そういうものに乗せて世界中に発信するとかですね。あるいはアートの文化も豊かなものがあります。最近はガザの人も SNS などを使って発信できるような時代ですので、そういったことをやったりもしています。

もう一つは信仰だと思います。クリスチャンもちろんいますが、ほとんどがムスリム、イスラーム教徒です。究極的には、神と人間の 1 対 1 の関係というのがありますので、非常に大きな苦しみにさらされている中でもそれは神が下した試練であると。そしてその試練は基本的に超えられないものではない、そういう風に考えるわけです。死んだ後、天国か地獄に行くというのが基本的な一神教の考え方ですが、本当に罪のない人が殺されてしまった場合は、天国に行くことが決まっていることなので、その場合は別に心配はいらないと。要は来世という考え方を持つことによって、どんなにひどい現世の状況であっても心の中で折り合いがつく。これはある意味、人間として非常に最後のセーフティーネットというか、心の持ちようを決定する一つの要因なのかなと思います。ただ、そうは言っても、だから今起こっていることをなんでもかんでも受け入れろということでは

ありません。現世で打ち立てるべき正義というものをイスラームはきちんと教えてもいるので、その意味でハマースがやり方を、神の視点で正しいかどうかというのは私にはわからないのですが、おっしゃっていただいたように爆発的な力を持って、それも最後に振り絞ったような力ではあるのですが、定期的に爆発させている。ある意味それが神の視点で正しいと信じてやるからこそ、それによって死ぬんであればその人は天国に行くんだというような考え方をしたりするわけです。非常に悲惨ではあるのですが。我々は、私とかも別にイスラエルにも無実の人はいるので、そういう攻撃を全て正しいとは全く思わないのですが、ハマースが爆発させたエネルギーみたいなものは、ある意味その紛争が続いているんだということを世界に知らしめるメッセージでもあるので、それを単にテロだからダメですってことではなくて、なぜこれが起こるんだろうということとか、なぜまた同じことが繰り返されてしまうのんだろうかということを、定期的にリマインドする役割は持っています。

なかなかそこに常にコミットしていただけるわけではないので難しい問題だとは思いますが、少しずつそのリテラシーを向上させるということです。先ほどお答えしたように、いろいろな方法で関与することができる時代ですから、それを忘れずに取り組んでいくということ。

それから情報との向き合い方ということに関して言えば、当然、報道とかに関しては、それぞれの報道に党派性とか右とか左とかそういうのがあるということです。そういう発想すらない人も結構多いとは思いますが、まずはリテラシーを向上させないといけないと思います。これはもう日本全体の義務教育レベルの課題だと思います。そして少しずつリテラシーを持っている人が増えてきたら、その人をハブとして周りに啓蒙というか、いろいろ情報を伝えていくことでしかないのかなと思います。少しでも意識化された人は、良心のある研究者であるとか、ジャーナリストであるとか、そういった人たちの作ったものがたくさんありますので、まずはなんでもいいから手に取ってみる。そしてその人が信頼に足る人かどうかは、他の本も一緒に選んで勉強してみればなんとなくわかってきます。書きぶりとかそういうことからある程度は見てくると思います。

最初から自分の選び取りたい政治的な選好であるとか、元々持っているフラストレーションなどを前提にしてしまうと、どんどん変な方向に突っ込んで行ったりもするので、まずは選り好みせずに、いろいろな文献なり報道を手にとって情報を並べてみる。そしてどちらに理があるんだろうかということを、いろいろな人と議論しながら身につけていくということだと思います。

今回の話を少し飛び越えますが、フェイクニュースの問題などは最近非常に重要な課題だと思っています。陰謀論などもです。イスラエル、パレスチナ関係のことでも大きな課題になってきているので、我々研究者としても、特に私はディスコースを研究しているので、重要な研究テーマとして今後は扱っていきたいと考えています。以上です。

アキル ハディ先生、ありがとうございます。これで質疑応答セッションを終了させていただきます。本日はありがとうございました。



今回の SGRA カフェを開催するきっかけは、もちろんガザの攻撃でした。ぜひパレスチナ版の SGRA カフェをしたいと思って、財団のスタッフに相談しました。予定が既に決まっていて、すぐには難しかったのですが、2月の頭ならということでの開催になりました。最初は少し遅いのではないかと思ったのですが、遅いからこそいいと思いなおしました。なぜかという、最初の頃こそパレスチナで何かがあれば、例えば西岸地区やガザでイスラエルの攻撃があれば、メディアで取り上げられますが、1ヶ月、2ヶ月経ったらもうメディアは落ち着くという感じです。だからこそ少し時間をあけて、リマインド学習的な感じで今回の SGRA カフェを開催することに意義があると思いました。パレスチナ問題は世界で最も複雑な問題だと言われています。宗教の問題も入っているし、政治の問題もあれば歴史の問題も入っています。ポストコロニアリズムの問題も入っています。

ハディ先生、本日の解説で優しく丁寧に解説してくださってありがとうございました。改めて御礼申し上げます。ご参加の皆様もありがとうございました。

## シェッターディ アキル 慶應義塾大学

2024年2月3日、第20回SGRAカフェ「パレスチナについて知ろう—歴史、メディア、現在の問題を理解するために—」が渥美財団ホールおよびZoomによるハイブリッド形式で開催されました。

今回は明治大学の特任講師であり、東京ジャーミイ文書館（テュルク文化・イスラム文化研究施設）理事でもあるハディ ハーニ先生が講師を務め、パレスチナの歴史やメディアの扱い、そして現在進行形の問題について詳細に解説しました。長年にわたるイスラエル・パレスチナ紛争の根本原因と、現在におけるその影響について深い洞察を提供。さらに同紛争に関する包括的な分析を行い、その歴史的背景や主要な出来事、現在の状況を説明。特に紛争の起源やイスラエルの設立、その後の戦争と平和努力について言及し、パレスチナ人の追放や占領地の状況など、人道的問題を強調しました。さらに2023年10月のハマスによるイスラエル領土への攻撃とイスラエルの対応を例に挙げ、双方の行動が国際法を違反していることを指摘。パレスチナ人の権利と自己決定権の重要性を強調し、平和と共存を望むすべての人々を支持する意志を表明しました。

さらに、イスラエル・パレスチナ問題の簡略化に反対し、少なくとも4つの主要な行為者を2つの異なるレベルで見るとを提案。パレスチナはガザにおいて妥協を許さない強硬な立場を採るハマスと、西岸を統治するより和平と妥協に開かれたファタハ政府に分かれ、同様にシオニスト陣営も紛争への異なるアプローチを反映した右派と左派に分かれています。この枠組みは、直接的な軍事衝突とその結果に焦点を当てる「表層—戦術」レベルと、関与する行為者のより深い、根本的な目標と政策を探求する「構造—戦略」レベルに分類できます。これは両陣営内の微妙なダイナミクスと内部の多様性を認識する必要性を強調し、紛争を形作る戦略的および戦術的な次元を理解するために単純な物語を超えて進むことの重要性を示しています。

ハディ先生はこのように、イスラエル・パレスチナ紛争における「両側主義」の概念を批判し、それが不当に抑圧者に正当性を与え、最終的には植民地主義的占領構造の「目に見えないテロ」を維持すると主張。「正義の側」に立つことは、パレスチナ人の行動を無条件で擁護することでも、イスラエル人の行動を全

面的に非難することでもない。紛争における両側を同等に扱うことは、非対称な実体を対称的と見なすことであり、これは中立的でも公正でもなく、実際には抑圧者に味方することになります。真に正義と公平を支持するためには、イスラエルの占領政策、それらを可能にする排他的で暴力的なイデオロギー、そしてそれらを支持する政治構造、特に米国の外交政策に挑戦する必要があるとみています。

紛争の解決に向けて市民社会の役割も強調されました。正義の実現には、ハマスとイスラエルの両方からテロリズムの問題を認識し、特に右翼シオニスト派におけるイスラエルの不釣り合いな責任を認め、半世紀にわたるイスラエルの一方的な構造的テロリズムが重大な問題であることを理解するという「3つの命題」の同時実現が必要であると提案。市民に対しては、問題についての意識を高め、声を上げ、これらの懸念を政治行動に反映させ、外交圧力を形成することを目指そう呼びかけています。

司会・討論者を務める私、シェッダーディ アキルはガザの現在の人道状況について報告。2024年2月3日時点でガザでの死亡者数が2万7000人を超え、その70%が女性と子どもであることを強調し、紛争の深刻な影響と緊急の国際的対応を呼びかけました。また、国連国際司法裁判所が1月26日にイスラエルに対してガザでのジェノサイドを防ぐための仮命令を下したことは、世界政治と平和努力にとって画期的な瞬間であると強調し、国際法と人権保護の重要性を訴えました。米国、日本、欧州連合などの主要な国際プレーヤーによる国連救済復興事業機関（UNRWA）への支援の停止は、世界的な人道支援に関する重要な疑問を提起し、外交と人道支援という課題に対する日本の対応が、国際社会内での連帯と責任ある行動の必要性を示しているとも指摘しました。

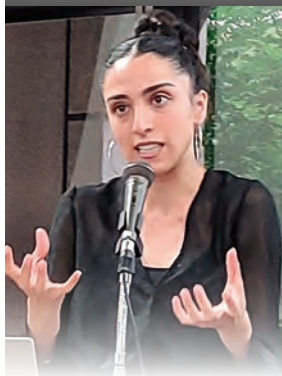
質疑応答セッションは、東京大学博士課程の徳永佳晃氏がアシストしてくださり、会場参加とオンライン参加の両方から多岐にわたる質問が寄せられ、長年にわたる紛争が世界平和、正義、そして人類にとって何を意味するのかについて議論しました。「外交の失敗がイスラエルの植民地化政策の継続を可能にしているのか」、「今後の見通しと解決策は何か」、そして「私たちが世界市民として平和にどのように貢献できるか」についての質問とコメントがありました。

初めてのパレスチナ問題に係るSGRAカフェでは、政治的、歴史的、人道的要因の間のバランスを取りながら、紛争の異なるレベルを分析する枠組みを用いて説明しました。また、パレスチナ問題に対する私たちのアプローチを集团的に再評価する緊急性があることを明確にしました。

（シェッダーディ・アキル「第20回SGRAカフェ『パレスチナについて知ろう』報告」より転載）





【シリーズ2】  
発表2

# 建築の支配： 植民地主義の武器としての建造環境

ウィアム・ヌマン

東京工業大学

[原文は英語、翻訳：奥川 舞（フリーランス）]

## 1. ミグロンの入植過程を例に

まず、都市設計について少しお話ししたいと思います。

オスロ合意が締結された1993年、イスラエルでは、収奪されたパレスチナの土地で入植地の設立許可を得ることがどんどん難しくなっていました。1993年以前は、イスラエルの入植者たちは、パレスチナ人の家に行き、人々を追い出すだけでそこを「入植地」と宣言することができました。まさに現在、西岸地区で行われているような行為です。国際的な注目が集まる中、明白な収奪行為ができなくなった入植者たちは、さらなる入植行為をカモフラージュする方法を必要としており、都市設計と建築が利用されることとなりました。

エルサレムから西岸地区の入植地に通じる悪名高い道路—公道60号線があります（スライド1）。入植者たちはこの高速道路に立ち入っては、特定の角の周辺で「電話の受信状況が悪い」と軍に報告するのです。彼らはその地域を見下ろす丘を指し示し、そこに携帯電話の基地局を建てると良い、と言うのです。その場所は、彼らが入植地を設立しようとして失敗した場所でした（スライド2）。



スライド1

### “携帯電話の基地局を作るのにちょうどいい場所”



左：2000年当時の丘の上は、イチジクとオリーブを栽培する農民と羊飼いの家族のものだった。  
右：2003年、入植者たちは仮設住居を置き、その後パレスチナの私有地に恒久的な家を建てた。

The Migron file: Honoring the Supreme Court Ruling: Evacuating Migron. Peace now.

#### スライド 2



ミグロン (Migron) にある携帯電話用基地局

Article. For the first time a seizure order in Migron. 01.7.15. Peace now.com

#### スライド 3

イスラエル軍にとって、基地局とは安全保障の事案です。イスラエルの都市規制に基づけば、基地局を建てるためならば土地所有者の許可なしに土地を収奪することができるのです。

2001年にその丘の住民は追い出され、基地局の建設が始まりました。しかし、建設のスピードが遅いことに痺れを切らした入植者たちは、偽の基地局を立て、その護衛のために銃を持ち座り込みを始めました。護衛たちは、違法ながら基地局の周りに壁を建て、家を建て、入植者である妻と一緒に住み始めました（スライド3）。





ミグロン前哨基地

צילום: Lowshot.com, Ynetnews.com, Attila Somfalvi

## スライド4

携帯電話の基地局設置の許可を得た彼らは、水道網や電力網に接続できたので他の入植者の友人を呼び寄せていきました。住宅省は、違法な保育所、さらには違法なシナゴグを提供し、最終的にその丘は西岸地区で最大の違法入植地の一つに成長しました（スライド4）。

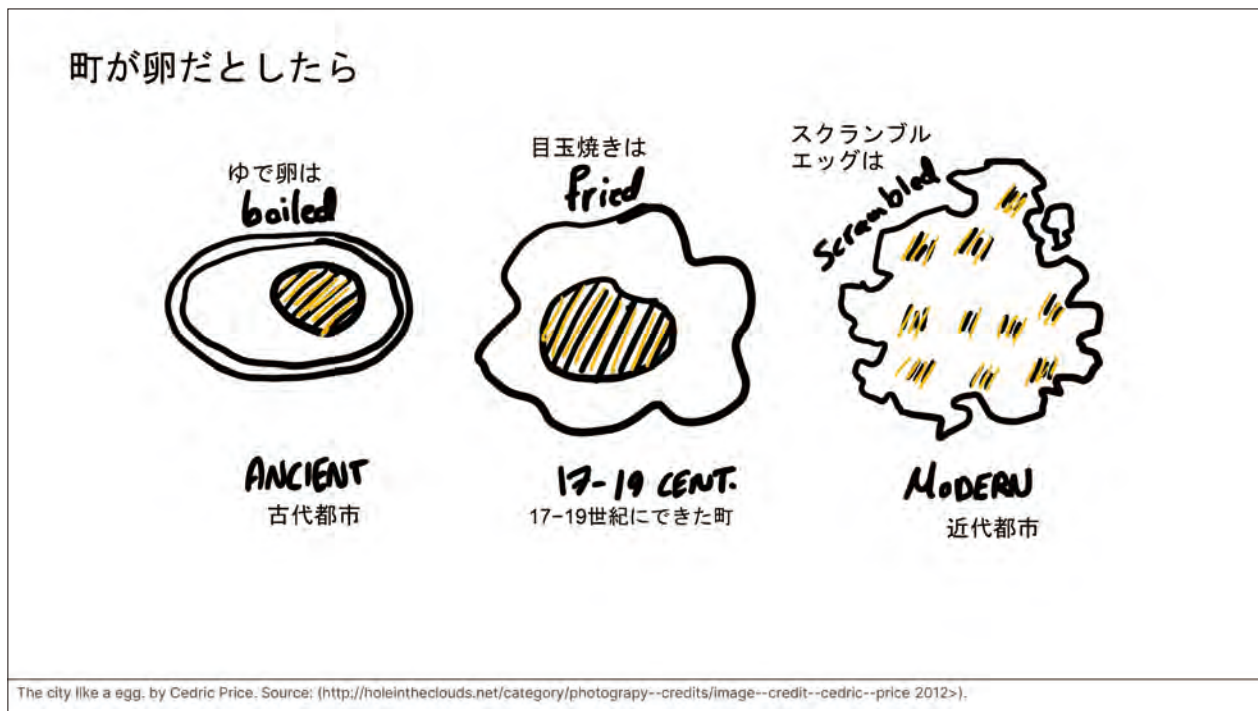
これが、イスラエル人たちが聖書にちなんだミグロンという名前を付けて正当化しようとしている土地の話です。道理の通らない行為をカモフラージュするための名付けなのです。

エヤル・ワイズマンは、彼の著作「Hollow Land」の冒頭でこの物語を語っています。ワイズマンは、都市が通信を確立する方法がパレスチナにおける入植者植民地主義の姿かたちを理解するために有効なアナロジーであると言います。私はこの考えを少し拡張して「私有地」と「管理された公共空間」という言説トランプ—あるいは概念—をそのアナロジーに含めたいと思います。

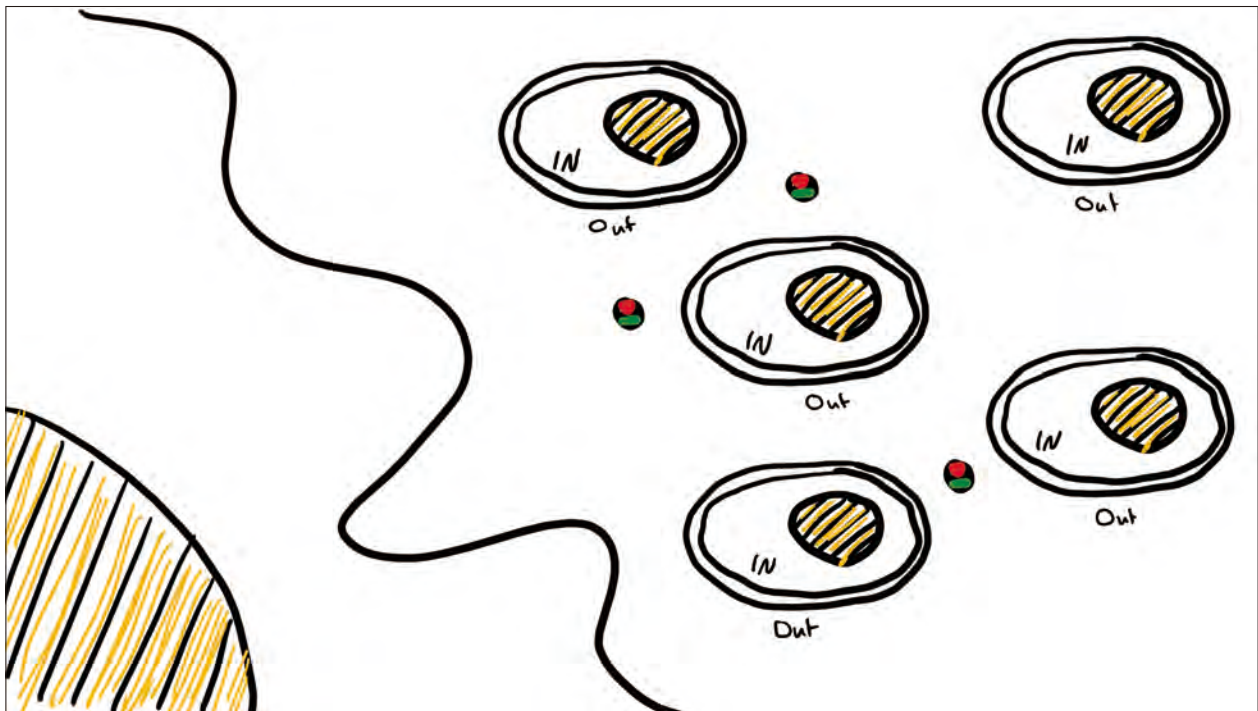
## 2. 都市の成長論から見たパレスチナ

都市設計の歴史について本を読んだことがあれば、セドリック・プライスについてご存知だと思います。彼は都市の成長を卵に例えました（スライド5）。かつて、都市は固めに茹でられたゆで卵のように、中心に最も高い密度と重要性があり、周囲に中心を守る殻があり、その中心と壁の間にあるものは重要とは見なされていませんでした。

その後、都市は目玉焼きのように進化しました。殻はなく、都市は不均一に広がり、中心には政府機関のような重要なゾーンが据えられています。



スライド 5



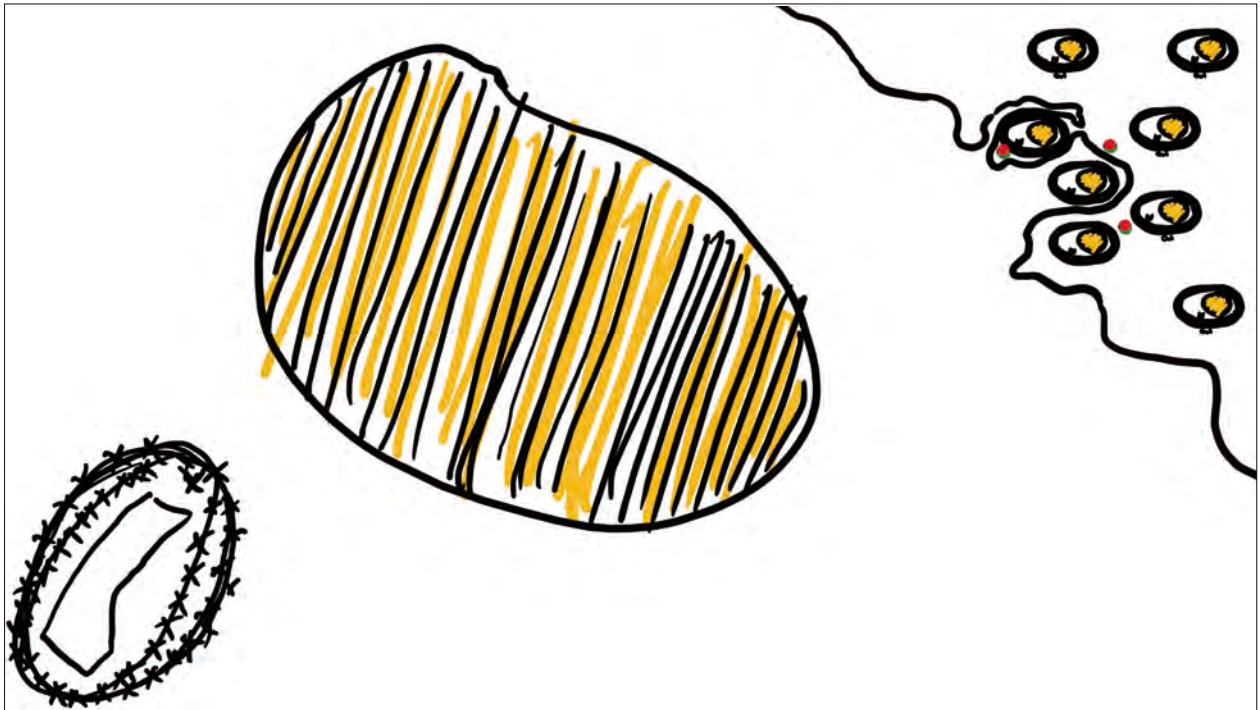
スライド 6

そして現在、都市はスクランブルエッグのように異なるゾーンが混在するものになっています。

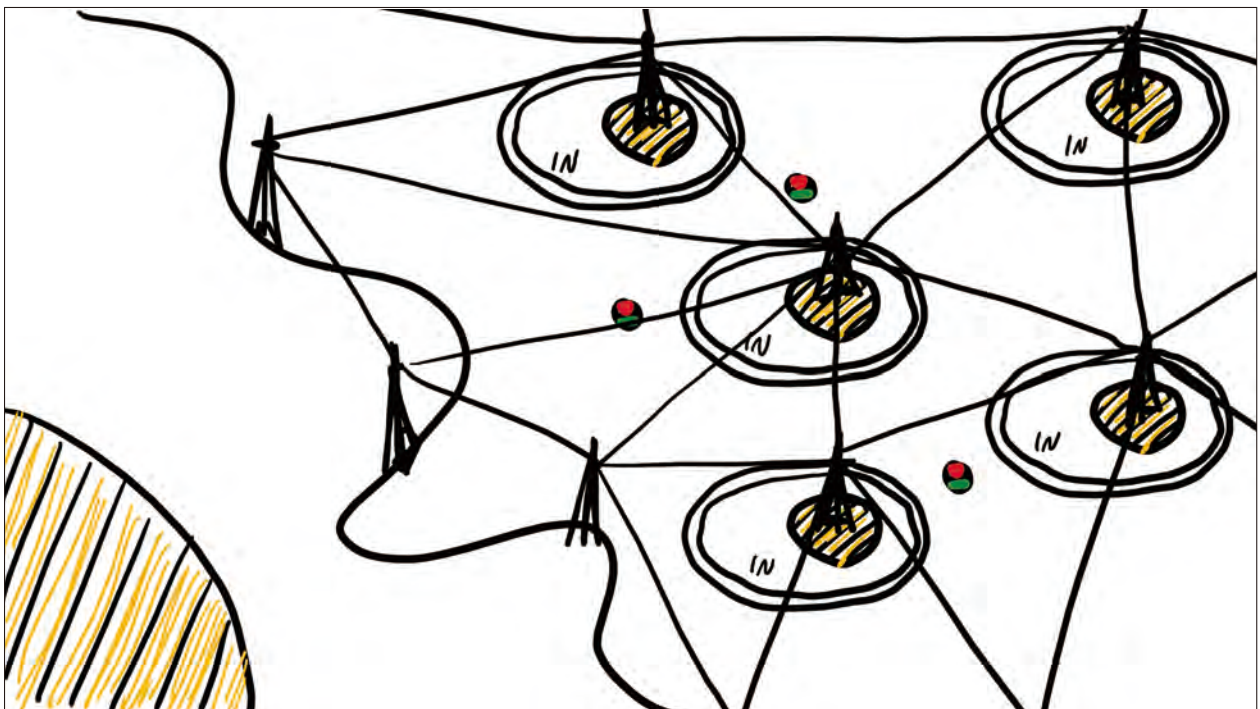
もしイスラエルの植民地主義の方法を卵のアナロジーで比較し、ミグロンの丘やその他の盗まれた土地を説明するならば次のようになります。

西岸地区に散らばった違法な固ゆで卵があり、殻は内部（入植者）と外部（パレスチナ人）を分けてます。時折、殻の周りに違法に広がる目玉焼きがあり、それが固まって分離壁になります（スライド6）。これが、イスラエルと呼ぶ人も





スライド7



スライド8

いますが、歴史的なパレスチナの土地です。そして、圧力鍋の中でしっかりと覆われたスクランブルエッグがガザです（スライド7）。

これで比較的想像しやすくなったかと思います。しかし、何かが欠けています。それは、イスラエルのことをもっと理解するために、本の中でワイズマンが提案した考えです。それぞれの固ゆで卵に携帯電話の基地局・アンテナがあり、それが周囲に電磁場を放射しているところを想像してください（スライド8）。基地局は物理的に見えなくても良いです—実際のところ、入植者の偽の基地局のような偽物でも構いません。基地局が、この固ゆで卵（＝入植地）の領土的な焦点であることが重要です。

基地局が展開する電磁的な領域は、電磁的であるだけでなく、政治的でもあります。この領域は入植地を結びつけ、物理的には存在しない殻の外にも入植者の支配が及ばない場所を消し去っていきます。

### 3. おわりに

私たちは生活の90%を建物の中で過ごし、残りの10%は建物の周囲で過ごします。私たちは建築された環境に慣れすぎて、建築物が私たちの体を暴力的に支配し、組織し、強制的に意識が向く方向を変える存在として利用されることを忘れがちです。これについては、レオポルド・ランバートが「Weaponized Architecture」で述べています。建築物がどのように暴力的であるかについて、たくさんお話ししたいことがあります。

チェックポイントとして以下のようなことがあげられます。検問所のシステムが自分の土地に住んでいるだけのパレスチナ人のみに適用されていること（スライド9）。イスラエルのパスポートを持つアラブ人の街は檻に囲まれ、アラブ人



ヨルダン川西岸地区に700個あるイスラエル軍・検問所のひとつ

Article. UAE investment in upgrading Israeli checkpoints only entrenches occupation. Euro-Med Human rights Monitor. 2020

スライド9



は二級市民として扱われていること。故郷を追われたすべてのパレスチナ人の難民キャンプのこと。非人道的な天井のない監獄であるガザのこと。パレスチナ人が住む住宅街を囲む9メートルの壁が、普通に歩けば2分の学校への通学路を4時間の試練に変えてしまったこと（スライド10）。しかし、今日は別のこと、皆さんに関わることを話したいと思いました。



2021年12月7日、イスラエル・ガザ国境沿いで強化された防御壁の完成を祝う式典の会場を守るイスラエル軍の兵士たち。

Article. Israel announces completion of security barrier around Gaza. AP. Tsafir Abayov/AP

スライド 10



渋谷にある北谷公園のビフォー・アフター



Article. Shibuya's New Redeveloped Kitaya Park Includes a Blue Bottle Designed by Keiji Ashizawa. Spoon and Tamago. photos by Ben

スライド 11

これから言うことは、答えが用意されているわけではないので、皆さんもぜひ考えてみてください。

建築の視点で見れば、パレスチナは都市の資本主義的な組織化のプロセスが増幅された実体といえます。例えば、東京における消費活動は、共有された空間を私有化、または富裕化し、その空間に存在する人から得られる利益を最大化するために組織されることによって維持されています。あなたが消費のスパイラルの中にとどまるよう、建築を使って、あなたの体を方向づけさせます（スライド 11）。私有地、オフィスビル、ショッピングモール、政府の建物などが固ゆで卵だとすれば、あなたはその周辺、それらを繋ぐ磁場の中に存在します。あなたが彼らの支配の影響を受けずにいられることはほとんどありません。おそらく家にいるときだけでしょう。

私も、パレスチナ人が家を持っていればいいのに、と思います。

ご清聴ありがとうございました。



【シリーズ2】

発表3



# 立ち上がる学生、 クィア、環境活動家たち： 2023年10月以降の 東京のパレスチナ解放運動

## 溝川 貴己

早稲田大学

### はじめに

皆さん、こんにちは。早稲田大学文学部中東・イスラーム研究コースから参りました溝川です。今日はハディさんからパレスチナの問題の基本的な話を、ウィアムさんからは西岸地区の占領と入植、建築との関係の話をしていただきました。自分からは、去年10月以降の、日本の特に東京においてどのようなパレスチナ解放運動が行われたのか、どんな人たちがどんな思いからどんなことをしてきたのかということについてお話ししたいと思います。

お話できるのは全体のごく一部です。例えば在日パレスチナ人の方々がよくデモなどを主導されていたのですが、その話は今回入れておりません。タイトルに環境活動家と入れたのですが、その話にも触れられなくて、本当にごく一部なのですが、それでも活動の一端を皆さんに知っていただければと思います。

まず、この8カ月間のパレスチナ解放運動、特に東京での特徴を二つ挙げたいと思います。この写真はスクランブル交差点です（スライド1）。デモに参加した方が持ってきたうちわが写っています。「私たち全員が自由になるまで誰も自由ではない」と書かれています。これこそまさしく今回の多くの人が共通して持っていた意識を示す、象徴的な言葉だと思います。

一つ目の特徴は、社会運動にそれまで関わったことのなかった人や、初めてパレスチナのことを知った人など、そういう新しい方々がほとんどだったということです。社会運動というと、もともと社会運動に積極的にかかわっていた人が集まることが多いですが、今回のパレスチナの運動はそうではありませんでした。既存の社会運動との関係性が薄いということが、むしろ新しい社会運動を生み出した、柔軟性を生み出したと思っています。

また、二つ目の特徴は、他の解放運動との横断性です。ミャンマーのこと、沖縄のこと、クィアのこと、動物の権利のこと、難民問題や環境問題のことなど、他の解放運動に関わっている方々がパレスチナと連帯を示しました。パレスチナに興味を持った人が逆にそちら側にも興味を持つといった動きもあったように思います。

## この8か月のパレスチナ解放運動の特徴



- ・ 社会運動にかかわったことがなかった人、パレスチナを初めて知った人の参加
- ・ 他の解放運動との横断性  
(ミャンマー、沖縄、クィア、動物の権利など)  
→ 基本認識：パレスチナは解放闘争  
→ 全ての解放運動は繋がっているという意識
- ・ 運動参加者の多様性

スライド 1

### 1. 「想う会」とその活動

それではまず、去年2023年10月以降に活動を開始した「〈パレスチナ〉を生きる人々を想う学生若者有志の会（想う会）」についてご紹介させていただきます。10月の最初の頃、イスラエル大使館前のデモに参加しているのはほとんどお年寄りばかりで、若者がいませんでした。このデモで出会った3人の若者がそれに危機感を感じ、若者主体の会を作ろうとこの会を立ち上げました。

パレスチナに括弧がついているのには理由があります。皆さんパレスチナというとガザ地区と西岸地区を思い浮かべるのですが、イスラエル領内にもイスラエル・アラブ（48年パレスチナ人）と呼ばれるパレスチナ人はいますし、あとは周辺諸国にもパレスチナ人の方々がいらっしゃいます。そういった方々を置き去りにしない、そういう方々にも思いを馳せるということで括弧付きの〈パレスチナ〉、しかもパレスチナ“に”ではなく、パレスチナ“を”という名前になっています。

この会ではまず、10月23日に早稲田大学の岡真理教授をお招きして講演会「ガザ、人間の恥としての」を行いました。なぜなら、当時は本当にパレスチナ、ガザの報道が、質的にも量的にも全く足りておらず、不十分だったのです。特に物事が10月7日から語られ始める、それ以前の西岸地区やガザ地区の状況が全く無視されている。ガザ地区は世界最大の野外監獄と呼ばれているほどひどい状況だったにもかかわらず、そういうことはすべて無視されていたので、そういった背景なども含め、長年パレスチナに携わっていらっしゃった岡先生にお話ししていただきました。この講演は京都大学で行われた講演会と一緒に『ガザとは何か—パレスチナを知るための緊急講義』（大和書房）というタイトルで書籍

化されています。書店で買えると思いますので、よろしければ手に取ってみてください。講演会の映像自体もYouTubeから見るができます。

また、2023年10月以降、想う会でもデモをやりまし、他の方々もたくさんデモを行いました。この写真は、想う会が最初に実施した11月12日の渋谷駅前でのデモの様子です（スライド2）。このデモは街を歩く人たちに意思表示をする、情報を提供するだけではなくて、例えばパレスチナ人の方、当事者の方の話を実際に聞く貴重な機会であったり、デモに来た人たちの情報交換や横で繋がる場であったり、そういった意味を持っていました。とくに心がけていたのは、誰もが安心して参加できるデモにするということです。そのためのグラウンドルールを作り、UDトークという文字起こしアプリを使って耳が不自由な方でも参加できるようにしたり、写真を撮られたくない人のために撮影禁止エリアの場所を作ったり、ベビーカーでも参加できるようにしたりと、そういうところにごくこだわっていました。これは既存の社会運動ではおそらく全くなかったことだったと思います。これが今回のパレスチナ運動で初めて出てきた点です。これは今でもパレスチナの運動の中では基本になっています。

想う会では署名活動も行いました。日本企業とイスラエルの軍事企業との関係を断ち切らせる、そういう署名です。皆さん、BDSはご存知でしょうか。BDSとは「ボイコット、投資撤収、経済制裁（Boycott, Divestment, and Sanctions）」の頭文字です。そしてパレスチナ解放運動の中でとても重要なものです。イスラエルによる占領やアパルトヘイトが終わるまで、イスラエルの企業や政府のものをボイコットしようという、そういう運動です。南アフリカの反アパルトヘイト運動がモデルです。ボイコットというのは非暴力運動の中では1番効果がある、とても強い力を持っている運動です。占領で得る利益よりも不利益



### 誰もが安心して 参加できる デモを

グラウンドルールの設定

+

UDトーク（文字起こしアプリ）による情報保障

→他のデモでも同様

想う会がはじめて行ったデモの様子

スライド2



の方が大きくなる、そういうふうにするための運動です。これを日本でも行いました。特に一部の日本の企業がイスラエルの軍事会社と関係を持っていたのですが、そのイスラエルの軍事会社（エルビットシステムズなど）は実際にパレスチナ人を殺すことによって実験を行い、武器を作っているわけですね。民間人の殺害や占領などに日本の企業が間接的に関わることになるので署名活動を行い、一部の企業にはそれで実際に関係を切っていただくことに成功しました。これは国際的なBDS運動の中でも大きな成果として受け入れられたように思います。

街頭だけではなくSNSでも様々な試みがありました。例えば日本語の報道は、偏向報道以前の問題で、報道すらしない。そういう状況だったので、有志の人たちが、アルジャジーラやBBCなどといった海外メディアの報道を日本語に翻訳してSNSで発信し、そうすることによって情報が流通しました。また、ガザにいる方が発信されているご本人のSNSの情報を皆さんで日本語に翻訳し、「#ガザ投稿翻訳」といったタグをつけて投稿するなどの動きもありました。例えば、最所篤子さんという英語翻訳者の方はガザにいるパレスチナ人ジャーナリストのツイートを翻訳して「#ガザ翻訳」のタグをつけて投稿されておられました。SNSですから情報の精度という点ではもちろん問題があって、時々嘘の情報などが混じることもあるのですが、それでもガザの虐殺をリアルタイムで自分たちが目撃するという点で、今回のすごく大きな特徴だったと思います。だからこそ、アメリカでも反ジェノサイド・反戦運動というのが広まったのだと思います。

今回とてもお伝えしたかったのは、GoFundMeというクラウドファンディングサービスを通じて、市民が直接ガザの人々に送金していることです。ガザは今、物価がすごく高くて食べ物を買うのにも大変な苦勞です。また、ガザから出たい、あるいは怪我をして治療をしないといけないという際に非常に高額なお金





- ・市民によるガザの人々への寄付
- ・GoFundMeでガザへ直接送金、ガザの人々と直接連絡

左：山中澤さんのストーリー 上：山中澤さんがTwitterに投稿した画像

スライド 3



がかかるのです。それに対して、必ずしも経済的に豊かとは限らないパレスチナ運動の参加者がお金を直接送っているということがあります。本来これは公的機関の仕事だと思いますし、そうであるべきです。しかし、残念ながら政府や団体などの手がまったく届いていないので仕方なく、市民が多額のお金を現地に送っているという、そういう実情があります。この画像は山中滯さんという方が作った画像です（p53・スライド3）。このように絵を書いたり、こういう画像を作ったりして活動を広め、募金と呼び掛けています。イベント等で募金が集まった時には、こういうところに送ったりもしています。募金先には国連やJVC、赤十字などもあると思うのですが、お金のある方と余裕のある方は、ぜひこういったところに募金をすることも考えてみてはいかがでしょうか。

## 2. 連帯の試みと大学を拠点にした動き

次は少し違う視点から、パレスチナ解放運動を見てみたいと思います。クィアコミュニティやフェミニズム運動の中から、ガザに連帯する試みというのがありました。これは結構有名だと思うのですが、イスラエル軍はガザ侵攻においてクィアを利用して虐殺を正当化しています。そこでクィアコミュニティが主催するデモが行われました。

「自分の解放のことだけ考えるなら、あなたは白人“主流派”フェミニズムやリーニンフェミニズムや、TERFと何が違うのか？ 新たな連帯のためにベル・フックスをはじめとするブラックのフェミニストたちからあなたは何を学んだのか？ パレスチナの解放なくして私たちの解放もない」。これはクィアでありフェミニストでもある活動家の言葉です。これでなぜクィアコミュニティやフェミニストがパレスチナ解放を訴えたのかがよくわかると思います。このように、ブラックフェミニズムやインターセクショナルフェミニズムなどの文脈から解放運動に入っていったということです。

ちなみにQueering the Mapというサイトに書き込まれたパレスチナ人のクィアのメッセージが広く読まれています（スライド4）。スライド右下のサイトにアクセスしてもらえれば日本語でも読めるので、ぜひ調べてみてください。その中の言葉をひとつだけ紹介します。

「私は自由になりたい。でもカミングアウトするだけじゃ自由にならない。何よりもまず、パレスチナ人であることが自由だから」これはエルサレム南部に住んでいるパレスチナ人のクィアの言葉です。ここにすべてが凝縮されていると思います。

最後に大学を拠点にした運動を紹介したいと思います。アメリカで大きな反戦運動、反ジェノサイド運動が起きてから、日本でも全国的に運動が活発化しました。もちろんその前からあったのですが、日本において全国化したのはアメリカの運動の後です。ガザではすべての大学が現在破壊されて教育が全部停止しています。欧米、特にアメリカでは虐殺を非難することすらできません。反戦デモに行ったら殴られたり逮捕されたり。そういった中で日本はいわば安全圏で、大学



スライド 4

の学生が声を上げても逮捕されることはないのです、このように声を上げるのは当然だったと思います。

イスラエルによるガザ進攻に反対の意思を示すと同時に、大学に対して学術的なボイコットを呼びかけることを行っていました。早稲田大学でも「ジェノサイドに払う学費はない」として大学に対して学術ボイコットを求める署名を行いました。

早稲田大学は、ウクライナ侵攻に対する反対声明は2週間で出したのですが、ガザ侵攻に対してはいまだに何も言っていません。しかも、ガザ侵攻後にイスラエル大使館の経済部の方を招いたイベントを開催して、しかもそこで学生に対して身体検査を行ったり、一部の学生の入室を拒否したり、そういうあり得ない事態がありました。これらのことに責任を取らせ、二度と同じことを行わせないための署名です。

今、全国の大学で立て看板が立てられています（p56・スライド5）。例えば、スライド左の立看板はガザ侵攻に反対する立看板だったのですが、何かが黒く上から塗りつぶしてしまいました。それでその上からもう一度白い塗料で文字を書いた、そういうものになります。右側は大学構内で行った展覧会の様子です。こういった感じで、大学でも活動が広がりつつあります。

最後に、なんと申しまして即時停戦が最優先事項だと思います。そのためには、あらゆる圧力をかける必要があると思います。今日ご紹介した中で興味のある活動等がありましたらご参加いただければと思います。ただ、もし停戦したとしても、元の占領封鎖状態に戻っては何の意味もないわけです。ですから継続的にパレスチナに関わっていただければと思います。

この発表で見ていただいた通り、社会的な立場の弱い人が真っ先に今回パレス



Waseda Watermelon Alliance の活動

左：早稲田大学構内の立て看板

上：展示「パレスチナの声」@東京藝大

## スライド5

チナに対して連帯の声を上げています。もう8ヶ月です。こんなに続くなんて誰も思っていませんでした。8ヶ月も経って本当にみんなボロボロです。余裕のある方がこの中にいらしゃったら、ぜひ何かやっていただければと思います。情報の拡散だったり不買だったり、結構簡単にできることはたくさんあります。それ以外にも自分の得意分野だったり、他の人にできないことだったりがあると思いますので、そういったことを見つけて皆さんやっていただければと思います。

以上です。ありがとうございました。



シリーズ 2

【質疑応答・ディスカッション】

## パレスチナの壁：

「わたし」との関係は？

総合司会：シェッダーディ アキル 慶應義塾大学

モデレーター：徳永 佳晃 日本学術振興会

オンラインQ&A担当：郭 立夫 筑波大学

発言者：

ハディ ハーニ 明治大学

ウィアム・ヌマン 東京工業大学

溝川 貴己 早稲田大学

[発言は日本語・英語、翻訳：素紺タティアーナ理花（フリーランス）]



**アキル** それでは早速質疑応答セッションに移りたいと思います。会場にいらっしゃる方のご質問から始めます。司会の徳永さんお願いいたします。

**徳永** それではフロアにいる方は手を挙げていただいて、オンラインの方は画面下のQ & A機能を使って質問していただければと思います。

**フロア1** 本日は講演ありがとうございました。こういうイベントに参加することを友人に話すと「すごいね」と言われることがあるのです。馬鹿にするという文脈ではなく、純粹に心の底からそう言っているのですが、他人事なのです。これは結構深い問題だと思います。なぜこのように言われてしまうのか、どうすればそれに対策できるかといったことをお聞きしたいです。

**徳永** ありがとうございます。これは1人1人お答えしていく形でよろしいですね。では溝川さんからお願いします。



溝川 友達にすごいねと言われたということですね。エドワード・W・サイードというパレスチナ系アメリカ人文学研究者の著書に『知識人とは何か』という本があります。この本の中でサイードは、知識人というのは黙って現状肯定に甘んじるのではなく、自分の専門分野でなくても積極的に世界に介入して声を上げる。絶対に権力におもねらない。それが知識人のあるべき姿で、使命であるといっています。自分はこの本がすごく好きです。自分は大学生も知識人の端くれだと思っています。試験を受けて入学し、高い学費を払い、教授に囲まれているのですから。こういった不正義があった時に声を上げることは半分義務だと個人的に思っています。なので、大学生として自覚を持ちなさいという言い方はふさわしくないかもしれませんが、そういう気持ちです。そんなに難しいことではないはずです。自分は早稲田大学ですが、ずっと活動していると意外とみんなも興味を持ってくれて、時々デモに来てくれたり、何かを一緒にやってくれたりすることがあります。目立つぐらいにやっていると、案外みんなもついてくるかもという感じでしょうか。お答えになっているかどうかわかりませんが、以上です。

ウィアム それについて少し付け加えたいと思います。バセル・アル＝アラジは、2017年に占領軍によって殺害されたパレスチナの学者でした。彼が言ったのは、「知識人になりたいなら、社会に関与する必要がある」ということです。社会に関与しないのであれば、学問や知識には意味がありません。これは、あなたがおっしゃったことについての補足です。今、私たちは日本という文脈の中にいますので、パレスチナの問題が非常に遠く感じられるかもしれません。物理的に遠いと、精神的にも遠く感じたり、考えるのが面倒だと思ったりするかもしれませんが、でも、私たちは皆つながっていると思います。私は研究室で沖縄について学んでいますし、世界の他の場所についても学びました。私自身と日本人の間には何の違いもないと思っています。ですから、もしパレスチナ人を人間として考えるのであれば、それはもっと身近に感じられるべきではないでしょうか。それが難しい、複雑すぎるというのは意図的なものです。でも、実際に調べてみると、それは全く複雑ではありません。ありがとうございます。

ハディ 私から補足することとして、もう少し大きい文脈で考えた方がいように思いました。もちろんお二人の発言もすごく力強いものなのですが、それと同時に、個人的には日本の戦後の平和教育にも少し関わっているように思うのです。

つまり、あらゆる形の戦争、紛争、政治的争点のようなものに積極的に関わること、とりわけ戦争とか紛争に関しては、どんな形のどんな正義だろうが悪だろうが、あらゆる形の暴力、戦争、戦い、そういうものに参加することはいけないことだという平和教育になっている気がするのです。何か大事なものの、あるいは普遍的な価値とか、そういったものを守るために戦う可能性はどんな人にもあると思うのですが、そういうことを一旦置いて、一切のあらゆる戦いを忌避する傾向を、日本の平和教育は作っているのではないかと思います。それが、特定の紛争や戦争、あるいは政治的争点に積極的に関わることを尻込みさせる一つのきっかけになっているように思います。私の場合、そういうときはそれも一つの政治

的な立場なのだという事を懇切丁寧に説明します。「政治的な何か」には関わりたくないとか、特定の政治的立場を取りたくないという人に対して、あなたがやっているのはこの非対称的な紛争を前にして確実に力の強い方に加担することになっているんだと話します。はっきり言えば、イスラエルのシオニスト政権は圧倒的な暴力でパレスチナ人を抑圧している。このことを前に沈黙しているということは、イスラエルの占領に対する加担だと理解しなければいけないのではないかと、なるべく対話的な方法で話します。怒って論ずみたいなことではなくてなるべく少しずつ、外堀を埋めながらロジカルに説明をすることを私はずっと心がけていました。これからもそうすると思います。

徳永     ありがとうございます。実はもう終了予定の時間なのですが、幸運なことにあと10分いただけるということですので、スピードアップしながらもう少し続けたいと思います。質問がある方はどんどん手を挙げてください。そのあとオンラインのQ&Aにいただいた質問に移ります。

フロア2     10月7日のハマースの攻撃がテロだといえるかどうか、できたらイエスカノーで、お一人ずつのご意見を伺いたいです。おそらく日本も世界も10.7のハマースの攻撃はテロで、人質拉致だとか無差別攻撃だとか、それが問題だからガザを徹底的にやっつけてもいいのだという根拠になっていると思います。実はこの質問は以前ハディ先生にお尋ねして、今日も表現されていたと思うのですが、ハディ先生には特にパレスチナ人の言論空間の中で、パレスチナ人自身がこれをテロと呼んでいるかどうか、そういう情報があったかどうかをお聞きしたいです。

ハディ     決定的に重要なのはテロをどう定義するかということです。コンセンサスがないう状況からスタートしないといけないのですが、パレスチナ人の中ではハマースの攻撃をテロと表現する人はほとんどいないと思います。普遍的な意味合いでテロというのであれば、ハマースの攻撃はテロだと思います。ただ、その普遍的な定義を採用するなら、あらゆる国家もテロリストになってしまうし、警察も軍隊もテロリストになってしまって、それはナンセンスです。そうかといってももう少し限定されたテロの定義を考えるのであれば、逆に両方ともテロとは言にくい。ですから、まずテロという概念自体がナンセンスなワードだということを申し上げておきたいと思います。

巷で流通しているテロの定義で言うなら先ほどのご質問への答えはイエスでしょう。私はそれにはちょっと疑義があるので、その意味で今日のお話をしますし、テロとは呼びたくない。多くのパレスチナ人も多分この観点からテロとは呼ばないという立場をとっているのではないかと思います。さらに詳しい議論が必要でしたら、後で声をかけてください。

ウィアム     質問の意図が完全にはわからないのですが、もし私にハマースを非難するよう求めているのであれば、それは「いいえ」です。しかし、もし10月7日に起きた残虐行為について責任を問うべきかという質問であれば、パレスチナ占領に責

任があり、10月7日の直接的な原因を作ったすべての人が、国際司法の場で責任を問われるべきだと考えます。私たちが今まさにやろうとしているようにです。ありがとうございます。

溝川 自分はそもそもテロというのは使いやすいレッテルなので、使わないようにしています。10月7日の攻撃に関しては、音楽祭への攻撃だったり軍事拠点に対する攻撃であったりキブツに対する攻撃だったり、いろいろな攻撃対象があるわけです。ですから、どうなのかというのは対象によって意見が分かれると思います。そこを丁寧に議論しない限り、10月7日の攻撃はどうか一括りにするのは全く意味のない議論だと思っています。

徳永 ありがとうございます。それでは郭さん、オンラインのQ & Aに何点か質問が届いているので、まとめてお話しいただくか、これはというご質問があればお願いします。

郭 それでは、オンラインの質問をまず2問申し上げます。先ほどの学生がいかにこの運動に関わってくるのかという問題と重なると思いますが、皆さん何か補足があれば補足してください。なければ次の質問に移りたいと思います。では読み上げます。

こんにちは。私は上智大学の学生です。ここにはパレスチナと連帯し抗議をしている学生がいて誇らしく思いますが、多くの日本人学生は依然としてパレスチナについて無知か無関心ようです。抗議活動に参加することには抵抗がある人が多いことは理解できますが、もっと多くの日本人学生にパレスチナについて学び、話し合ってもらえる方法はないでしょうか。

もう一つは、英語でいただいているのでそのまま読み上げます。

私はこの問題に関する学生の活動、特に日本での活動について質問があります。私はかつて反アパルトヘイト運動やACT UPの学生活動リーダーでした。日本では多くの非営利団体で活動してきましたし、反戦や反核活動にも携わってきました。しかし、パレスチナ支持のイベントで会った人々には、直接的な政治的関与が非常に少ないことに驚いています。何か付け加えることがあれば、これらの質問に加えてください（編注：原文は英語）。

徳永 では、まず溝川さんにお答えいただいて、補足があれば皆さんもという形でお願いできればと思います。

溝川 上智大学の方のご質問ですね。自分個人の意見としては、直接的な抗議活動以外にもパレスチナに連帯する活動はいろいろあると思います。上智大学の場合は、大学の前に出てデモをやってみたいなものだと思いますが、それ以外の選択肢も用意したらいろいろな人が入ってくるのではないかと思います。二つ目の質問については、自分には思い当たらないので、お二人に補足していただければと思います。

■ ウィアム 人々をもっと積極的にさせる最良の方法は、彼ら自身に関連付けることだと思います。多くの学生は、自分の学費がガザで人々を殺すための武器を購入するのに使われていることを知りません。また、自分たちが出資する大学がイスラエルの大学と交流プログラムを行うことで、イスラエル軍（IDF）に武器を提供していることも知らない人が多いです。それによって占領軍との関係を正当化し、正常化していることにも気づいていません。ですから、これは無関係な問題ではありません。あなたはこれに非常に密接に関わっています。そして、人々を行動に移させる強力な方法は、これが自分自身と大いに関係していると知らせることです。あなたの行動やお金、税金がこのジェノサイドを可能にしているのです。これが最初の質問への答えです。

二つ目の質問、日本での政治活動の欠如、特にパレスチナ支持の抗議活動について。日本で抗議に参加する人々の勇気を私は本当に尊敬しています。それが簡単ではないことはわかっています。パレスチナについて聞いたことがない人であれば、その週に初めて学び、抗議活動に参加する人もいます。その勇気を本当に尊敬しています。行動が必要だという認識があるからこそ、他の人々とつながることで共同の行動につながるのです。さらに、ボイコットの小さな行動も可能です。例えば、日本がイスラエルからレモンやオレンジを輸入していることを知っていますか？ 例えば、アサヒのオレンジ製品を購入することで、ジェノサイドを支援するお金を渡しているのです。こうした小さな行動が本当に重要だと思います。ただ、日本という文脈で見ると非常に遠い問題だということも理解しています。もっと学んで行動を起こすことを強くお勧めします。学ぶことが非常に重要です。

■ ハディ 一つ目の質問に対しては、私はお二人の言っていることに加えて、少しメディア戦略を考えた方がいいかもしれないということを最近思っています。SNSとかショート動画とか映像ですね。結構強力な力を持っていると思います。デモンストレーションはいいと思います、素晴らしいと思いますし、たくさんやったらいいと思います。もちろん個人的に勉強するとかボイコットに参加するとか、できることはたくさんあるのですが、社会的な空気みたいなものが非常にあって、やはり日本人が公共空間で積極的に何か政治的立場を取ることをなんとなく避けさせる傾向みたいなのはあると思います。日本社会文化論みたいな話から説明しないといけない気がしますが、そういう状況でもう少し意識を高めていくためには、少しずつ外堀を埋めていく戦略を取らざるを得ないのかなと思います。とりわけ若い世代にいろいろな情報を提供するという意味では、SNSの活用は非常に重要だと思います。

二つ目の質問はこのことと少し関わってくると思うのですが、今はまだ日本の活動は、パレスチナの人たちがかわいそうだとするところでまともではいるのだけれども、確かな知識といますか、歴史的知識とか、それが政治的に日本社会にもどう跳ね返ってくるのかとか、そういったレベルのコンセンサスの形成には至っていないという問題意識があります。いろいろな形でもう少しギアアップした勉強をする必要があるように思います。そこで重要な役割を果たすのは、一



つはSNSなどのメディア戦略ですね。ショート動画などを上手にやれる若い学生などをたくさん仲間に引き込んで、そういうことをやりたいとずっと思っています。なかなかできてない現実はあるのですが、どんどんやっていきたいと思っています。

徳永 実はいまだいた10分は超えているのですが、最後をお願いします。

郭 二つの質問がありましたが、同じことを聞いていると思います。最近では、ハマースについて話すときに、「彼らは平和を望んでいないし、彼らを支持するならあなたも平和を望んでいない」と言われることがあります。このような意見が飛び交う環境の中で、どのようにして精神的な健康を保ちながらパレスチナについて議論し、擁護し続け、前向きな姿勢を維持することができるのでしょうか？

徳永 ではよろしくお願いします。

ハディ ハマースを支持することは平和に繋がらないとは、私は思っていないのです。ハマースが言っていることは、本質的には別にユダヤ人を全員殺すとかイスラエルを破壊するといったことではなく、もう少し注意深くハマースのイデオロギーを観察する必要があると思っています。むしろ彼らが目指しているのはシオニズムの変質なのです。ハマースを支持する支持しないに関係なく、関わっているすべての人間が考えないと問題の本質的な解決には繋がらない。私に言わせればそもそも論として、むしろハマースは本質的な部分を考えなければいけないことを提示しているのだと思っています。もちろんハマースの戦い方を支持するかどうかは別ですが、シオニズムというイデオロギー、この変質あるいは解体というか、そういったことを投げかけているのだろうと思っています。そのレベルでは私はハマースをサポートしています。戦い方はサポートしていませんし、国際司法の場できちんと裁かれるべきだと思いますが、ここはしっかり切り分けて冷静に考えないといけないと思います。

ウィアム 議論がどこにも行き着かない場合に、精神的な健康をどう保つかという質問だと思います。それはあなたを攻撃する一種の武器です。それは物理的な武器ではありませんが、精神的な武器であり、あなたのエネルギーを消耗させるために議論を続けるのです。このような状況で自分をどう守るか。西洋が主導した議論文化というものがあると思います。議論はディスカッションではありません。議論はどこにも行き着きません。2人がディスカッションを行うとき、意見が変わる可能性があります。2人が議論を行うときは、自分の見解を押し付けようとするだけです。この人が意見を変えられない、または変えるつもりがないとわかったときには、エネルギーを節約して議論をやめるべきです。そのエネルギーを、パレスチナ解放の推進に使ってください。この答えが質問に役立てば幸いです。

溝川 どう答えていいかわからないのですが、そういう議論に巻き込まれるぐらい

だったら、そのエネルギーを別の場所に使った方がいいという話でしたか。自分は逆方向ではないと思いますが、今までの運動の中で、人と丁寧に対話することが欠けていたと思うことがあります。例えばデモのときなどに、結構皆さん遠巻きに見ていて話しかけてくれないのですが、時々話しかけてくれる通行人もいます。そういう人に丁寧に10分20分かけて説明すると納得して、パレスチナのことをもっと調べてみたいと言って帰ってくれます。そういう人との丁寧な対話をもっと増やしていかないといけないと思っていました。自分はあまりアグレッシブなシオニストなどに絡まれたことがないので、どうやってメンタルヘルスを保っていますかという質問にはお答えできないのですが、それは無視すればいいと思います。

■ アキル 英語でお答えします。ハマースについての質問と精神的な健康についての質問がありました。ハディ先生が上手に説明したように、パレスチナ人には占領下で抵抗する権利があります。自己防衛の権利は国際法で認められていますが、一定のルールに従う必要があります。ですから、私は個人的に葛藤を抱えています。私はパレスチナ人の解放と自己決定のための闘いを支持しますが、ハマースの方法は国際人道法に完全には適合していないため、同意できません。

パレスチナ問題に取り組む中で精神的な健康をどう保つかについてですが、私にとっては、初めは画像などが非常に苦しいものでした。私たちが生放送で目にする最初のジェノサイドと言えるでしょう。アラビア語を母語とし、英語やフランス語も話す者として、メディアが言語ごとにこの問題を非常に異なる方法で扱っているのを見ることができます。アラブメディアを見ると、情報が生で入ってくるのを目にします。精神的にとっても疲れましたが、それでもパレスチナ人の生活とは比べ物になりません。そのとき私は少し距離を置くようにして、この問題をどう扱うべきかを自問しました。そして最終的に、自分の職業は人々に教育を提供することだと気づき、それを通じてこの問題に取り組むべきだと思いました。残念ながら、私の大学はこのようなイベントに対してあまりオープンではありません。それで渥美財団に助けを求め、今回2回目のイベントが実現し、3回目も開催できるかもしれません。このようにして私はこの問題に取り組んでいます。それが私のやり方です（編注：発言は英語）。

## 閉会挨拶

■ アキル ありがとうございます。それでは本イベントを終えるにあたり、このフォーラムを実現するまでの道のりを少し振り返りたいと思います。

パレスチナに焦点を当てることを決めた当初、会場を貸してくださる大学を見つけるのは困難でした。渥美国際交流財団はこれまでに多くのイベントを開催してきたにもかかわらず、パレスチナに関するイベントを開催する際には見えない壁に直面したように感じました。この経験を通じて、私たちのフォーラムのテーマである、パレスチナでの継続的な人権侵害を認識し、対処することを妨げる見

えない壁と、アパルトヘイトの物理的な壁、その影響について議論することの重要性に気づかされました。昭和女子大学での会場確保は大きな前進であり、本フォーラムテーマの重要性を改めて実感しました。

今夜、私たちはオープンな対話と教育を通じてその壁を越えました。皆さんがパレスチナについて学び続け、この問題に対するアプローチを個人としても、手段としても探していただければと思います。それぞれが意識向上、アドボカシー（advocacy）または正義と平和を促進する取り組みへの支援を通じて、様々な形で貢献できるでしょう。ぜひ、自分がどのように変化をもたらせるかを考えてください。最後に、このイベントを成功に導いてくださった全ての方々に心から感謝申し上げます。

まずは、講義してくださったハディ ハーニ先生、ウィアム・ヌマンさん、溝川貴己さん、熱心なモデレーターの徳永佳晃さんと郭立夫さん。あとはもちろん渥美国際交流財団の職員の皆さん。特にSGRAパレスチナイベントを拡大するために尽力された今西さん、辰馬さん、三宅さん、ソイヤさん、佐瀬さん、そしてラクーンのスタッフの勝乗さんとジェロさん。私たちを迎えてくださった昭和女子大学、特にこの会場確保を手伝ってくださったシム先生に特別な感謝を申し上げます。そして、イベントのコミュニケーションを支えてくださった通訳の金美穂さんと奥川舞さん、ありがとうございました。

皆様には、この後の懇親会にもご参加いただき、ディスカッションを続けていただきたいと思います。おいしいパレスチナ料理が提供されます。料理を担当するアイダさんが、各料理の説明とその文化的な意味を共有してくれます。ご参加とご協力に関し、感謝いたします。一緒に見えない壁を越えて、理解と連帯の架け橋を築いていきましょう。

それでは皆様、どうぞ引き続き素晴らしい夜をお過ごしください。

郭 立夫 筑波大学

2024年6月25日、第73回SGRAフォーラム「パレスチナの壁：『わたし』との関係とは？」が昭和女子大学でオンラインと対面のハイブリッド方式で開催されました。2月3日に開催されたSGRAカフェに続き、パレスチナ問題を取り上げたイベントは2回目です。ロシアによるウクライナ侵攻に続いて、イスラエルとパレスチナの衝突は長年保たれてきた世界平和を破壊する重大な出来事と見なされがちですが、私は「第二次世界大戦後の世界は平和である」というイメージ自体が誤りだと思います。パレスチナの住民を含む多くの人々が、常に戦争のリスクを抱えて不安の中で生活しています。

東アジアでも、冷戦によって台湾海峡や38度線を境とした緊張が消えることは一度もありませんでした。それにもかかわらず、第二次世界大戦や冷戦後、衝突の可能性が無視されるほど世界が平和であるというイメージは皮肉なほど強く存在します。「世界平和」というイメージが作り上げられてきたことを示しているのでしょうか。このイメージは「衝突」や「戦争」を特定の地域や民族に結びつけ、「文明的かつ先進的で、民主的な」社会とは無縁なものとして描かれることで作られています。今回のフォーラムはまさにこのような文脈の中で、パレスチナで起きている問題は、「わたし」たちから遠く離れた「平和な民主世界」の外にあるのではなく、常に「わたし」たちと関連していると訴えました。

フォーラムは、3つの報告と質疑応答で構成されました。明治大学特任講師のハディ ハーニ氏が、パレスチナ問題を理解するための基礎知識を紹介。特にパレスチナ問題を取り上げる際には「誰がテロリストか」という問いかけがしばしば提起されるが、これがパレスチナで実際に起きている人権侵害や戦争暴力から議論の焦点をずらしてしまい、効果的でないと主張しました。

東京工業大学大学院生のウィアム・ヌマン氏は、ヨルダン川西岸やガザの植民地建築を事例に挙げ、建築がいかに政治的道具として抑圧や排除を強化するものになるかを論じました。公共空間は決して政治から離れたものではなく、排除や抑圧を強化する危険を常に抱えています。「わたし」たちと関連している例として、2021年の東京オリンピックを契機に渋谷区などで起きた街の高級化(gentrification)が、それまでの住人を排除することになり、ガザでの都市構造



と同じ効果をもたらしていると解説しました。

最後に早稲田大学学部生の溝川貴己氏が、東京におけるパレスチナ解放運動の当事者として、東京での活動がどんなグループや運動と交差しているかを紹介しました。東京での活動が現地の多くの団体と実際に交差している様子は、フォーラムのテーマである「『わたし』との関係とは」を実例で示してくれました。

質疑応答では、発表者の3人が現場とオンラインからの質問に答えました。具体的には「パレスチナ（テロリスト）VSイスラエル（民主社会）」という二項対立の取り扱いや、日本人（特に大学生）がどのようにこれらの活動に関わるべきかというテーマが取り上げられました。

「テロリストVS民主社会」という二項対立について、発表者たちはパレスチナで起きている戦争暴力は単なる政治問題ではなく、正義の問題であるとの合意に達しました。特にヌマン氏は、正義の問題を政治問題として討論のテーマとすることに注意を喚起しました。言い換えれば、ヌマン氏は人権などの基本的な倫理的問題は、議論の余地がないものであるべきだと主張しました。

次に、日本の人々、特に大学生が政治的関心を失いつつある現状において、いかに多くの人々に運動に参加してもらうかという問題について、溝川氏は自身の経験を踏まえて、諦めずに活動を続けることの重要性を強調しました。政治的活動に頻繁に参加すると、「意識が高い」といったスティグマ（偏見や差別）を受ける危険があるものの、周囲に「意識が高い」人がいないと問題提起が困難になるため、継続的な参加が重要であると主張しました。

フォーラム後、パレスチナ活動家のアイダさんが手作りのパレスチナ料理を提供し、皆で一緒に食事しながら、さらに交流を深めました。

私は性的マイノリティを対象としたフェミニズム・クィア研究を専攻しており、フォーラムでも多くの感銘を受けました。この研究では「わたし（主体・主語）」というものがその理論を支える重要なツールです。この報告でもあえて自分の存在を消すことなく、「私は」から始まる文を書きました。その意味で、今回のテーマ「『わたし』との関係」も自明なものです。実際、クィア研究者のジュディス・バトラーも『戦争の枠組み』という本の中で、メディアがいかに「戦争／衝突」を文明社会の外部にあるものとして構築しながらも、テレビ画面を通してそれを視聴している人々に無限に近づけているかについて論じています。

さらに、イスラーム文化が同性愛を嫌悪するホモフォビックであるため、LGBTの権利を支持する民主国家がそれらの国に対して戦争を起こしても「正義」の一種であるという政治に対する批判もクィア・スタディーズの重要な柱の一つです。その意味で、溝川氏が報告したパレスチナ解放運動とクィア運動の連帯も不思議なものではありません。クィア運動は長年「人権」などの名義で行われてきましたが、それは近年強い揺り戻しを受けています。というのも、LGBTの人権を保護することが生まれ持った性別と性の認識が一致するシスジェンダー・異性愛者の人権を侵害するという議論が多く提起されるようになったからです。しかし、それは実際にはパレスチナ問題のように討論のテーマに扱われるべき「政治問題」ではなく、議論の余地がない「正義（Justice）」の問題であ

るという姿勢が重要なのではないかと思います。

最後に、「壁」というメタファーについてお話しします。フォーラムではパレスチナ問題を議論する「壁」を、タブーと言論の自由への抑圧および物理的な分離の壁の象徴として扱っていますが、私はそれが実はさらに豊富な意味と政治性を秘めていると思います。「壁」の辺境という意味と「皮膚」との類似性を強調したいです。「壁」も「皮膚」も外部と内部を分離する機能および、外部から内部を守る機能の両方を備えています。そして両方ともある「主体（身体）」の辺境を示すものです。それはもちろん拒否や保護の姿勢を含みますが、接触、とりわけ接触することによる快楽（性的なものも含む）、あるいは包まれる安心感が存在する場所にもなります。壁／皮膚が存在することとは、痛みと快楽が同時に存在することを意味しています。これまでパレスチナ問題に対して議論できない、わからない「壁」を感じているということは、心の中のその壁に向き合えば、まさにその壁から接触／連帯が生じうる可能性があることを意味しています。

（郭立夫「第73回SGRAフォーラム「パレスチナの壁：『わたし』との関係とは？」報告」より転載）



【シリーズ3】  
講演逆境を超えて：  
パレスチナの文化的アイデンティティ

山本 薫

慶應義塾大学

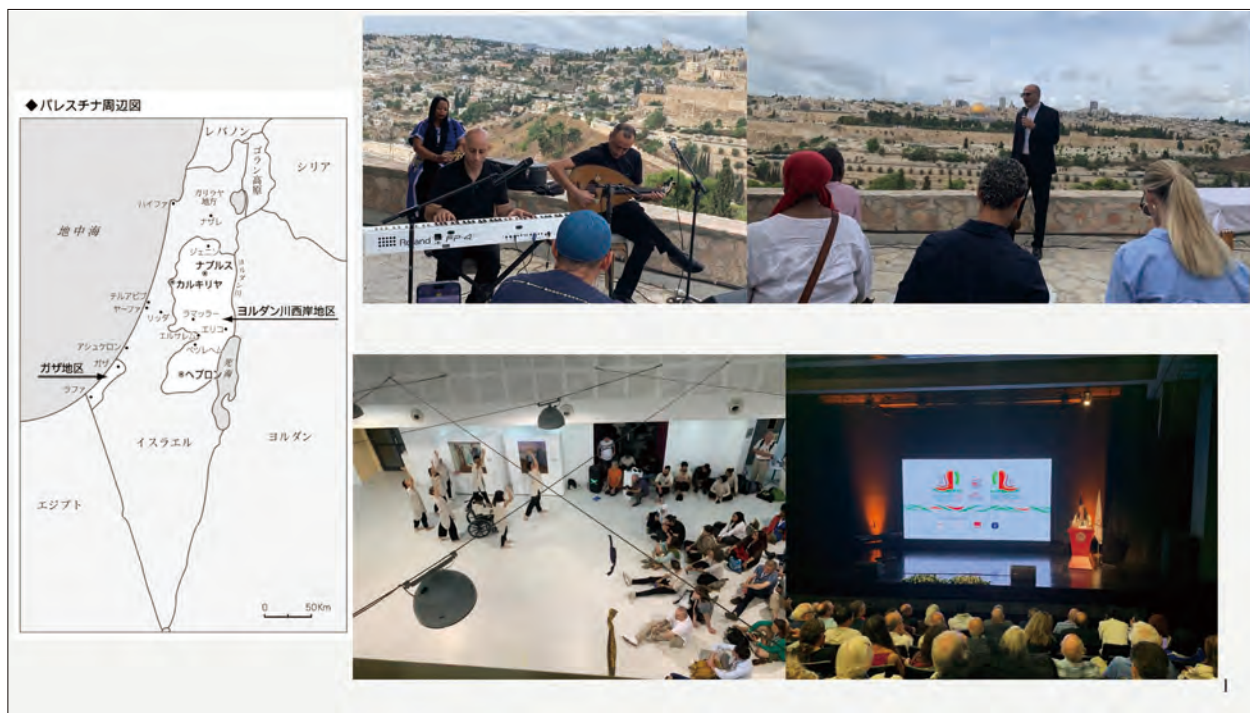
## はじめに

今日はパレスチナのアートの力、パレスチナ人が文化を通じて自分たちの歴史的存在とその人間的価値を証明してきた歩みについてお話しいたします。馴染みのないテーマだと思われるかもしれませんが、話の後にぜひいろいろとご質問などいただけましたら幸いです。

ハマスを中心とするガザの武装勢力がイスラエル領内への攻撃を行い、それに対するイスラエルの苛烈な報復攻撃が始まってから、もうすぐ1年経ちます。ガザはこれまでも繰り返しイスラエルの攻撃を受けてきました。特に2007年にハマスと呼ばれるグループがガザを実効支配するようになり、それに対してイスラエルによる封鎖政策が強化されてから、大きいものだけでも2008年、2014年、2021年と、繰り返し大きな攻撃が行われてきました。これまでは最長でも1ヶ月半ぐらいで停戦に達していましたので、私も長年パレスチナのことを見てきて、まさかこれほどのジェノサイドが1年も続くようなことになるとは全く予想しておらず、今でも本当に信じられない思いがしています。しかも、もうすぐ戦闘開始から1年というところでレバノンにまで戦線が拡大していて、本当にこの先どのように終わりが来るのか、全く見えない状況です。

私は去年（2023年）のちょうど今日、10月5日にパレスチナから日本に戻ってきました。去年の9月末から10月4日まで、1週間と少し現地パレスチナにありました。こちらの地図をご覧ください（スライド1）。歴史的にパレスチナと呼ばれている領域はこの楔形のような部分です。右側のヨルダン川西岸地区、それから左側にガザ地区と呼ばれる部分があり、それ以外の少しグレーがかっている部分がイスラエルという国家です。このヨルダン川西岸地区にイエス・キリストの生誕の地として有名なベツレヘムという町があります。ここにダール・アルカリマという大学がありまして、そこが主催した国際シンポジウムに参加していたのです。世界各国から100人以上の研究者や活動家などが集まり、スタディツアーも行われました。ガザ地区はもう長年、外部の人間が入ることはほとんど不可能なのですが、ヨルダン川西岸地区だけではなく、現在イスラエル国家がある部分、元々パレスチナ人が暮らしてきた歴史的な地域なども訪れることができました。ヤーファから巡ってハイファ、今戦闘が拡大しているこのレバノンとの国境の付近、そこからゴラン高原、こういったところもずっとスタディツアーとい





スライド 1

う形で回ってきました。ベツレヘムでは3日間のシンポジウムが開催されて、たくさんの仲間と知り合い、一生こんなに思い出に残る機会はないというぐらい素晴らしい経験をした直後に攻撃が始まりました。一緒に参加していた仲間の何人かもなかなか帰国できないような状況になって、急転直下と言いますか、本当にそんなことになるとは思わなかったというショックを、まだ今でも信じられないという思いで引きずっています。

スライド1の右下の写真は、そのシンポジウムの最初のセレモニーの様子です。「Land People and Culture / 土地、人々、そして文化」というのが総合テーマになっているシンポジウムで、まさにパレスチナの地に根付いてきた民衆の文化のレジリエンス、これがテーマになっていました。このシンポジウムの開催に合わせて、音楽コンサートやダンス、絵画展など様々なアートの展示企画なども行われていました。イスラエルの占領下・支配下で粘り強く生きるパレスチナの人々の文化やアートにすごく勇気づけられた、ちょうどそういうところだったのです。

右上の写真でマイクを持っている男性はダール・アルカリマ大学の学長でミトリ・ラーヒブさんです。著作の日本語訳も出版されています。この方の後ろ遠方に金色のドームが見えるでしょうか。こちらが有名なエルサレムの町です。私たちがいる側はオリーブ山で、それこそ聖書の舞台です。イエス・キリストが最後の説教をしたと言われているオリーブ山、そこから臨んだ景色です。金色のドームはイスラムのモスクである岩のドーム、その左側にアクサー・モスクというイスラムの聖地が臨める、そういう丘の上でお話を伺っていた、そんな写真です。

ダール・アルカリマ大学というのは規模の小さい新設の大学なのですが、音楽、舞台芸術、絵画、陶芸など様々なジャンルのアートを専攻することができるという非常にユニークな大学です。実際にパレスチナで活躍しているアーティスト



トたちを講師に迎えています。私の友人の音楽家や俳優さんなども講師として働いていました。例えば左上の写真はその時のイベントの一環の演奏会ですが、ここでウッドという楽器を弾いている方は、まだ彼が中学生ぐらいの時から私を知っている音楽家です。偶然再会してすごくびっくりしたのですが、そういう思わぬ出会いもありました。

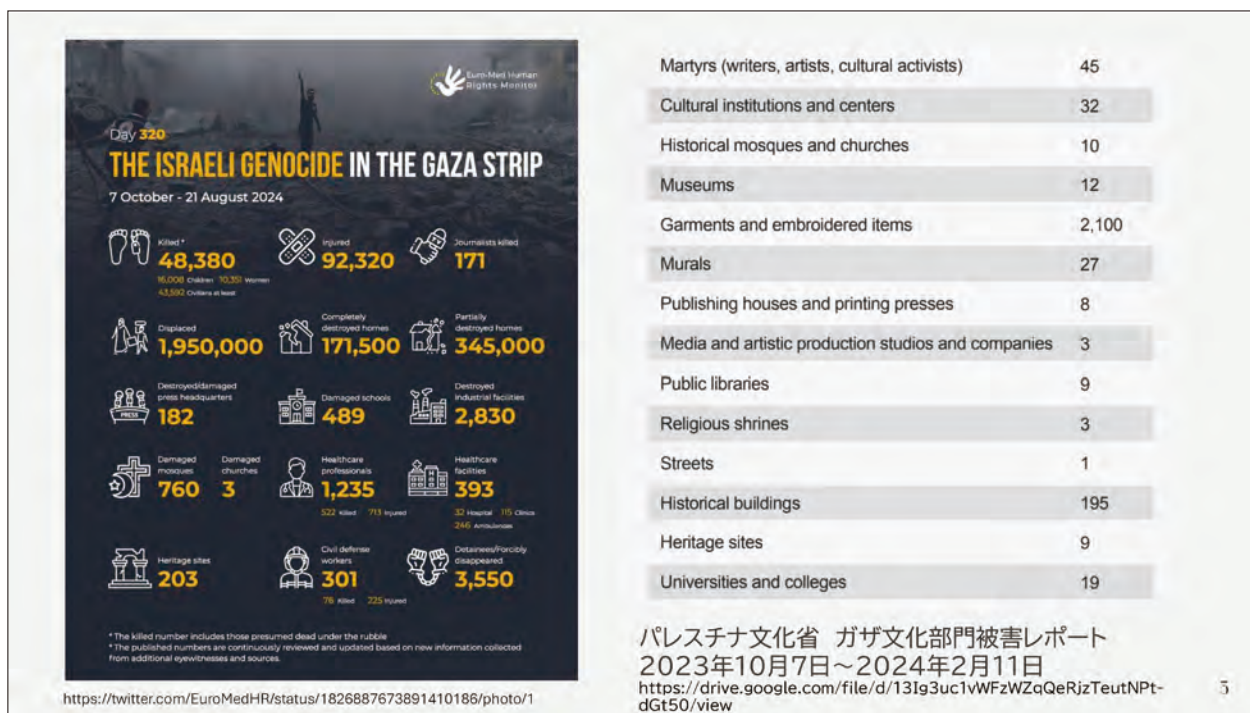
## 1. パレスチナ人にとってアート活動とは

イメージできない方も多いかもかもしれませんが、実はパレスチナはアラブ世界の中でも非常に文化活動やアート活動が盛んで、世界的にも高く評価されているアーティストや作品を多く生み出してきた土地でもあります。そうした作品の多くが日本でもかなり紹介されてきました。これはほんの一例ですが、小説、映画、カリカチュア（風刺漫画）、こういったビジュアルアートみたいなものもあります（スライド2）。全部日本語訳がありますし、DVDなどもあります。関心のある方はぜひ手に取って触れていただければと思います。それから、日本とパレスチナの間では演劇の交流が非常に盛んです。現地から役者さんたち、カンパニーが来日して公演することもありますし、日本の演劇人と合作していろいろな作品を上演するような機会も増えています。1番最近のものだと「占領の囚人たち」というシリーズ。こちらは日本国内の大きな演劇の賞もとっています。この舞台を映した映画上映が全国で行われていたりしますので、機会があればそういうところもチェックしていただければと思います。

こうしたパレスチナのアート、文化に魅了されてきた人間として、昨年10月にイスラエルがガザへの集団懲罰的な攻撃を始めるにあたって、イスラエルの



スライド2



スライド 3

当時の国防相が言った言葉は非常にショッキングなものでした。彼はこう言ったのです。「我々はヒューマン・アニマルズと戦っている」。ガザの人たちのことを「人間の姿をした動物」と評して、自分たちの攻撃を正当化しようとした。この発言からは、10月7日から続いているガザへ攻撃が単なる軍事作戦にとどまらない、パレスチナ人の人間性そのもの、ヒューマニティそのものを否定して、その証拠となるような歴史や文化の否定・抹消を試みる、そうした歴史的に続いてきたイスラエルの政策の一環であることが明らかに汲み取れると思います。

実際イスラエル軍は昨年10月から現在までに、軍事的脅威とは無縁なガザ地区の教育機関、大学をことごとく破壊しており、多くの博物館、図書館、文化施設、歴史遺産、こういったものに甚大な被害を与えてきています（スライド3）。画面左はユーロメッドという国際NGOが定期的にまとめているガザの被害状況です。2024年8月の時点ですでに死者が4万8000人。これはもっと数は多いけれども、瓦礫の下などに遺体が埋まっていた全容がわからないとも言われております。怪我人を含めると最低でも10数万人の方が死傷し、文化遺産は200以上、それから病院であるとか学校であるとかも破壊され、ガザはほとんど人が住めない状況になっています。右の表はパレスチナ文化省がまとめた被害レポートです。こちらは文化大臣が交代してしまったので、最新のものが2月11日までで終わっているのですが、攻撃の最初の4か月間だけで19の大学、ガザにあった全てのユニバーシティとカレッジが破壊され、12の博物館、32の文化センター、そして世界でも最も古い教会の1つと言われていた有名なキリスト教の教会がガザにあったのですが、そこも避難民ごと爆破され、歴史的なグランド・オマリー・モスクといった、イスラム圏でもかなり初期に建てられたと言われていたモスク、そういったモスクや教会を含む多くの歴史的な遺産が被害を受け、失

われました。また、ジャーナリスト、作家、アーティストといった文化人が狙い撃ちにされています。

そうした中、日本を含め世界でも非常に注目されて有名になった方にリファト・アルアライールさんという方がいらっしゃいます。英文学の教授で詩人でもあった方です。彼はガザの若者たちに、自分たちの経験を世界に発信するために、英語で物語であるとかエッセイであるとかそういうものを書く、そういう教育活動をずっと続けてこられました。そして昨年12月に自宅を爆撃されて殺害されました。彼が残した『If I must die』（もし私が死なねばならないなら）というタイトルの英語で書かれた詩は、世界中、70言語以上と言われていますけれども、世界各国の言語に翻訳されてSNSで回覧されたり、あるいは世界各地のパレスチナ支援のデモで読み上げられたりして広がっています。このリファトさんの詩は、日本で最も権威のある詩の雑誌『現代詩手帳』がパレスチナの詩の特集を組んだ今年の5月号に、松下新土氏と増渕愛子氏による共訳で掲載されています。こちらも異例の売れ行きで、詩の雑誌は普段はそれほど売れないらしいのですが、今までにないぐらいたくさん増刷されて、多くの方に感銘を与えています。また、リファトさんがガザの若者たちを指導した短編集『Gaza Writes Back』という英語で書かれた本があるのですが、12月に日本語訳が河出書房新社から出ると聞いております（編注：邦題『物語ることの反撃：パレスチナ・ガザ作品集』）。こういったガザの若者たちの考えていること、あるいは、多くの方がガザを出て、あるいは亡くなっている状況ですので、考えていたことというべきかもしれませんが、そういうものに触れる機会もありますので、ぜひチェックしていただければと思います。リファトさんはこういった活動を通じて、ガザで亡くなっていく死者は単なる報道で消費されていく数字ではない、1人1人が語るべき物語を持っている人間なのだと伝えていました。

振り返ってみれば、パレスチナ人の歴史や文化を否定し、抹消しようとする試みは、イスラエルの建国以降、絶えず行われてきました。それに対してパレスチナ人の側からは、自らの存在と人間性を証明する文学やアート作品が数多く生み出されてきました。世界的に著名なパレスチナ出身の評論家にエドワード・サイードという方がいますが、彼はあるときの対談で次のように語っていました。

政治的アイデンティティが絶えず脅かされている場合には、文化は消滅と忘却に抵抗して戦う手段となります。文化は抹消削除に抵抗する記憶形式です。この点で、文化はこの上なく重要であるとわたしは考えます。

ここには、パレスチナの人々、故郷を奪われ、命を奪われ、存在そのものが否定されてきた人々にとって、なぜこのように文化活動が重要なのかということの一つの答えが表現されていると思います。

## 2. パレスチナ問題略史と今

イスラエルという国は、ユダヤ人がヨーロッパで迫害されたという歴史を経て、ヨーロッパからパレスチナの地に入植をし、そしてその地の先住民であるパ



## パレスチナ問題略史



- 1920年 オスマン帝国の一地域だったパレスチナを第一次世界大戦で勝利したイギリスが委任統治(＝植民地支配)。この時期、ヨーロッパで迫害を受けたユダヤ人の移民が大量に流入、地元のアラブ人との間の緊張が高まる
- 1948年 イギリス撤退と同時にユダヤ人国家イスラエル建国。約500のアラブ人の町村が破壊され、6割にあたる70～80万人が難民に⇒国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)の登録難民、約590万人
- 1967年 第3次中東戦争でイスラエルはヨルダン川西岸地区、東エルサレム、ガザ地区を占領。パレスチナ人(＝パレスチナのアラブ人)はこれらの地域に独立国家の樹立を求め続けている。
- 1993年 オスロ合意によって、ヨルダン川西岸地区とガザ地区にパレスチナ自治政府が成立。だがその権限の中身も及ぶ範囲も極めて限定的で、実態としてイスラエルの支配下におかれた状態が続いている

### ◆パレスチナ周辺図



著作者：現代企画室『占領ノート』編集班／  
逢山なぎ／パレスチナ情報センター

#### スライド 4

パレスチナ人から土地を奪い、彼らを追放することで成立した国家です。パレスチナ問題の略史を簡単ですがまとめておきましたので(スライド4)、ご覧になりながらお話を聞いていただければと思います。

ヨーロッパからパレスチナへ入植するというシオニズム運動、当初はパレスチナ以外の選択肢もあったのですが、いずれにしてもユダヤ人の安住の地を求めるシオニズム運動は19世紀にまで遡る歴史があります。そして19世紀末から20世紀にかけて本格化していきます。パレスチナへの移住が始まったのは1880年代、19世紀の終わりぐらいからです。その後、第一次世界大戦でイギリス、フランス、ロシアといった国々が、当時このパレスチナ一帯を支配していたオスマン帝国に勝利し、オスマン帝国下でアラブ人が暮らしていたパレスチナ一帯に国境線を引いて植民地支配を開始します。歴史的にパレスチナと言われる部分はイギリスが支配していくのですが、その時代にイギリスの後押しによって大量のユダヤ人がパレスチナに流入するようになっていきます。

初期のヨーロッパのシオニズム運動、ヨーロッパでシオニズムを宣伝するにあたっての有名なスローガンに、「土地なき民に、民なき土地を」という文言がありました。土地なき民というのはユダヤ人、民なき土地というのは彼らにとってはパレスチナのことを指していました。パレスチナは無人の荒野である、そこにヨーロッパで行き場を失ったユダヤ人が行って自分の国を立てようじゃないかと、こういう宣伝をヨーロッパでしたわけです。これはもちろん虚偽の主張です。パレスチナは決して無人の地ではありませんでした。このスローガンを現実のものにするためには、パレスチナに住んでいるアラブ系先住民を追放しなければいけない。それがイスラエルが行ってきたことです。

1948年にイスラエルは建国を宣言しますが、それにあたってパレスチナ人の



町や村を破壊し、そこに暮らしていた住民を殺害、追放することで、「土地なき民に、民なき土地を」のスローガンを実現しようとしたわけです。そこに暮らしていたパレスチナ人の存在はなかったものにされなければいけません。単に物質的に彼らを亡きものにするだけではなく、そこに暮らしてきたという歴史や記憶そのものを抹消しようとする。この試みはずっと続けられてきて、その主戦場は、例えば歴史学のような学問の分野であり、そして文化の分野でもありました。この試みは今でもずっと続いています。これをユダヤ化ということができると思います。土地を奪い、アラビア語の地名をヘブライ語に変える、聖書時代の地名に入れ替える。あるいは町を壊し、数千年前の遺跡を掘るために上に住んでいた人の家を壊して追放して、そこにあった生活はなかったことにする。さらに歴史の記述でもパレスチナ人などという人間はいなかったと宣伝していくわけです。これをまとめて、パレスチナの地のユダヤ化ということができます。

ちょうど1ヶ月ほど前になりますが、今年2024年の8月の末に私は河出書房新社からパレスチナの小説の翻訳本を出版しました。先ほど会場で回覧して御覧いただいた黄色の表紙の本です。アダニーヤ・シブリーというパレスチナ人の女性作家が書いた『とるに足りない細部』という小説で、3、4時間で読めてしまうほどの短い小説ですので、ぜひ手に取っていただければと思います。この小説はまさにこうしたユダヤ化が進行するパレスチナの土地で暮らしているパレスチナの人々が感じる疎外感、孤立感、そういったものを非常に繊細な筆致で描いた素晴らしい小説で、大変好評いただいている作品です。著者のアダニーヤさんは1974年生まれでこの本が3作目になります。『Minor Detail』という名前で出版された英訳が国際的に非常に高く評価されて、全米図書翻訳部門で最終候補になったり、世界で最も権威のある文学賞の1つであるイギリスの国際ブッカー賞の候補になったりしています。去年2023年には、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、アラブ世界の女性作家を対象にしたドイツのリベラトゥール賞というのを受賞しました。これは非常に権威のある賞です。去年10月にフランクフルト・ブックフェア、これも世界で最も大きなブックフェアですが、本当はここで授賞式が行われることになっていました。

ところが、その授賞式の直前の10月7日に、ハマースをはじめとするガザ地区の武装勢力がイスラエル領内に奇襲を仕掛けたわけです。その時に、この賞の主催団体が授賞式の無期限延期を発表しました。さらに、フランクフルト・ブックフェアそのものの主催団体が、イスラエル側への完全な連帯を表明しました。ドイツはパレスチナ問題に対して非常に複雑というか奇妙な立場にいるためです。この小説は少なくとも作者の意図としては政治的な作品ではないですし、ガザの攻撃よりもずっと前に書かれたものです。けれども、それと関連付けられて授賞式が中止されました。これに対して日本も含め世界各地の作家であるとか出版関係者が抗議の声を上げて署名活動なども行われましたし、日本でもたくさんの報道が出たりして、シブリーの名前は一躍国際メディアの注目を集める存在になってしまいました。本人が望んだことでは全くなかったのですが……。ドイツがどうしてイスラエルに全面的に寄り添うか。皮肉な話ですが、ナチスドイツがホロコーストによってヨーロッパのユダヤ人を殲滅しようとしたその責任をドイツは

負っており、それが戦後の現在のドイツのアイデンティティになっています。それが非常に歪んだ形で今、現れているわけです。イスラエルによるガザへの攻撃やパレスチナ人に対する占領政策を批判することは、決してユダヤ人に対する攻撃や差別ではないにもかかわらず、そこをどうしても切り離せない。これはドイツが抱える非常に大きな矛盾なのですが、これはまた別のお話なのでこの作品の紹介に戻ります。

この作品は2部構成になっています。第1部はイスラエルが建国した1948年の翌年、1949年8月のイスラエル南部の砂漠地帯、ネゲブ地方が舞台です。ここにイスラエル軍の部隊が駐屯していて、アラブ人の残党を一掃するという軍事作戦に従事していました。そこであるアラブ人の一家を虐殺し、一人生き残った当時12歳の少女を拉致して軍事キャンプに連れていき、レイプし、そして最後には殺害するという事件が起こります。これを加害者であるその軍の将校の視点から描いているのが第1部です。これは先ほどお話ししたフランクフルトでの授賞式が中止された理由の一つとしても挙げられていました。非常に反ユダヤ的だと。しかし、これは実際に起きた事件です。当時の裁判記録も残っているのですが、長らく忘れられていた事件でした。それが2003年にイスラエルのハアレツ紙という新聞が掘り起こして記事にして話題になったものなのです。この小説はそれを踏まえて、その記事を読んだという設定のパレスチナのある女性、現代を生きる女性を取り憑かれたようにその事件の真相を追っていく。これが第2部で展開するという2部構成になっています。

元の記事はイスラエル側の証言だけで構成されていて、被害に遭い、そして沈黙させられた少女の側の声、経験は全くわからないわけです。この小説の第2部の主人公のパレスチナ人女性は、その少女の側の物語を求めて、自宅があるヨルダン川西岸地区を出て、事件が実際に起きたとされている地区を訪れます。これは先ほどの地図（p73・スライド4参照）をたどった方がわかりやすいと思います。この小説の舞台ですが、ラマッラーという場所に第2部の主人公が住んでいます。ヨルダン川西岸地区の主要都市で、今パレスチナ自治政府が本拠地を置いている事実上の首都です。そして事件があったのは、今攻撃が行われているガザ地区を取り囲む縁みたいな場所にある、エジプト国境ともほど近い砂漠のはての町になります。女性はここを目指します。途中で資料を求めてイスラエルの主要都市であるテルアビブ近郊の博物館などにも行くために、ラマッラーを出てイスラエル領内に入っていきます。

これも今日はあまり細かいお話はできないのですが、この地図で見るとヨルダン川西岸地区全域はパレスチナ人のテリトリーに見えるかもしれませんが、でも、これは全く真実ではないのです。ヨルダン川西岸地区は1993年にイスラエルと結ばれた合意を基に一部でパレスチナ人の自治が行われています。自治政府もありますが、実際にこの領域の中でパレスチナ人の自治が及んでいる領域は2割にも満たないのです。ほとんどの領域がイスラエルに支配されていて、軍人が常にパトロールしています。特に今ガザ攻撃が行われていて、ヨルダン川西岸地区も毎日毎日イスラエルの軍隊による襲撃や逮捕、殺害が行われています。全く自由のない状態です。そうした中でこの女性は、イスラエル領内に入る許可もないの

で偽の身分証を入手して、身分を偽ってこっそりイスラエルに入っていきます。非常に危険な旅をして、事件のあった地区の近辺までどうしても行きたい。この衝動がなんであるのかは重要なポイントなのですが、小説の中で感じていただければと思います。

ヨルダン川西岸地区を抜け出して、偽の身分証を使ってイスラエル領内に深く分け入っていく過程が細かく描かれるのですが、その過程で国際法に違反しているイスラエルが建てた分離壁、あるいは入植地といった障害によって、道中がもうどんどん分断されていくわけです。簡単には通ることができない。昨年まであったはずの道路が今日はない、10年前にはあったはずの村がもう今日はない、そういう現実直面していき、歴史的なパレスチナのランドスケープが急激に改變されていく中で、分断されて移動の自由も生活の自由もない、そういう名ばかりのパレスチナの自治の実態というものを目の当たりにしていきます。

イスラエル領内に入っていくと言いましたが、もちろんここは元々パレスチナ人が暮らしていた地域ですから、そこには無数のパレスチナの村や町があった。しかし、それは全て今破壊されているわけです。彼女はこの旅の道中、現在のイスラエルの地図と1948年以前のパレスチナの地図を見比べながら進んでいきます。そうすると古い地図にはたくさんパレスチナ人の村の名前があるのに、今そこにあるのはユダヤ人の町、あるいはこれは現地に行かれると驚かれるかと思うのですが、破壊されたパレスチナ人の町や村のかなりの多くは瓦礫のまま残っていたりします。そこが広大な森林公園になっているなど、非常にグロテスクな場所になっています。そういうところをたどっていくことで、パレスチナの人たちの存在が、単に地上から物理的に消されただけではなく、消されたという歴史や記憶そのものがもう今薄れている、そういう中で非常に疎外感を募らせていくというストーリーになっています。

最後ついに主人公はレイプ殺人が行われたガザの際（きわ）のところにたどり着くのですが、そこはまさに去年10月7日にガザ地区から攻撃が行われた、ガザ地区の外縁部にあたります。この一帯にはキブツと呼ばれる入植村、ユダヤ人が暮らしている村々、それから軍事基地がたくさんあるわけですが、そういうところにロケット弾が打ち込まれ、パレスチナ人の戦闘員によって1000人を超えられているユダヤ人が殺害されたわけです。もちろん、この小説はもっと前に書かれていますが、まさにその現場とも重なり合うわけです。

歴史を遡れば今回ハマスらが攻撃した一帯にあるユダヤ人の村々というのは、元々はパレスチナ人が住んでいた地域です。そしてこの小説の中で描かれているのは特に、アラブ系の遊牧民ベドウィンと呼ばれる人たちの生活地域でした。ちなみに当時9万人いたと言われているベドウィンは追放されて、1948年には1万人以下にまで減っていました。

では、追放された人たちはどこに行ったかというと、多くが難民になってガザ地区に押し込まれ、あるいはエジプト側に逃げ、そして何度も何度も帰還を試みる。それが侵入者として掃討作戦の対象になる。それがこの小説で描かれている少女殺害事件の背景になっています。ニュースだけ見ているとユダヤ人の村や町が襲われて殺された、それしか見えないかもしれませんが、歴史をさかのぼる



と、どうしてそこにユダヤ人たちが住んでいるのか考えさせられます。かつてそこは軍事的な前哨基地にほかならなかったわけです。パレスチナから土地を奪い、還ってこようとする難民を追い返すための軍事拠点として始まったところです。ガザにいる難民からしたら、そこは一般の村や町には見えないということが、私には理解できます。

### 3.封鎖されたガザ地区で

次に、ガザの状況をお話ししていきたいと思います。ガザ地区は地図をご覧ください。ただけばわかるように、イスラエルとエジプトに囲まれた狭いエリアです。東西10キロ、南北40キロほどで、山手線の内周ぐらいだと言われます。この非常に小さいエリアに、2023年時点で約220万人のパレスチナ人が暮らしています（スライド5）。そのおよそ7割はイスラエルが建国して今はイスラエル領になってしまったところに、もともと暮らしていた人たちが追われて難民となって、ガザ地区に押し込められた、その人たちとその子孫になっています。30歳以下の若者が人口の70%を占める非常に人口構成の若い場所です。

ガザ地区は、イスラエル建国の1948年から約20年間は隣国のエジプトの統治下に置かれるのですが、1967年の戦争でイスラエルに占領されて今に至ります。その後、1993年のオスロ合意に基づいてパレスチナの自治政府がガザ地区にも誕生します。これが1994年なのですが、実は私はその時、当時学生でガザを訪れていました。長年のイスラエル軍の支配から解放されて、パレスチナ人が警官の制服を着て道に立っている、イスラエル軍の代わりにパレスチナ人警官が道に

## 封鎖されたガザ地区

- 2005年 イスラエルがガザ地区の入植地を撤去、軍を撤退＝分離と封じ込めへの転換
- 2006年 パレスチナ自治評議会選挙で和平反対派のハマースが圧勝
- 2007年 ハマースがファタハを追放しガザ地区を実効支配。イスラエルによるガザ封鎖の強化。物と人の出入りが厳しく制限され、経済や医療・衛生の危機的狀態が続く
- 2008年12月～2009年1月 イスラエルのガザ攻撃でパレスチナ側に死者1400人、イスラエル側に死者13人
- 2014年7月～8月 イスラエルのガザ進攻でパレスチナ側に死者約2100人、イスラエル側に死者約70人
- 2012年、2021年にもイスラエル軍の侵攻を受けている



ガザ地区  
長さ50km、幅5～8kmほどの土地に約200万人の人が住む、世界で最も人口密度が高い場所の一つ。人口の約45%は14歳以下の子ども、7割は難民

HAMAS = 「イスラーム抵抗運動」の略称  
エジプトのイスラーム主義組織「ムスリム同胞団」のパレスチナ支部を母体に1987年に結成。武装闘争によるパレスチナ全土の解放とイスラーム国家の樹立を目指す。武装抵抗と社会福祉の両面で支持を拡大。オスロ合意反対派の中心的な存在として、和平交渉推進派であるPLO内の最大党派ファタハとの対立を深める。



いる、そういう光景の中で皆がものすごく解放感を感じて未来に希望を持っていた。その時のことを懐かしく思い出します。しかし、実際にはイスラエルの軍事支配から脱した後も、ガザ地区内にはユダヤ人の入植地が残り、それを守ると称してイスラエル軍の駐屯も続き、イスラエル軍によるパレスチナ人に対する暴力も絶えることはありませんでした。

そして、2005年にイスラエルは政策を転換して、ガザ地区からはユダヤ人の入植地と軍を撤廃させるのですが、代わりにガザの四方を封鎖して国境を完全に管理し、人や物資の出入りを禁じる封鎖という政策に進みます。その後、パレスチナ内部の足並みの乱れなどもあり、イスラエルの占領に徹底抗戦を唱えるハマスと言われる政治勢力が、ガザ地区で実権を握るようになりました。イスラエルはハマスをテロ組織だと考えており、欧米諸国も同様にハマスをテロ指定して、制裁としてガザ地区への封鎖はさらに強化されました。それが2007年以降です。最低限の生活必需品にもこと欠くような非常に過酷な封鎖政策が続いています。

しかし、そんな中でもガザでアート、文化の火が消えることはありませんでした。特に2007年以降は物資が入らないだけではなく、若い人が勉強して海外に行きたい、あるいはエルサレムに行って礼拝をしたい、そんな夢すらも叶わない。多くのガザの若者はガザ地区から出ることがないです。そうした孤立した若者たちの中から、インターネット、SNSなどを駆使して外の世界と繋がって、自分たちのクリエイティビティやエイジェンシーを発揮してそれを世界に伝えていく人たちが現れました。そのようにして非常にユニークな若者のストリートカルチャーが世界中から注目を集めるようになっていきます。

その中でも最も有名な一つといえると思うのがパルクールと言われる競技です(スライド6)。写真下のURLから記事に飛ぶと動画も見られますし、「ガザ パルクール」で検索していただくとたくさん出てくると思います。パルクールというのはアクロバット芸の一つですが、特徴としては都市の中の建物や道路などの障害物を使ってアクロバットをするのです。都市を駆け抜けながら壁を飛び越えたり、駆け上がったり、回転したり、そういう都市のスポーツです。ヨーロッパなどでも非常に人気があって大会も行われています。ガザでパルクールがすごく人気があるのは、なんと言っても狭い土地で、競技場も足りない、グラウンドも足りない。そして非常に危険で、常に破壊されて瓦礫で溢れ返っている。例えばサッカーなども大好きなのですが、ストリートサッカーはやれても競技場などが足りない。それで一部の若者たちが始めたのがパルクールです。2023年10月7日の攻撃以降、多くのガザの人たちが家を失い、避難してテント生活をしているのですが、テント生活が始まった中でも海岸の砂丘を使ってこういう競技を始めています。普段は町の中の瓦礫の間を縫って、ビルとビルの間を飛び移ったりしていて、そういったものをSNSで発信することで、自分たちの励みにもなり、ガザの現状を知らしめることもできるという表現の一つです。写真の下の記事は今年の1月の記事で、パルクールをやっている若者の1人がインタビューに応えたものです。パルクールという競技そのもの、つまり破壊された街並みをプレイグラウンドに変えること、これがガザの人たちのレジリエンスとか人間的な創造

性というものの大きな表現になっていることがわかんと思います。

それからもう一つ、パレスチナと言えば、非常に有名なストリートアートがグラフィティです。路上の壁などに描く落書きアートですね。パレスチナでは、例えばバンクシーというイギリス出身の覆面美術家がこっそり来ては、イスラエルがパレスチナ人を封じ込めるために建てた巨大な分離壁や瓦礫の壁にグラフィティアートを残しています。バンクシーの作品は世界的なオークションで億の値段がつくのですが、彼はガザの人たち、パレスチナの人々に寄り添うためにそういう無償のアート活動をゲリラ的に行っています。これは有名な話なのでストリートアートというとなすぐにそれが思い浮かぶかと思うのですが、パレスチナでは元々、バンクシー以前から路上のグラフィティは重要なローカル文化の1つでした。スライド右下の写真はインスタグラムからの引用で、ビラルさんというガザ出身の写真家でグラフィティのアーティストでもある方の作品です。これはアラビア文字を使って「アフラーム（夢）」と書かれていた巨大な作品でした。ビルの壁に書かれていたものですが、今回の攻撃で破壊されて、それを彼がインスタグラムに投稿したというものです。皮肉ですね。夢と書かれた作品がこのように破壊されて……。それでもなお、この崩れた壁の上にまたグラフィティを描くということも多くの方が行っています。ぜひ興味のある方はご覧になってください。

私はこうしたグラフィティであるとかパルクールであるといったパレスチナの、特にガザの若者たちのストリートカルチャーにすごく関心があって、研究の対象の一つにしてきました。とくに関心を持っているのがラップミュージックです。ラップミュージックは1990年代の終わり、2000年代ぐらいからガザに限らず、パレスチナ全体に非常に広がっています。パレスチナだけでなく世界中そう



<https://aje.io/az79hf>

“It is a message to the world that our resolve to live is stronger than ever and to show to the world the extent of destruction caused by Israeli bombs”



<https://www.instagram.com/belalkh/>

6

スライド 6

ですね。ここで少し宣伝なのですが私の略歴に近刊として記載されている『辺境のラッパーたち—立ち上がる「声の民族誌」』という本があります。ラップはアメリカ発祥ですが、日本でもしっかり定着しているように世界中、どんな遠隔地あるいは欧米から離れたところに行っても、現地の言葉でラップをやっている若者がいます。そうしたラップを取り上げた論集です。私はガザのラップについて書いているので、興味がある方はぜひ読んでいただきたいと思います。

もともと私がパレスチナラップに興味を持ったきっかけが、「SLINGSHOT HIP HOP」というドキュメンタリーです。「自由と壁とヒップホップ」という日本語のタイトルで劇場公開もされ、今はDVDでも見ることができます。これを見て、イスラエルの支配下にあるパレスチナ各地の若者たちがラップで自分たちの感情や考えを表現し、それによってまた仲間たちと繋がっていく姿にすごく感銘を受けました。今パレスチナで行われていること、報道などニュースではわからない、そこに生きる人たちのリアルな感覚であるとか感情、特に若い人の思いを知るために、ラップというのは本当に最適なツールであると思って、研究したり紹介したりしてきました。ガザ初のヒップホップグループが結成されたのは2002年といわれていますが、それ以降、ガザ地区からもたくさんのラップをやる若者たちが登場しています。

先ほどもお話ししたように、ガザで育った若者の多くはガザの外に出たこともなく、失業率は域内では6割を超えていて、パレスチナの他の地域からも切り離された全くの孤立状態にあります。今はインターネットのおかげでSNSなどを通じて、音楽を外の世界に発信できる、交流もできる、ガザの若者たちの生のリアルを伝えるツールになっています。

今日は時間がないのですが、1曲だけ紹介したい映像があって、これを少しだけ

## MCガザ： 2018年～2019年 帰還の大作

「帰還するんだ」

誰が始めた？  
占領し、敵意を向けてきたのは  
奴だ  
血が無駄に流れると思うなよ  
俺は解き放たれた  
奴らが俺やお前を追い払おうが  
俺は自分の土地に戻るぜ  
鉄条網を持ち上げて  
帰還するんだ、帰還するんだ、た  
とえ何十年かかっても



スライド7



け流します（スライド7）。この映像は実際にガザ地区の中で行われていたデモの様子を撮ったものです。どんなデモだったかというと2018年から19年にかけて1年以上続いた「帰還の太行進Great March of Return」と言われている運動の様子を撮影したものです。ガザに押し込められて外に出ることもできない、この封鎖の解除を求めてそのボーダーラインのところ、軍事フェンスや壁で嚴重に封鎖されていて近づくこともできないのですが、そこのギリギリのところまでみんなで行って、封鎖の解除を訴えたわけです。先ほどお話ししたように、フェンスの向こう方は彼らのおじいちゃんおばあちゃんが暮らしていた故郷だと皆思っているのに、そこを追われて自分たちは今ガザに押し込められている。彼らの願いはこのボーダーフェンスを越えて向こう側の故郷への帰還が許されることです。それを求めたのが帰還の太行進と言われる運動でした。当初は非暴力の平和的な抗議行動として始まったのですが、このボーダーのところにはイスラエルの軍がいて、近づくたびに発砲してきます。それで興奮した若者たちがさらに近づいて、この映像にもあったように、タイヤを燃やして煙幕を張ったり、石を投げたり。それをやると100倍にも1000倍にもなって返ってくるわけです。これによって非常に多くの若者が亡くなり、あるいは身体障害を負いました。大変な傷をガザ社会に残してこの抗議行動は終わるのです。映像でご覧いただいたように、イスラエルのフェンスがあってその向こうに軍の車両なども見えていたかと思います。

そして去年の10月7日、ハマースはこのフェンスを破って向こう側に行きました。こちら側からロケット弾を何千発も撃ったり、いろいろな攻撃を仕掛けたわけですが、その時にこの軍事フェンスの一部を何かブルドーザみたいな重機で壊して、その時にいわゆる戦闘員だけではなくて、一般の市民や若者たちも、開いた穴から歓声を上げながらイスラエル領に出ていった映像が一部残っています。もちろん攻撃をする部隊もいましたが、それだけではない。解放されたという気持ちで一緒に向こう側へ行って、もちろんその人たちの多くはすぐに戻ってきたわけですが、そうした映像をネットなどで見ることができます。それを見た時に私が真っ先に思い出したのが、今ご紹介したこのミュージックビデオでした。このビデオは2018年4月に公開されたものですから5年前のものです。

私はハマースの軍事攻撃は全く容認できないとする考えを持っている人間です。方法論として全く賛成できないと思っています。それはなぜかという、今までの歴史を見た時に、1の攻撃が結局千にも万にもなって返ってきて、多くの若者が犠牲になることが繰り返されています。その中で、決してそれを否定するわけではありませんが、何か違う方法が必要だと考える人間の1人です。でも、気持ちはものすごくよくわかりました。彼らが歓声を上げながらフェンスをくぐり抜けて向こう方に行った時の、その一瞬のために命をかけるというそういう気持ちは、音楽を通じてだったり、いろいろな経験を通じてすごくよく理解はできました。けれども、その代償というのは計り知れないものであったわけです。それは皆さんが今ご覧になっている通りです。

パレスチナ人はこのような平和的なデモ活動もやり、しかしそれが常に暴力によって跳ね返されてきました。その中で、なんでもいい、本当に1つ石を投げる



だけでもいい、何かしたい。そういう気持ちになるのはわかります。わかるけれども今お話ししたように、その代償はあまりにも大きく、では次にどうしたらいいか、私も聞かれても答えがない状況です。非暴力の形で一体何ができるのか、非常に考えるのが難しい状況ではあります。そうした状況の中でもアートを絶やさず、自分たちは決してヒューマン・アニマルなどではない、ガザにいる人たちは本当に人間なのだとすることを証明するクリエイティビティを発揮し続けている一人の画家さんの作品を紹介して、今日のお話を終わりたいと思います。

ラーエド・イーサーさんというガザ地区の画家さんです（スライド8）。ラーエドさんは仲間と一緒に、ガザで非常に有名な現代アート集団として、ギャラリーを運営していた方で、日本にも来日してアート展をなさったことがあります。ラーエドさんは今もガザにいて、今までに何度も自分の家を空爆で失っています。今回もまた失ってテント暮らしをされています。そのテント暮らしの中でもSNSでずっと作品を投稿し続けてくれているのです。もう何にもないのです。本当に食べるものもないような状況なのですが、可能な限り、子どもや若者たちを集めて壁に絵を描くといった活動もしていますし、どうやって手に入れているのかもわかりませんが、とにかく何かその辺にある材料で絵を書いたものを毎日のように投稿しています。右側の絵は今日の講演の準備をしている段階での最新の作品ですが、子供を抱いたお母さんのようにも見える人物の後ろにテントが見えます。こういった絵を投稿して、僕のテントのアトリエよりというふうに書いています。テントで暮らしていますからアトリエなんかないわけです。でも、そこをアトリエだとして、手に入る材料で絵を描く。この絵の画材は何だと思いますか？ 普通の絵の具には見えない色ですね。絵の具が手に入らないので身近なものでいろいろ描いているのですが、これはハイビスカス・ティーです。飲ま



スライド 8

れたことがある方もいらっしゃると思いますが、赤いハーブティーです。あれの  
もっと濃く出したやつを飲む習慣が向こうにあるのですが、それと消し炭を使っ  
て描いたと書いてあります。他にはコーヒー滓などいろいろなものを使っている  
のですが、とにかく手に入るもので表現を続けています。

停戦が実現した暁には、また様々な形で皆が創造性を発揮してレジリエンスを  
示してくれるのではないか、そこに私が惹かれているパレスチナの文化の力って  
いうものがあるということをお伝えして、私のお話はここまでにしたいと思いま  
す。

シリーズ 3

【質疑応答・ディスカッション】

## 逆境を超えて：

パレスチナの文化的アイデンティティ

総合司会：シェッダーディ アキル 慶應義塾大学

オンラインQ&amp;A担当：銭海英 明治大学

発言者：山本 薫 慶應義塾大学

閉会にあたって：今西 淳子 渥美国際交流財団



アキル それでは、質疑応答およびコメントセッションに移りたいと思います。対面での質疑応答は私が担当し、オンラインでいただいた質問は銭海英さんが担当します。では、何かご質問やコメントはありますか。

フロア1 貴重なお話をありがとうございます。感動しながら聞かせていただきました。アート作品と政治との関わりに、私はとても疑問を持っています。私は中国の社会運動を研究しているのですが、中国の社会運動の中でもアート作品を使っている状況があります。アート作品がグローバルなアートマーケットに流通している中で、結構価値づけられているというか、政治的なレジスタンスとして見ていないというか、むしろレジスタンスをうまく利用してアーティストたちがグローバルマーケットでアートを流通させるというような考え方がありました。今回のお話の中にもあった「マイナーディテール」という部分、私もそこはすごく大事なのではないかと考えています。

特に大きなメジャーという話、例えば抵抗などの話の中で、飲み込まれないようなマイナーディテール、それこそ例えば戦争の時にアートの話なんかするなよとか、あるいは動員されている感情をあまり見ないと、その効果があまり注視されないとか、そういうところに注目することの大事さというのを私はずっと思っています。ただ、そうなってくると、今回の話の中でも若者たちが映像など

を創作して抵抗していると思うのですが、作品を投稿するプラットフォーム、例えばYouTubeなどにはグローバルアートマーケットのような何かの検閲だったり何かの制度だったり何かの価値づけがあって、それに制限されている部分もあるのではないかと考えています。私がいつも思っている疑問なのですが、そういう状況の中で現地の人たちはどういうふうに、例えば実際若者たちが創作したアートは、具体的にどういうものを使って、そういうアートマーケットというそのものの植民主義的なところや帝国主義的なところに対して抵抗しているのかという質問です。もし何か具体的な例があればぜひ教えていただければと思います。

山本     ありがとうございます。とても難しい質問であり、とても重要な質問です。パレスチナのアートを考える時に、今おっしゃった点の一つのとても重要な考える手掛かりというかサンプルになるだろうと思っています。特に現代美術にしても音楽にしてもそうなのですが、例えばラップをやっていることそのものが、まさにそのグローバリゼーションの波を被っているわけです。そういうグローバルなマーケットにいかに接続するか、認められて受け入れられるかということも当然彼らの希望の中には入ってきます。でも、世界を今支配している資本の論理だったり西洋の植民地主義を背景にした今の社会の論理に反発して抵抗したりしているときに、自分たちがその土俵に入るとするのはすごく矛盾した行為です。その狭間ですごく葛藤がある、それは間違いないと思います。

あともう一つは、国内というか国家の問題ですよね。アラブ諸国は自由のない独裁政権が多いですから、そういう国の中で何か表現したいと思った時に、政府の力との関係ということも当然すごく難しい問題になってきます。

パレスチナ問題がどうして世界問題なのか。ただの地域紛争ではないし、思想家や作家の人なども含めて世界中の人々が考察の対象にしてきたのかという大きなポイントの一つに、彼らが国を持っていないということが大きいわけです。アラブ諸国というか、パレスチナの周辺地域はイギリスやフランスに植民分割されたりしましたが、今はそれぞれ独立を達成しているわけです。でもパレスチナだけが独立できずに、イスラエルという国に支配され続けている。パレスチナ人というけれども、パレスチナ人はいないとイスラエルが主張するのは、これまでパレスチナという国家は確かに存在しなかったし、今もないのです。そういう中で自分たちはパレスチナ人で、パレスチナの気持ちを表現するという話をする、今は仮にもパレスチナ自治政府というのができてしまったので、その関係で少し難しくなっているのですが、元々は政府という縛り、国境線であったりナショナリズムだったりという縛りから離れているから自由でもあって、自由にそれを構想できる。そこに今の既存の国境線で阻まれた秩序に対するオルタナティブのようなものが生まれるのではないかと、そういう期待感を背負っていたところもあるし、本人たちもそのようなことを意識しながら表現活動しているところもあります。

自分たちがイスラエルに抵抗するための作品を作る際、パレスチナ自治政府には形だけでも文化省などがあるわけです。そういうところから助成をもらうなどすると遠慮したり配慮したりしなければいけないところが出てきます。パレスチナ



自治政府も腐敗しているのですが、それに対する批判的な表現は我慢しなければいけないのかといった難しい問題も出てくるわけです。私がインタビューした時でも、パレスチナのアーティストは今言ったようなことにもものすごく敏感で、どうしたらそういう世界のグローバルな資本の論理にも地元のナショナルな論理にも絡め取られずに、自分たちの独立した表現を守っていくかということをもものすごくよく考えているし、いろいろな試みをしています。

国がないからこそ、例えば映画を作るにしてもものすごくお金がかかるのですが、国からのファンドもなければ支援なども元々ないからどうするかというと、やはり国際的にファンドレイジングしていくわけです。ほとんどのパレスチナ映画というのは多国籍合作映画の形をとっています。でも、そういう形にすることで、むしろ自由な表現も可能になる。しかも、国がないからローカルなマーケットの次にグローバルがあるのではなく、ローカルがないから直接グローバルしかない。そういう中でもものすごく面白い試みをやっているし、常に権力に絡め取られる危険はあるけれども、そこをどうやってすり抜けていくかということは、パレスチナのアーティストの人たちの今までの試みを見ていると、こちらのほうがすごく学ばせてもらえるというか、そういう経験をする人が多いのです。

■ アキル      ありがとうございます。はい、次の方どうぞお願いします。

■ フロア2      とても大切な話を伺って感激して聞いていました。一つご説明の中で欲しかったと思うのは、2004年にアラファト議長が亡くなって、2006年にその後任の選挙がありました。後任の選挙ではご説明にあったように、圧倒的にハマースが勝ったわけです。それにも関わらず、パレスチナの代表がファタハに移って、アッパス議長が今代表になっています。その辺りの経緯をご説明いただけたらと思います。

■ 山本      資料は用意していたのですが、時間の関係もあって読み上げませんでした。本当におっしゃった通りで、パレスチナ内部の政治も非常に分裂していて、非民主的な運営がずっと続いています。パレスチナ自治政府が誕生して以来、それ以前のPLOと言われるパレスチナの解放運動を担ってきた組織の主要党派がファタハなのですが、そこがずっと議会選挙であるとか大統領選挙でも勝利して権力を握ってきました。でもイスラエルとの和平交渉も全くうまくいかないし、その一方で政権内部の腐敗や汚職などもひどくて、民衆の支持を失っていきました。そこで支持を集めていった一つがハマースという組織です。ハマースは、今はもう皆さんテロ組織・武装勢力みたいなことでしか報道では聞こえてこないかもしれませんが、一つの政党として選挙にも参加している政治勢力で、2006年の議会選挙では多数を占めました。本当は自治政府の与党、政権党になるはずだったのに、イスラエルやアメリカやヨーロッパ諸国の介入によってこの選挙結果は一方的に無効にされたのです。こうしたことは、パレスチナだけではなくアラブ諸国、アラブだけではないですね、南米やアジアでも多いと思いますが、結局アメリカを中心とする西欧諸国に沿わない国はテロ国家である、あるいは非民主的な

国家であるとして、選挙で選ばれた政権が覆されることがしばしばあります。パレスチナもそれと同じだったと思います。では、どうすればよかったのか。私はハマース政権を認めるべきだったと思います。先ほどもお話ししたように私はハマースの政策には全く賛同しませんが、やはりやらせてみてそれで皆がうまくないと思えばまた選挙を行う。これが当然のことになるべきです。ハマースのライバル側であるパレスチナのファタハもそれ以降大統領選挙も全くやりませんし、いろいろと理由はつけているのですが、イスラエルと一緒にあってハマースを悪者にすることで自分の権力を握り続けている。こういったことも、パレスチナ一般民衆の意向からは非常に乖離しているし、残念ながら今パレスチナ側の働きかけによって、イスラエルからの解放や自由と権利の回復を求めることが難しいというのは、今言ったようにパレスチナの政治の側にも大きな問題があることは間違いないと思っています。だからこそ、イスラエルに対して圧力をかけていくという点では、日本を含めて世界中の人々の連帯協力というものが非常に求められているし、それを実現することが鍵になるのかなと思っていますところ。

■ アキル 他の質問、コメントはいかがでしょうか。銭さん、オンラインからの質問はありますか。

■ 銭 海英 オンラインから一つ質問をいただいていますので、読み上げさせていただきます。

政治的アイデンティティが脅かされる構造がある中で、アートでエスニックなアイデンティティを主張すると自ずと政治性を帯びるかと思いますが、ユダヤ化を推進するシオニスト政権はパレスチナ人の自己表現をどの程度規制しているのでしょうか？ パレスチナ人のアートは一般のイスラエル人にはほとんど受容されていないのでしょうか？

■ 山本 そうですね。先ほど講演の中でもお話ししたのですが、当然イスラエル側は、軍事的もしくは物理的にパレスチナに対する攻撃をしてきただけではなくて、記憶をめぐる戦いをしてきます。その主戦場は学問であり、アートや文化であるという話もしましたが、パレスチナ人の文化表現を非常に危険視しています。リファト・アルアライールさんが殺された話をしましたが、これも爆撃に巻き込まれたのではなくて意図的に殺害をされたことがユーロメッドという団体の調査報告書の中に出ています。例えば先ほど日本でも読んだり触れたりすることができるパレスチナの映画や小説を少しご紹介しましたが、パレスチナ出身の最も有名な小説家と言えばガッサーン・カナファーニーです。この方の『ハイファに戻って／太陽の男たち』などの作品集は今でもロングセラーで、最も日本語で読まれているパレスチナ人の作品だと思います。この方もイスラエルによって暗殺されています。彼の筆の力、ペンの力が非常に大きいということで殺されました。それから、カリカチュア、風刺漫画の作品集も紹介しましたが、あの作者のナージー・アリーも殺されています。ただ、あの方の場合は殺された背景がいろいろと言われている、実は彼はアラブ側の権力者も非常に激しく非難していたのです。

パレスチナはアラブ全体の共通の問題だと、よくスローガンや掛け声として言われるのですが、実際にはアラブの多くの国々はパレスチナ人を警戒してたびたび弾圧するようなことをしてきたという経緯もあります。パレスチナ人の側からすると頼りにならない。あるいはイスラエルを利する行動もたまにはやるアラブ諸国に対する批判というの、パレスチナのアートのとても重要なテーマになっています。パレスチナのアートというのをイスラエルは危険視していると話しましたが、アラブの国々からも危険視されてきたところもあります。そういう意味でも先ほどの質問とも絡むのですが、もう本当に狭い隘路を進むような形で自分たちの表現を追求しています。そのために命を犠牲にしてきた人もたくさんいます。もちろんイスラエル国内では、パレスチナ作品介绍することそのものが強く否定されています。例えば私が紹介したラップミュージシャン、音楽をやっているような人も逮捕されることがあります。イスラエルのユダヤ人の中にもパレスチナ人と共生しようという準備があり、そのために命がけで活動している人もいます。今はどんどん数が減っていますし、見えにくくなっていますが、確実にいるので、そういう方々はもちろんそういった作品を応援したり、一緒に作ったりしています。イスラエルのユダヤ人の映画監督の人でもパレスチナについてのドキュメンタリーを撮ったり、あるいはパレスチナの俳優や監督さんと一緒に作品を作ったり、またそれで命を狙われたりするわけですが、そういう方々もいらっしゃいます。ただ、一般の人たちにどこまで届くかと言えば、ユダヤ人の平和活動家の声にすら聞き耳を持たない国民が今のイスラエル国民の大半ですから、ましてやパレスチナ人の声などに声を傾けるような風潮はどんどん少なくなっていると言えると思います。

■ 銭海英

山本先生、ご回答ありがとうございます。オンライン参加の方からまた二つ質問をいただきました。一つ目は、本日の山本先生のご講演にすごく関わる質問だと思います。では、読んで参ります。

講演では、パレスチナの文化、特にラップや映画などの芸術面においてお話しされましたが、日本においてパレスチナの芸術や文化はどのように受け入れられているのでしょうか。また、一般的な認知度や日本の文化との交流の進展はどのように評価されていますか。

■ 山本

関心を持っているのでどうしても目についてしまうのですが、それを差し引いても、先ほどご紹介したように実際に劇場公開された映画をDVDや、今ならいろいろなプラットフォームで見ることができますし、小説もそうです。翻訳本の出版などが相次いでいる状況です。音楽でも来日コンサートが行われていますし、注目すべきはやはり演劇ですね。先ほど少し触れましたが、日本の演劇をやっている方々は本当にフットワークが軽くて私もすごいと思うのですが、現地にも行ってコラボレーションしています。多分一番反応が早いのが演劇の分野だと思います。共同の舞台もやっていますし、他の中東の国々と比べれば、もう圧倒的に日本での認知度が高く、評価もされているのがパレスチナです。これは世界的にもそうだと思います。例えば映画で言えば、カンヌであるとか、ベルリ

ンであるとか、国際的な映画祭でも常連ですし、パレスチナ系の監督は非常に大きな賞を次々としていたりします。美術もそうですね。現代美術の世界などでもパレスチナ出身のアーティストで、日本でも非常に大きな賞をいくつも取っている方々がいたりします。ただ、それがパレスチナであることがなかなか認知されていないことは多いかもしれません。これを機に、そうかこれもパレスチナかこれもそうだったのかという感じで、多分気づかれる機会が多くなるのではないかと思います。

■ 銭      ご回答ありがとうございます。オンライン参加者からまた二つ質問をいただきましたが、その前に会場で参加されている皆様からご質問や気になる点、これについてもっと知りたいというご意見はございませんか。

■ フロア3      質問というほどではないのですが、パレスチナに行くと壁にあれだけ絵が書かれていて、中には素晴らしい絵もあります。例えばアラファットの絵などは本当に写真で見るかのように描かれている。そういう類いの絵がいっぱいありますよね。その中には自分たちが壁から抜け出していくようなことをイメージしたいろいろなアートもあります。ある意味で一般民衆のアートでもあるという気はするのですが、ただ、あれだけの絵ですからペンキ代だって馬鹿にならないでしょうし、本当に一般の人たちがどうやって書いているのでしょうか。

■ 山本      ご紹介したグラフィティアートというのは、アラブ圏では他の国でももともと歴史的に非常に盛んなものなのです。パレスチナでは特に抵抗のアートとして有名ですね。これらのアートは大まかに何種類かに分けることができます。今お話しになったような精巧なアラファットの顔といったものが分離壁に描かれています。これは先ほどお話ししたバンクシーなどとも共通するのですが、結構海外から来たアーティストの肩書きを持つ方が描いたり、パレスチナの美大の学生などが描いたりしています。それも世界に向けた発信の一つです。そして、それとは全く別の背景で始まったものもあります。元々パレスチナ民衆の抵抗運動、インティファダ運動が盛んだった時期には、壁にスローガンを書いたり、いろいろな連絡事項を書いたりしていました。その時にさらに進んでいろいろな絵柄のようなものを描くなど、本当に即興的で路上のスプレー缶1個でできるようなものが伝統としてあります。それから壁画運動です。メキシコなど南米でもすごく有名ですが、文化活動の一つとして子どもたちとかコミュニティの人たちみんなで描く。非常に貧しくて飾り気もない木々もないような難民キャンプなどで、壁にみんなで壁画を描こうとか、希望が溢れるようなものを描こうとか、そういうコミュニティ活動としてすごく盛んになっている面もあつたりします。実際に現地に行くといろいろな種類のグラフィティアートがあるので、それも楽しみの一つです。

■ 銭      では、オンラインからの質問を続けて読んでまいりたいと思います。山本先生、お答えできる範囲内で答えていただければと思います。二つの質問を続けて



読んでまいります。まず一つ目です。

昨今の世界的政治情勢の変化を受けて、日本のメディアにおけるパレスチナ問題の報道はこの1年でどのように進化したのでしょうか。ニュースや公共の議論において、特に日本における世論や言説に変化は見られたのでしょうか。

続けて二つ目です。

パレスチナの作家や芸術家の中には、非異性愛者、トランスジェンダー、クィアのアイデンティティをオープンにして活動している方もいますか。ムスリム多数派の社会において、クィアな人々がアイデンティティをオープンにすることは難しいのかなと想像したのですが、実情を知りたいです。

山本 二つ目のご質問の方からお答えします。性的なマイノリティというのは当然どの社会にもいるわけです。パレスチナにももちろんいます。パレスチナの社会はイスラーム教徒がマジョリティです。キリスト教徒や信仰を内面のものだけに行っている人、あるいは世俗的な人など、もちろんいろいろな人はいますが、社会としては残念ながら結構保守的だと言えらると思います。特にLGBTQの方々はなかなか声を上げづらいというのはあります。ただ、アート活動などを行っている人の中にはそれをオープンにして活動している人たちもいます。私の知り合いにもミュージシャンでそういう方がいます。一方で、例えば私がずっと関わって注目しているDAMというラップミュージックのグループ、本日ご紹介した映画の主人公でもあります。彼らが言っていることは、自分たちはイスラエルからの解放を求めている、その自分たちが自分たちの社会の中で、例えば女性であったり、性的マイノリティだったり、誰かを差別する行動は許されるものではない。その戦いは共通でやらなければいけない。自分たちの内部にもそしてイスラエルという敵に対しても、同じように自分たちは平等だったり解放だったりを求めていく。その意味では連続した戦いなのだと言ったりしています。なかなかその理解は広がっていないかもしれませんが、そういうことを意図的に意識してやっている人たちもいます。それもやはりアートの現場に着目すると見えてくることかなと思います。

もう一つの質問は日本の変化ですね。これは結構両極に分化していると思っています。メディアでは今は特にそうですね。イランが絡んできてしまったので、もう一気になんて言いましょうか、石油がどうしたとか、本当に軍事的な分析しかない。その中では例えばハマスと言え、武装テロ組織でしかないわけです。でも、それがどうやって生まれたのか、それと民衆の人たちの希望や願望などの感情がどう繋がっているのかということとは全くわからないというのが一方にあるかと思ひます。逆にそれにあきたらずというか、おかしいと疑問を持った人がSNSなどを駆使すれば自分たちで現地の情報とも現地の人とも繋がることのできる。そういう中で、今まで自分が思っていたこと、学んできたこと、新聞やニュースで言っていることと全然違うものが見えてきた、そういう方々もいると思います。すごく多極化しているという印象です。

■ アキル 先生、回答ありがとうございます。では、会場の皆さん、何か追加の質問やコメントはありますか。それではラストは私の質問でいいですか。

先ほどおっしゃった「土地なき民に、民なき土地を」についてです（p73参照）。土地なき民はユダヤ人、民なき土地はパレスチナだという、シオニズムのそういう思想があったということでした。それで少し考えると、現在のパレスチナ人はイスラエルのアパルトヘイト政策とシオニズムの組織にとって、どちらかというアイデンティティなき民だと主張されています。つまり、そういうプロパガンダを聞くと、パレスチナ人はただのアラブ人で、アラブ人ならアラブ地域は広いからどこ行ってもいいという考え方があると思うのです。でも、そもそもアラブ人とは何か。アラブ人の私にもわかりません。アラブ話者というのならわかるのですが、アラブというのは幅広い地域です。民族も違うし、国家も違うし、多様なアイデンティティがあると思います。もちろんアラブ人としての独特なアイデンティティを持つことはわかるのですが。そもそもパレスチナ人と言ってもいろいろな背景がありますよね。例えば西岸地区のパレスチナ人であったりガザ地区のパレスチナ人であったり、実はイスラエルにも約20パーセントのパレスチナ人がいるわけです。あとはもちろん難民もいます。そこであまり聞かないのがイスラエルの中に住むイスラエルの国籍を持つパレスチナ人です。去年の10月7日以降はアラビア語を喋るだけでも少し危機感を持つことがあって、自分がアラブ人ということはできる限り隠したくなっていますが、その中で文学を使って作品を作って、例えばアラビア語だけではなくヘブライ語とかで、イスラエルでの自分の権利などについて作品を作るパレスチナ人はどういうパレスチナ人でしょうか。

■ 山本 この話はまた別の講演をしないと説明するのが難しいかもしれません。今おっしゃった通りで、今イスラエル領内になってしまっているところは元々パレスチナ人たちが暮らしていました。その7、8割は追放されて、当時70～80万人が難民になったと言われています。でも実は16万弱の人たちはその中に残って、その後イスラエル国籍を取得しました。今のイスラエルの人口の約2割は実はパレスチナ系の人たちです。その人たちの文化や文学というのが、私が1番メインの関心を持って仕事をしてきたものです。実はアダニーヤさんも、あまり彼女は公表していないので何か意図があるのかもしれませんが、イスラエル領内の出身です。それからもう一人、私が研究しているエミール・ハビービーというパレスチナ文学を代表する作家がいるのですが、彼もイスラエル国籍を持っているアラブ人・パレスチナ人です。それからラッパーたちの映画「自由と壁とヒップホップ」もイスラエル国籍を持っているアラブ人・パレスチナ人の青年たちが中心です。世界的に著名なカンヌなどで賞を取っている映画監督のほとんどもイスラエル領内出身の監督です。それはなぜなのかということに、私はすごく興味があって関心を持ってきたテーマでもあります。

今はあまり時間がないので簡単にお話ししますと、今までの質問とも少し繋がるのですが、彼らは国と国の狭間で生きている人たちです。イスラエル国家に帰属しているという意味ではイスラエル国民だけれども、イスラエル国はユダヤ人

のための国ですからその中で暮らしている彼らはいてほしくない存在です。国籍は持っているけれども、いてほしくない。不可視化されている存在、不在者です。そしてパレスチナ人の難民や仲間からしてみたら、敵のイスラエルの国民なわけですね。そういう狭間に生きているからこそ、安易なナショナリズム、パレスチナ・ナショナリズムにもイスラエル・ナショナリズムにも絡め捕られることなく、深い紛争の挟間に生きている人たちです。そういうすごく不安定なところに存在しています。最初の方でパレスチナ文化って何だろうといったこともおっしゃっていたけれど、言ってしまえば一つのパレスチナ文化などというものはないのです。だけど、パレスチナ人はいないと言った時に、いや、パレスチナ人はい、その証明がパレスチナ文化なのだという、ある種パレスチナ文化というのは今でも作られつつある、生成途上にある言説なわけですね。そこに私はすごく心惹かれています。パレスチナ文化の「遺産」や「伝統」を掘り返すような仕事をしていたとしてもそれもひとつの創造行為です。一人一人のアーティストによって未来に向けて、今作られつつあるものがパレスチナの文化、パレスチナの文化アイデンティティだと私は思っています。その創造行為には、ガザの人も難民の人も西岸の人もみんな関わっているのだけれど、その中にあってイスラエル領内に暮らすことになってしまった人たちというのがかなり大きなウェイトを占めていて、その人たちが生み出しているアートというものは、私の中では世界的にもユニークだし、示唆を与えるものだと思います。

あまり細かいところまではお話してできないのですが、私の考えでは、パレスチナの文化の魅力の一つというのは、国がないからこそ未来に向けて作っていくもの、みんなで作っていくもの、非常にオープンで多様性に満ちているものです。アラブ人だけのものでもないのです。そして必ずしもそこからユダヤ人は排除されていません。これはマフムード・ダルウィーシュという有名な詩人が言うこともそう。エミール・ハビービーの作品を見てもそう。アダニーヤの作品を見てもそう思われると思います。排他的ではないのです。もちろんパレスチナはパレスチナ人あるいはアラブ人だけのものという主張をしている人もいます。政治家とかね。でもそれは私が心惹かれるパレスチナのアーティストの主張ではないし、私が尊敬しているパレスチナのアーティストはむしろその逆です。常に世界に開かれた文化的アイデンティティというものを作り出そうとしている人たちだと思います。皆さんもぜひ着目していただければ嬉しいです。

■ アキル

ありがとうございました。それでは閉会に移りたいと思います。

今回はSGRAパレスチナシリーズの3回目になります。このシリーズを企画したきっかけはもちろん去年の10月7日が発端です。危機感を感じて、その時にちょうど学会でお会いした今西さんに話したら、今年のSGRAの企画の締め切りはだいぶ過ぎているけれども、何かできればぜひとおっしゃっていただいて、そこから年内3回も開催できました。本当にありがとうございました。この機会に、できれば今西さん、一言お願いします。

■ 今西

そうですね。ちょうど1年ぐらい前だったと思います。アキルさんから日本人

にもっとパレスチナに関心を持ってもらいたいというお申し出があって、それからソンヤさんと一緒に、こうすればいいんじゃないか、こうしたらどうかと考えながら3回続けてきました。

最初は「パレスチナを知ろう」ということで、パレスチナ人のハディ先生にこの会場で話していただきました。渥美財団・SGRAのネットワークにはアジアの人が多いですから、日本だけではなくてアジアの人にももっと関心を持ってもらいたいということがありました。その次、6月に昭和女子大学で開催したのが、「パレスチナの壁：『わたし』との関係は？」でした。「わたし」からどうアプローチすればいいのかというところまでもう一步踏み込んだテーマで、その時は活動している方のお話をいろいろ聞かせていただきました。今日は最後に文化ということで、山本先生、本当に興味深いお話をありがとうございました。

私の印象としては、これでパレスチナに一步近づけたのではないかと思いますし、それが小説の力、文化の力なのかなと思いました。政治的なことをずっと話していただいても一步遠い感じがするのですが、ラッパーの方のお話や小説を例にこう歩いていくとこんなことがあるというお話を聞かせていただくともっと身近に感じます。その力がすごいと思いました。パレスチナに皆が関心を持てば何かが変わっていくかもしれません。逆に言えば皆が知らなければ何にもなかったことになってしまう世の中です。それは国連難民高等弁務官を務められた故緒方貞子さんもさんざんおっしゃっていたことです。

今はSNSの時代になってもっと発信しやすくなりましたから、このようなパレスチナを伝える活動は進めていくべきだと思いますし、皆さんが自分1人1人でもできることだと思います。アジアにも世界にもたくさんの同じように大変なことが起きています。皆それぞれが考えて進んでいていただきたいと思います。

アキルさん、博士論文の執筆をしながらご苦勞様でした。皆さん、今日はお集まりいただきましてありがとうございました。

アキル それから企画を手作ってくれたソンヤさん、ありがとうございます。渥美財団の職員の皆様にも感謝いたします。それではお疲れ様でした。ありがとうございました。



銭 海英 明治大学

2024年10月5日、第22回SGRAカフェ「逆境を超えて：パレスチナの文化的アイデンティティ」が対面（渥美財団ホール）・オンライン（Zoom）併用方式にて開催されました。2月3日と6月25日に続き、「パレスチナを知ろう」というシリーズの3回目です。

今回は慶應義塾大学総合政策学部の山本薫先生から「パレスチナ文化とは何か？」と題し、長年に渡り混乱する中東情勢の中で形成されたパレスチナ人の多様な文化的アイデンティティをテーマに講演していただきました。

講演では2003年以降、イスラエルにより強制的に立ち退かされたガザの人々が取り組むストリートカルチャーが紹介されました。ガザの若者たちの間では、バルクール競技（街頭運動）、ラップ音楽（街頭音楽）、グラフィティアート（街頭芸術）が盛んに行われているそうです。

講演後、次のような質問が出されました。「戦時下において芸術に時間を割くべきではないという主張が存在するが、パレスチナの若者が創出した芸術作品がいかにしてイスラエルや他のアラブ諸国への抵抗手段として機能してきたのか？」、「政治的アイデンティティが脅かされる構造の中で、芸術を通じてエスニックなアイデンティティを主張することは、芸術作品に政治的メッセージを込めることになるかと考えるが、イスラエル化を推進するシオニスト政権はパレスチナ人の芸術運動をどの程度規制しているのか？」、「パレスチナ人の芸術はイスラエル国民に受容されているのか？」、「日本では、パレスチナの芸術や文化はどのように受容されているのか？」、「日本文化との交流の進展はいかに評価されているのか？」。

「芸術作品と政治」について、山本先生は「パレスチナの若者たちがグローバルマーケットに接続する希望はあるが簡単ではない。グローバリゼーションの中で表現の自由を模索しながら、国や資本の論理にとらわれずに自己表現を模索し続けている。国がないからこそ生まれる葛藤や自由が、独自の文化や芸術を形成する原動力となっている」と将来への可能性を指摘しました。

「イスラエルでの受容状況」については、「パレスチナの文化表現はイスラエルだけでなく、一部のアラブ諸国からも危険視され、表現者が命を奪われることも少なくない」と回答。実例として『太陽の男たち』の著作で知られるパレス

チナを代表する小説家G.カナファーニーは強大な影響力を持つがゆえに36歳の若さでイスラエルに暗殺された。風刺漫画家が殺害される事件もあった。一方で、背景にはアラブ側権力者の思惑があるとも言われている」と指摘し、「パレスチナ問題はイスラエルとの対立だけでなく、周辺のアラブ諸国も巻き込む中東全体の問題であり、多くの国々はパレスチナ人を警戒している。イスラエル国内でもパレスチナ人の文化表現は否定されがちだが、共生を目指すユダヤ人の支援活動も依然として存在する」と言及しました。

「日本での受容状況」については、「パレスチナの演劇や映画は日本でも高い注目を受けている」と回答。ただ「カンヌ映画祭などでもパレスチナ出身、もしくはイスラエルに在住するパレスチナ人の監督が多数の賞を獲得しているが、製作者がパレスチナ人であることが知られていない場合もある」と指摘しました。

最後に今西淳子 SGRA 代表から閉会の挨拶がありました。パレスチナに対する日本やアジアの関心を高めるための活動を評価し、小説や文化の力を通じて、わずかながらでもパレスチナの現状を理解できたと述べました。また、SNS時代における、私たち個人からの発信や活動を進める重要性を強調しました。

完全に専門外であった私はフォーラムで多くの感銘を受けました。90分にわたり拝聴していたのですが、山本先生の「パレスチナ文化は、言ってしまうと一つも無いのですよ」という一言には驚きました。確かにイスラエルの主張では、「パレスチナ人は存在しない」のです。パレスチナという国家がそもそも存在しないから、という理屈です。「いや、違う。パレスチナ人は確かにそこにいる。なぜいるのかと言うと、その証明はパレスチナ文化が存在するからである」と山本先生は主張します。こうして、そもそも「パレスチナ文化」とは何かという疑問も自然に浮上してくると思います。

私が敬愛する中国の学者である許紀霖は、かつて「文明」と「文化」という二つの概念について、実に分かりやすい見解をもって両者を区別しました。

「『文明』と『文化』は異なる概念であり、『文明』が関心を寄せる対象は『何が善いか?』であるのに対し、『文化』は単に『何が我々のものか?』に焦点を当てる。『文化』は『我々』と『他者』とを区別し、自己の文化的アイデンティティを確立することを目的とするが、文明はそうではない。文明は、一国や一族を超えた普遍的な視点から『何が善いか』を問い、その『善い』は我々にとってだけでなく、他者にとっても同様に善いものであり、全人類にとって普遍的な善であることを追求する」(許紀霖『中国時刻? 従富強到文明崛起的歴史邏輯』香港城市大学出版社、2019年、7-8頁)。

「パレスチナ文化」とは何かを表現する際に、私は、まず「他者」と区別されるパレスチナ人の「我々」(独自性)とは何かを考えてしまいます。この唯一無二の独自性とは何か、どのように把握するべきかについて、山本先生からは「パレスチナ文化の魅力の一つは、国家の不在ゆえに未来を構築していく過程にある。さらに、その過程がパレスチナ人全体によって今なお作られ続けている点にある。また、パレスチナ文化は多様性に富み、アラブ人に限らず、ユダヤ人をも排除するものではなく、決して排他的なものではない」という説明がありました。

しかし、この説明だけでは、「パレスチナ文化」の独自性そのものを十分に理解するには至りませんでした。この難しさは山本先生も指摘したように、現在のパレスチナにおいては統一された文化が未だ形成されていないという冒頭の説明そのものが一つの答えであり、同時に今まさに現地では悲惨な戦争のさなかにあるという現実が関連していることを強く認識すべきです。すなわち、パレスチナ文化の確立とは、地政学的な条件と過酷な現実が独自性を生み出す条件であり、また人の心に響く力として存在していると考えます。

このような状況において、山本先生がハマスの暴力手段とは一線を画し、非暴力的な手段によるパレスチナ文化の自己表現の重要性を強調した点には深く共感します。壁に囲まれ攻撃の対象とされる人々がいる現実には、極めて残酷ながらもパレスチナ人が確固たる存在として成立していることを証明するものです。「パレスチナ人は存在しない」という発信は詭弁でしかないことは明らかです。パレスチナ人が自己の存在を声高らかに証明し、さらなる独自性を宣伝するためにも、一刻も早い平和の実現を強く望みます。

(銭海英「第22回 SGRA カフェ『逆境を超えて：パレスチナの文化的アイデンティティ』報告」より転載)





登壇者  
略歴

## [講演・発表]

## ■ ハディ ハーニ／Hani Abdelhadi

1992年埼玉県生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業。同大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士（政策・メディア）。2023年より明治大学特任講師。東京ジャーミイ文書館理事等を兼務。主な論文に「パレスチナ問題における解決案の行き詰まり」「イスラーム法からみるパレスチナ問題」などがある。

## ■ ウィアム・ヌマン／Weam Numan

両親がパレスチナ出身のパレスチナ・ヨルダン人の建築家・ゲーム背景デザイナー。東京工業大学から修士号取得。認知とバーチャル・ゲーム建築の影響について研究しながら、パレスチナ支援活動に関わる。ヨルダン、ヨーロッパ、アメリカのゲーム業界で5年間の経験を積み、現在は日本で3D背景アーティストとして働いている。

## ■ 溝川 貴己／Mizokawa Takami

早稲田大学文学部中東・イスラーム研究コース在籍。研究分野は現代アラビア語文学とアラブ世界のクィア。翻訳活動やパレスチナ解放運動にかかわる。

## ■ 山本 薫／Kaoru Yamamoto

慶應義塾大学総合政策学部准教授。東京外国語大学博士（文学）。専門はアラブ文学。パレスチナをはじめとするアラブの文学・映画・音楽などの研究・紹介を行う。近刊に「パレスチナ・ガザに響くラップ」島村一平編著『辺境のラッパーたち―立ち上がる「声の民族誌」』青土社、アダニーヤ・シブリー『とるに足りない細部』（翻訳）河出書房新社。

## [オンラインQ&amp;A担当]

## ■ 徳永 佳晃／Tokunaga Yoshiaki

東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員PD（日本大学）、2023年度渥美奨学生。専門はイラン地域研究・近代政治史で、主な邦語論文に「「不法な影響力の排除」を目指して：パフラヴィー朝成立期のイランにおける1304年選挙法改正(1925)」『歴史学研究』(1044)などがある。

## ■ 郭 立夫／Guo Lifu

中国出身。クアラルンプール建設大学言語情報学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻修士課程修了。同大学院地域文化専攻博士号取得。2024年より筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局助教。学部と修士課程の間では、北京LGBTセンターや北京クィア映画祭をはじめ、中国における性的マイノリティの社会運動に携わってきた。研究テーマはポスト／新冷戦構造における中国の性の政治。主な論文に「Medals and Conspiracies: Chinese and Japanese OnlineTrans-Exclusionary Discourses during the 2020 Tokyo Olympic Games」、「中国における包括的性教育の推進と反動：『生命を大切に：小学生性健康教育読本』を事例に」、「終わるエイズ、健康な中国：China AIDS Walkを事例に中国におけるゲイ・エイズ運動を再考する」などがある。

## ■ 銭 海英／セン・カイエイ Qian Haiying

中国出身。東華理工大学外法学部を卒業し、明治大学大学院教養デザイン研究科で修士号を取得、現在は博士後期課程に在籍中。成城大学文芸学部および神奈川大学外国語学部で非常勤講師を務める。2022年度渥美奨学生。専門は近代中国教育思想史。現在、第2750地区ロータリー米山学友会の会長エレクトとしても活動中。

## [企画・総司会]

■ シェッダーディ アキル／Cheddadi, Mohammed Aqil  
モロッコ出身。モロッコ国立建築学校卒業。慶應義塾大学政策・メディア研究科環境デザイン・ガバナンス専攻修士号取得・博士課程修了。同大学総合政策学部訪問講師。2022年度渥美奨学生。本フォーラムでは日本在住のアラブ人という視点からパレスチナ問題の現状や解決の可能性について考える。



## おわりに

[原文は英語、翻訳：金 美穂（同志社大学）]

この報告書をまとめるにあたり、ここに至るまでの道のりを振り返ってみたいと思います。それは、パレスチナについて対話や理解を促進するという当初意図していた目的をはるかに超えて、正義、歴史、人権についての誠実な議論を阻む可視化されているものや、そうでないものをも含めた障壁に立ち向かう場となりました。地政学的な問題としてのパレスチナに関して、より重要な課題である真実、連帯、そして私たちが共有する行動責任についての対話がなされました。

このようなフォーラムを開催する際に、障害に直面しなかったわけではありません。会場や組織的援助を確保すること、そして討論の場を設けることさえが、実は予想以上に困難でした。渥美国際交流財団には重要な対話の場を提供してきた長い歴史があるにもかかわらず、私たちは「見えない壁」、つまりパレスチナをオープンに取り上げようとしない姿勢に直面することになったのです。この経験は、このシリーズがいかに必要不可欠であるか、そして教育と対話によってこの壁を打ち破ることがいかに急務であるかを強く印象づけました。そのため、「パレスチナの壁：『わたし』との関係は？」の中心テーマとそれに続くディスカッションは、壁や国境という物理的な問題を超越したものとなったのです。グローバルな言説における感情的、思想的な隔たりをも掘り下げていきました。パレスチナ人の日常生活に影響を与える具体的な分断を表すと同時に、より広範な地政学的対立や文化的誤解の象徴としても立ちのぼる、といったように、パレスチナの文脈では、壁とは文字通り物理的なそれであると同時に比喩的なものでもあるのです。

私たちの議論は、現在進行形の悲劇の中で開催されました。2023年10月7日の出来事と、それに続くガザへの攻撃は、アパルトヘイト、占領、組織的暴力の残酷な現実を露呈しました。何千人もの民間人が命を落とし、さらに多くの人々が強制的に故郷を追われる中、私たちはさまざまな反応を目の当たりにしてきました。数々の人々が正義のために声を上げ、大量虐殺だと主張する反面、沈黙や加担を選ぶ人も少なくありませんでした。このことは、このようなフォーラムが非常に重要である理由を如実に物語っていると考えます。私たちが語る壁は物理的なものだけでなく、思想的、感情的なものでもあり、人々が不正義を認め、それに対して行動することを妨げる要因となっているのです。

三回にわたるイベントを通して、私たちはパレスチナを実に多角的に検証することができました。パレスチナの歴史的起源、認識を形成するメディアの役割、そして現状を維持し、入植者の植民地主義や占領を可能にさえしている政治的構造について考察しました。そして、解放を妨げ、開かれた対話を妨げる空間的、

感情的、心理的な障壁についても議論しました。更には、抵抗の形体であると同時にアイデンティティを保持する方法として、また甚大な苦難に直面してまでも希望を表現する手段として、文学、芸術、音楽といった文化の力に目を向けました。

このシリーズから得た最も大きな収穫のひとつは、パレスチナが単なる国際政治や宗教的宗派の問題ではなく、深く人間的な問題であると習得できたことではないでしょうか。この問題では、何世代にもわたって強制的に避難させられ、その声もしばしばかき消されてきた人々が主人公なのです。それは、支配者の論理に基づいて私たちのために構築された言説を超え、人道的理論に基づく真実を積極的に追求する私たちの集団的責任に関するものではないでしょうか。私たちは皆、意識を高めたり、運動に参加したり、あるいは人道的支援やパレスチナのアーティストや作家らを支持したり、さらには自分自身や周囲の人々に対して啓発を続けることなどを通じて、果たすべき役割を担っているのです。

この報告書は、単なる議論の記録ではなく、こういった作業を継続するための招待状とも言えるでしょう。有形無形の壁の原料がコンクリートであれ、イデオロギーであれ、沈黙であれ、その壁は一夜にして消え去るものではありません。しかし、オープンで率直に、そして粘り強く話し合い続けることを通じて、私たちは壁を少しずつ解体していくことができると思うのです。

パレスチナに関するこのシリーズに参加し、サポートし、実現に向けて協力の手を差し伸べて下さったすべての方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。私たち各自が学んだことを生かし、どんな形であれ、貢献できる方法を見つけてほしいと切に願うばかりです。それがアドボカシーであれ、教育であれ、あるいは単にパレスチナ問題への取り組み方を再考することであれ、あらゆる努力が今求められているのです。

企画担当

シェッターデイ アキル

## SGRA レポート バックナンバーのご案内

---

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」  
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1 回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2 回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」  
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3 回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」  
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4 回フォーラム講演録 「IT 教育革命：IT は教育をどう変えるか」  
臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、  
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5 回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」  
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6 回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」  
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTO に加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7 回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」  
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8 回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして  
フリーディスカッション  
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・ブートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、  
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9 回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10 回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」  
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行

---

|              |                                                                                                                |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SGRA レポート 18 | 第11 回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行                                                     |
| SGRA レポート 19 | 投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 栄濬<br>2003. 12. 4 発行                                                   |
| SGRA レポート 20 | 第12 回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：C O P 3 の目標は実現可能か」<br>外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行                                  |
| SGRA レポート 21 | 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30 発行                                                        |
| SGRA レポート 22 | 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行                                                        |
| SGRA レポート 23 | 第13 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」<br>宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行                                             |
| SGRA レポート 24 | 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行                                                      |
| SGRA レポート 25 | 第14 回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」<br>斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行                                  |
| SGRA レポート 26 | 第15 回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行                                                        |
| SGRA レポート 27 | 第16 回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」<br>竹田いさみ、R. エルドリッツ、朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行                             |
| SGRA レポート 28 | 第17 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」<br>宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行                    |
| SGRA レポート 29 | 第18 回フォーラム・第4 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行    |
| SGRA レポート 30 | 第19 回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」<br>宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行                                          |
| SGRA レポート 31 | 第20 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」<br>平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト<br>2006. 2. 20 発行   |
| SGRA レポート 32 | 第21 回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」<br>横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラバープ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、<br>角田英一 2006. 4. 10 発行 |
| SGRA レポート 33 | 第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行                                                           |
| SGRA レポート 34 | 第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」<br>島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャンナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、<br>セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行  |



- SGRA レポート 35 第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの?～」  
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート 36 第25 回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」  
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート 37 第1 回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」  
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート 38 第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」  
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」  
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート 40 第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」  
多紀保彦、加納光樹、プラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」  
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年—無理解と失敗から相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ  
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～  
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」  
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」  
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート 48 第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く—  
アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート 49 第33 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」  
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行

- SGRA レポート 50 第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」  
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」  
太多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」  
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、  
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート 53 第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること〜  
TABLE FOR TWO 〜」近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート 54 第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：  
東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史 シム・チュンキャット  
金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート 55 第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life 〜東アジアにおける都市・  
建築のエネルギー事情とライフスタイル〜」木村建一、高 偉俊、  
Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、  
葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート 56 第5 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」  
第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉  
第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン  
2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート 57 第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、  
ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島蘭 進、陳 継東  
2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート 58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15 発行
- SGRA レポート 59 第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300 年前の東アジア地域交流」  
朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40 回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」  
田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41 回SGRA フォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、  
劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録  
「Sound Economy 〜私がミナマタから学んだこと〜」 柳田耕一  
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉  
2012. 6. 15 発行

- SGRA レポート 64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」  
朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」  
赤堀侃司、影戸誠、吉圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998 年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭  
2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」  
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート 68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」  
（日本語・中国語・英語）宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」  
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46回SGRAフォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」  
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート 71 第47回SGRAフォーラム講演録「科学技術とリスク社会ー福島第一原発事故から考える科学技術  
と倫理ー」崔 勝媛、島菌 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート 72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」  
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート 73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRAフォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー  
物流を中心に」李 鎮奎、金 雄熙、榎原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 銅哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート 74 第49回SGRAフォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」  
劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート 75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」  
神崎智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート 76 第9回SGRAチャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年ー文化史からの再検討」  
劉 建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート 77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力ー共進化アーキテクチャ  
の模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート 78 第51回SGRAフォーラム講演録「今、再び平和についてー平和のための東アジア知識人連帯を考え  
るー」南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均宮、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行

- SGRA レポート 79 第52回 SGRA フォーラム 講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」  
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ  
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート 80 第16回 日韓アジア未来フォーラム 講演録「日韓の国際開発協力—新たなアジア型モデルの模索—」  
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート 81 第56回 SGRA フォーラム 講演録「人を幸せにするロボット—人とロボットの共生社会をめざして第  
2 回—」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート 82 第57回 SGRA フォーラム 講演録「第2 回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性—蒙  
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ  
バートル、向正樹、孫衛国、金甫枕、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート 83 第58回 SGRA フォーラム 講演録「アジアを結ぶ? 『一帯一路』の地政学」朱建栄、李彦銘、朴榮  
濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート 84 第11回 SGRA チャイナフォーラム 講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本磨充、呉孟晋  
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート 85 第17回 日韓アジア未来フォーラム 講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」  
孫赫相、朱建栄、文昊鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート 86 第59回 SGRA フォーラム 講演録「第3 回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世  
紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」三谷博、劉傑、趙珖、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許  
泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート 87 第61回 SGRA フォーラム 講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」  
沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート 88 第12回 SGRA チャイナ・フォーラム 講演録「日中映画交流の可能性」  
刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート 89 第62回 SGRA フォーラム 講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? ——不都合な真実を超えて」  
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵  
2019. 11. 1 発行
- SGRA レポート 90 第63回 SGRA フォーラム 講演録「第4 回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東  
アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川  
真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 91 第13回 SGRA-V カフェ 講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 92 第13回 SGRA チャイナ・フォーラム 講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、  
古市雅子、陳 龔 2021. 6. 18 発行



- SGRA レポート 93 第14回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀 繁美、劉 曉峰、塚本磨充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 94 第65回SGRA-V フォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート 95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 榮濬、西野 純也 2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート 96 第66回SGRA フォーラム講演録「第6回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 97 第67回SGRA フォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか—世界各地からの現状報告—」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2. 10 発行
- SGRA レポート 98 第15回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか？—空間アジアの形成と生活世界の近代・現代—」山室信一 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 99 第68回SGRA フォーラム講演録「夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性を探る—」ハンブルトン・アレクサンドラ、バラニャク平田ズザンナ、于寧、洪ユン伸 2022. 11. 1 発行
- SGRA レポート 100 第20回日韓アジア未来フォーラム講演録「進撃のKカルチャー——新韓流現象とその影響力」小針 進、韓 準、チュ・スワン・ザオ 2022. 11. 16 発行
- SGRA レポート 101 第69回SGRA フォーラム講演録「第7回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」韓 成敏 2023. 3. 22 発行
- SGRA レポート 102 第16回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「モダンの衝撃とアジアの百年—異中同あり、通底・反転するグローバリゼーション—」山室信一 2023. 6. 14 発行
- SGRA レポート 103 第70回SGRA フォーラム講演録「木造建築文化財の修復・保存について考える」竹口泰生、姜 璿慧、永 昕群、アレハンドロ・マルティネス、塩原フローニ・フリデリケ 2023. 11. 10 発行
- SGRA レポート 104 第21回日韓アジア未来フォーラム講演録「新たな脅威（エマージングリスク）・新たな安全保障（エマージングセキュリティ）—これからの政策への挑戦—」金 湘培、鈴木一人 2023. 11. 15 発行
- SGRA レポート 105 第71回SGRA フォーラム講演録「20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間」オリガ・ホメンコ、塚瀬 進、ナヒヤ、グロリア・ヤン ユー、マグダレナ・コウオジェイ 2023. 10. 30 発行
- SGRA レポート 106 第72回SGRA フォーラム講演録「第8回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか—教育・メディア・研究—」金 泰雄、唐 小兵、塩出浩之、江 沛、福岡良明、李 基勳、安岡健一、梁 知恵、陳 紅民 2024. 4. 12 発行

- SGRA レポート 107 第17回 SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東南アジアにおける近代〈美術〉の誕生」後小路雅弘  
2024.6.13 発行
- SGRA レポート 108 第22回日韓アジア未来フォーラム・2024現代日本学会春季国際学術大会講演録「ジェットコースター  
の日韓関係——何が正常で何が蜚気楼なのか」西野純也、李 昌玖、小針 進 2024.11.14 発行
- SGRA レポート 109 第74回 SGRA フォーラム講演録「第9回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：東ア  
ジアの「国史」と東南アジア」楊 奎松、タンシンマンコン・パッタジット、吉田ますみ、尹 大栄、  
高 艶傑 2025. 6. 20 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612 Email：sgra@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRA レポート No. 0110

第20回SGRAカフェ／第73回SGRAフォーラム／第22回SGRAカフェ 連続3回シリーズ  
パレスチナを知ろう

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)  
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8  
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512  
SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>  
電子メール: [sgra@aisf.or.jp](mailto:sgra@aisf.or.jp)

発行日 2025年6月20日  
発行責任者 今西淳子  
印刷 (株) 平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。  
©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

